
BLAZBLUE - のび太戦記異聞録 -

ハイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L A Z B L U E - のび太戦記異聞録 -

【Nコード】

N 5 3 5 0 I

【作者名】

ハイド

【あらすじ】

22世紀の未来、魔術と科学が融合した技術「術式」とそれを主体とする世界虚空情報統制機構が支配する時代。

その時代で彼らの支部を次々と壊滅させる男……。

彼の名はラグナ「ザ」ブラッドエッジ - またの名を野比のび太 - 世界を支配する「力」に対し、たった一人で戦いを挑む者の名であった。

そして、この物語は、蒼の魔道書を持った男と、彼を取り巻く者たちの物語である。

フリーゲーム『のび太戦記』と格闘ゲーム『ブレイブルー』を下敷
きにした小説です。

prologue (前書き)

これは格闘ゲーム、ブレイブルーとフリーゲーム「のび太戦記」を下敷きにしたドラえもん小説です。
ブレイブルー知らない人は分からないかもしれませんが。
それではプロローグですがどうぞ。

prologue

22世紀、黒き獣と呼ばれる魔物が現れ、世界の人口の半分を喰らった。だが突如現れた6人の戦士『六英雄』により黒き獣は打ち倒された、だが黒き獣は死ぬ間際に霧散し世界は魔素と呼ばれるものに覆われることとなった。これはそんな未来の物語。

22世紀のとある研究所。

そこでは何かの研究が行われていた。

この世の理である。「蒼」の力の研究である。

オペレーターが口々に状況を説明している。それを見ている科学者が居た。

「もうすぐだ・・・、もうすぐで蒼の力が手に入る。第七機関の驚く顔が見ものだ」

とくつくつくと笑う。

蒼の力・・・21世紀の末、発見されたアトランティスにて見つかった文献で世界の理と記されていた物。22世紀では術式と呼ばれる魔法にも似た科学技術はこの蒼の力を真似て作られたものだが、まだまだ未完成である。そのためここの研究所はこの蒼の力を研究していた。

そして今、それが完成しつつあった。

「やりましたね、博士。これが実現すれば『世界虚空統制機構』は・・・ん？なんだ？」

突如研究所でアラートが鳴り響く。

「大変です！！地上から高濃度の魔素を確認！！！」

「何だと！！？ここまで来て・・・。第七機関なのか！？いや、第七機関ならこれほどの魔素は出来ないはずだ・・・。」

地球の上空衛星軌道上で何かがいた。それは研究所を確認するとそれ目掛け、魔素のエネルギー波を放った。放たれたエネルギーは研究所を消し去ってしまった。

一体、何が起こったのか。それすら考えられず、研究所にいた研究員達はその何かのエネルギーに焼かれた。そして、研究所だった所には焼け野原が広がるばかりだった。

その焼け野原を一人、少女がたたずんでいた。顔つきからして日本人の少女だろう。ピンクの服は所々破けてボロボロ、靴も履いてはいなかった。

その少女の目はただ一点の虚空を見つめていた。

この少女は誰なのか？蒼の力とは何なのか？

全てが謎のまま・・・物語は始まる・・・。

原作：ドラえもんフリーゲーム『のび太戦記ACE』&アークシステムワークス作『BLAZBLUE』より
作：ハイド

BLAZBLUE - のび太戦記異聞録 -

第一部『CALAMITY TRIGGER』

EP1序章「ラグナ・ザ・ブラッドエッジ」(前書き)

最初に謝つときます。文がものっそい下手です。
温かい目で見守ってくださいね。

EP1序章「ラグナ・ザ・ブラッドエッジ」

22世紀の未来、アメリカの世界虚空統制機関第19支部。そこでの警備は真夜中でも厳重だった。何故なら最近物騒な事件が起こっているからである。たった一人の男に支部が壊滅させられるというものであった。

ラグナ・ザ・ブラッドエッジ・・・それが数多の統制機構支部を壊滅させた男の名前だった。

彼は突如現れ、支部を壊滅させた。その後、彼は世界各地に出没し、そこにある支部を全てつぶしたと言う。初めはラグナの存在を軽視していた上層部は慌てて、彼を国際指名手配、多額の懸賞金を賭けた。だが、それをかいくぐるかのように世界中の支部を壊滅させているのである。

さて・・・話を元に戻そう。

その支部をビルから眺める黄色のシャツの上から赤いコートを羽織り、袴のような黒いズボンをはいた銀髪に赤と青のオッドアイの青年。彼が先ほど説明したラグナ・ザ・ブラッドエッジその人であった。

「まったく・・・こんな夜中に警備なんざ熱心なこった」

と頭をかきながら呟く。

『そうだね・・・のび太君。ここは少し様子を見たほうが良いんじゃないかな』

とラグナの右腕から声が聞こえる。実を言うとラグナの右腕は本物の腕ではない。義手なのである。（しかも喋る）名はドラえもん。ドラえもんと言えば狸っぽい体つきをしているが、今は何故か、のび太の右腕（もちろん義手）になっている。なぜそうなった経緯はいずれ話そう。

ちなみにラグナ・ザ・ブラッドエッジも偽名である。本名は野比のび太だが、訳があって今はラグナと名乗っている。それもいずれ話

そう。

「うるせーよ、ドラえもん。知ってんだろうが、俺には時間がねーんだよ。つーか俺のことをのび太って呼ぶな」

ラグナは頭をかきながら続ける。

「それに支部にいる奴らは殺しはしねーよ。ちょっくら怪我はするだろうがな」

それを聞き義手・ドラえもん・はふうとため息をつく。（口は何処にあるか分らないが）

『のび太くん・・・ホントに君は何も考えないって言うか、無計画って言うかブツブツ』

「あーあー、聞こえないーい」

と耳をふさぐラグナ。

『まったくもう・・・』

「小言は終わったか？んじや支部まで転移の術式頼むぜ」
とラグナはそう言いながら右手を前にかざす。

『了解、転移の術式起動』

とラグナの右手が赤黒く輝き、魔方陣が展開される。それをラグナがくぐると彼の姿はそこにはなかった。

ラグナは支部の手前に転移した。なぜかというと、支部の内部には転移防御の術式が施されており、うっかり内部に転移してしまうと術式が作動し、弾き飛ばされてしまうのである。

「全く・・・転移防御の術式たあ・・・面倒なこった」

と目の前の支部のドアに向かって走り出す。もちろんドアにも進入防御の術式が施されており、ドアに手をかけようとした人間を黒焦げにするほどの能力を持っているが、そんなものはラグナには関係の無いことだった。

「ドラえもん」

『なんだいのび太君？』

「あれやるぞ、右手に解除の術式方陣張つとけ」

『あれって・・・まさか・・・』

ドラえもんの青ざめたような声をあげる。

「術式張ったか？んじゃ行くぜ！」

ドラえもん
と右手を振り上げる。

『ちょ・・・タンマ！！！！』

「オラアアアアアアアアアアアアアアア！」

ドガアアアアアアアアアアン！！！！

ラグナは力任せにドアをぶん殴り開かせる。これがラグナ流のドアの術式解除の仕方である。

「よし、進入完了」

『よし、じゃないだろ！！！！タンマって言ったじゃないか！！！！』

「悪い悪い」

『ほんとに君はバカだよ！もうちょっと穏便にしたらどうなんだ！？』

ドアが開くと同時に音を聴きつけたのであろう、警備員がラグナを取り囲み。口々に包囲されているだの何だのと言っているがラグナはそれを無視している。

『ほら見る！！！！君が正面からドアぶん殴って侵入するから警備員が集まってきたじゃないか！』

ラグナは左手で頭をかくと、

「お出迎えはいつものことだろ。ようはこいつら全員ぶちのめすだけではないんだよ」

とラグナはそう言うのと腰にかけてあった自分の背丈ほどもある大剣を取り出した。

「んじゃ、行くぜ！ドラえもん！」

『全く・・・しょうがないな』

右手に赤黒いオーラを纏わせ、警備員の大群に向かって走り出すラグナ。

一斉に発砲する警備員たち、さしずめラグナもこの一斉射撃にはなすすべなしか、だが

「遅せえ！」

刹那ラグナの姿が消える。いつの間にか彼は警備員の一人の懷にもぐりこみ剣の峰の部分で殴り飛ばす！すぐさま一人の警備員から拳銃を奪い、彼らの足を撃ちぬき行動できなくさせる。数十分後、警備員は全てラグナにのされてしまった。

ラグナはエレベーターで支部の最下層に降りる。

「確か・・・ここだったよな・・・」

「うん、たしかここだったはずだ、でもおかしいな・・・？」

「何が？まさか『奴』の練成がもう終わったのか？」

「いや、違う。あいつの気配が全く感じないんだ」

ラグナはそれを聞き怪訝な表情をする。

「おいおい、ドラミちゃんの情報だところだって聞いたぞ？まさか間違った情報じゃねーよな」

「あるいは練成が終わってあいつが運ばれたかだね・・・ん？」

突如最下層にアラームが鳴り響く。

『WARNING！WARNING！侵入者発見！侵入者駆除システム作動！』

その警告と共に侵入者駆除用ロボットが現れる。

「やれやれ、ここに『奴』がいねえんじゃ、ここに用はねえな・・・

ドラえもん！さっさとこいつらを片付ける！」あれ”を使うぞ！」

『了解！』

そう言うところラグナは目の前に右手を持っていく、そしてお互いの声を重ね合わせ宣言する！

『「第666拘束機関解放・・・、蒼の魔道書^{フレイタル}発動！！！」』

刹那、右手が赤黒いオーラに包まれ、紋章が現れる。

蒼の魔道書・・・それは蒼の力を秘めた魔道書である。現在、ラグナ・ザ・ブラッドエッジが所有しており、彼の右腕に擬態している。つまり、ドラえもん自身が蒼の魔道書そのものなのだ。何故彼がそれを所有していたのかはいずれ話そう。

さて、話を元に戻そう。

「行くぜ！ロボットども！」

とラグナはさっきまでとは違う速さでロボットを一つ一つスクラップに変えていく。その様子はまさに死神そのものであった。

アメリカの統制機構第19支部はこうしてラグナの手により壊滅した。だが、彼もまたいずこへと姿を消すのであった。なぜ消えたのかはそれは次回の講釈にて・・・。

T O B E C O U N T E N E W D

EP1序章「ラグナ・ザ・ブラッドエッジ」(後書き)

次回はのび太戦記ACEのストーリーにそって執筆したいと思います。

EP1-1「幻想界へ・・・運命の胎動」(前書き)

ここからゲーム、のび太戦記ACEのストーリーに沿って、物語を進めます。(多少、歪曲はありますが)
それではどうぞ。

EP1-1「幻想界へ・・・運命の胎動」

前述、ラグナがいずこへと姿を消した・・・と書いてあったが、なぜそうなったのかそれは警備ロボット軍団を全滅させた所から、さかのぼろう。

ラグナが蒼の力を解放し、かなりの数だった警備ロボットも次々と鉄屑スクラップに変えられ、あと1体となる。

「これで、最後だな。どりゃあああああああ！！！」

と持っていた大剣でロボットを一刀両断した。ロボットは断末魔の叫びをあげられず、そのまま起動停止し倒れる。

『終わったみたいだね、それじゃ、蒼の魔導書発動解除』
プレイブル

と右腕・ドラえもん・が蒼の魔導書の力を解除する。ラグナはため息をつきぼやいた。

「さてと・・・奴がいねーんじゃここにいる意味がねーし・・・さつさとここを出るか・・・ん？」

と気配を感じ、その方向を見やる。

『どうしたの？のび太君？』

とドラえもんの問いには答えず、目の前の方向を見ながら、声を強くしラグナは言う。

「おい、そこにいるのは分かってんだ。出て来いウサギ！」

「あいかわらず、勘はするどいのね」

と声が響き、何もない空間から、一人の少女と2匹の使い魔が現れる。

『レイチエルさんじゃないか、どうしてここに？』

とドラえもんが聞いた。

「ちよつとあなた達にいいことを教えてあげようかと思って」

「いい事？」

「奴が練成されている所はここではない・・・こことは違う世界・・・

の間で1人の女性がイシターと対面していた。彼女は女神イシター直属の戦士で数々の戦いをくり抜けてきた乙女の騎士ワルクューレである。

「ワルクューレ、参りました。イシター様、また世界に危機が訪れようとしているのですか？」

「ワルクューレ、あなたはどんな困難な使命でも受けてくれましたね……」

「それが私の使命です。イシター様。」
「うなづくワルクューレ。」

「ありがとうございます。ワルクューレ。…今回もまたあなたの力を借りる時が来たようです……」

「仰せのままに……」

「最近物質界で起きている事件のことは知っていますね。」

「ええ、確か未来の物質界（22世紀）から現代の物質界（21世紀）へと来た世界虚空間情報統制機構とかが猛威を振るっていると……それが何か……」

「彼ら、統制機構が世界を渡り歩くとき、微弱ながら微弱ながら空間転移の反応が出ているのです。…2年前（21世紀での）の戦いの際用いられた技術……もし統制機構がそれを知ったらどうすると思いますか？」

イシターの話を聞きワルクューレはある結論を言う。

「当然それを手に入れようとする……」

「そうですね。そして彼らの目的は過去の世界の植民地化……そして新たな世界を創ること。それが物質界のみならず、他の異世界も、ということだとしたら……」

「そのようなことになったら、異世界のあちこちで戦いが……」
「そう、とイシターはうなづき続ける。」

「過去に起きた魔大戦が再び起こり得るかもしれません……」

「そんな……！大勢の人々が苦しみ、世界が荒廃したあの戦いが……」
「そうならないためにあなたに来てもらったのです。これからあな

た達には幻想界の統制機構の支部をつぶしてほしいのです。」

「達？誰かが来るのですか？」

とワルキューレは首をかしげる。

「ええ・・・、実は私の友人が『統制機構の支部をつぶすなら人手が多いほうがいいんじゃない？なら一人暇な奴を送るから、そいつと一緒に支部をつぶしなさい』と言ったんです」

「そ・・・そうですか・・・」

と苦笑するワルキューレ。

と、イシターは何かの気配を感じる。

「・・・来たようですね」

と上を見上げる。すると上から穴が開き、

「うわああああああああああああああああああああ！！」

！

とラグナが落ちてきた。そしてそのまま床に大の字に叩きつけられる。

「・・・」

突然のことですりアクションをとったらしいかわからないワルキューレだった。

「いつててて・・・あのウサギ・・・もちつと高さとか考えろつての・・・ってここはどこだ？」

と首を振りながら起き上がるラグナ。

『どうやらここが神界みたいだね、のび太くん』

とドラえもんも言う。

「イシターさま、この男性が・・・」

「ええ、レイチェルが言っていた。蒼の魔導書を持つもの。ラグナ・ザ・ブラッドエッジです」

「ん？もしかしてあんたがウサギの言っていた。知り合いか？」

「ちよっ！あなた！いきなりイシター様に《あんた》とは何ですか！」

とラグナにつっかかるワルキューレ。

「様？まるで偉い人みてーだな」

とラグナは頭をボリボリ搔く。

「偉い人みたいじゃなく実際そうですよ、このお方は女神イシター様です」

「女神サマと知り合いつて・・・ウサギの奴も人脈広いんだな・・・」

とレイチエルの人脈に感心するラグナ。

「始めましてラグナ。私は女神イシター。この神界を治めるものです。それでこちらはワルキューレ、私の従者です。」

「ああ、よろしく。ん？ちよつとまった。何で俺の名前を知ってるんだ？自己紹介した覚えはねーけど」

と首をかしげるラグナ。

「あなたのことはレイチエルから聞いてますよ。口は悪く、暇人な奴だけど、結構腕っ節が強いって」

「そりや光荣だな・・・（ウサギのやろう・・・今度あつたらケツ叩きだ・・・）」

と話をしている途中だった。その時、再び空間転移が起こる。

「何だ！？」

と後ろを振り向く。

「まさか・・・もう」

気配ある場所から妙な黒い球体が現れ、それが消えた頃には武装した10人の兵士が立っていた。

「ちつ！統制機構やこらかよ！」

とラグナが毒づく。

「隊長！神界への転移完了しました。捕獲対象、女神イシター確認！」

「よし、作戦を実行だ」

「ちよつと待ってください！隊長！あれは・・・」

とラグナを指差す。ラグナに気づいた隊長の表情は驚きの色に染まっていた。

「ラグナ・ザ・ブラッドエッジだと！？どうしてここに！？」

「どうしてここに・・・じゃねえよ馬鹿。ちようどいいや、ちよつちてめえらに聞きてえことがあるしよ・・・」

そついうとラグナは腰にかけてある大剣を手に持ち兵士達に駆け出す。

「ワルキューレとか言ったな、こいつらをさつさと片付けるぞ！」

「え・・・あの・・・はい！どの道この方達は敵ですから！ワルキューレ！参ります！」

とワルキューレも剣を抜き兵士達に斬りかかる！

「オラア！」

と銃撃をかくぐり、ラグナは剣の峰で兵士達を昏倒させ、

「ハアアアア！」

とワルキューレは舞うような剣舞で兵士の武器を破壊し、戦闘不能にさせる。

「ぐ・・・くそっ！」

と隊長は拳銃を抜き、ワルキューレを狙おうとする。

「遅せえ！！！」

とラグナは持っていた大剣を銃に変形させ、すばやく発砲し兵士の持っていた拳銃をはじく。

「うわっ！！！」

「・・・！！ありがとうございます」

「いいって・・・、お礼はこいつの尋問が終わってからだ」

とラグナは言い、隊長に詰め寄る。

「ひいっ！！！」

「まあ待てよ、殺しはしねえ。ちよいと聞きたいことがあるんだが・・・」

と銃に変形させた大剣を突きつけ、続ける。

「お前ら何の目的でここに来たんだ？」

隊長はしどろもどろになりながら答える。

「われわれの目的は・・・そこにいる女神イシターの捕獲だ・・・」

「イシター様を！？何のために！？」

と今度はワルキューレが詰め寄る。

「『聖女』の一人であるイシターのDNAを採取し、新たな次元接触用素体を作る・・・それが目当てらしい・・・」

と、ピリリと隊長の無線がなる。すぐさま隊長は出る。

「はい、こちら第9部隊・・・はい・・・分かりました」

と無線を切り勝ち誇ったように笑う。

「はーっはっはっは！ラグナ・ザ・ブラッドエッジとその他！今、第8部隊があれの奪還に成功したらしい。速攻で量産型を作り、一体だけだが、こちらに送るそうだ！これで貴様らも年貢の納め時だ！」

「はあ？何言つてやがんだ？」

と訳が分からないラグナは怪訝な表情をする。

「どうやら、とんでもないものがやってくるそうですね・・・。あつ！」

と神殿の入り口付近に再び空間転移現象が起きたのだ。するとそこには、4mはあるロボットが立っていた。

「な・・・なんだありや！？」

「あーはっはっはっ！これこそが対グノース用に作り出された人型兵器、Anti Gnosis Weapon System、略称A・G・W・Sだ！」
エイグス

「グノース？エイグス？さっぱりわからん・・・もうちょい分かりやすく言えよ。」

「グノース！？たしかシオンさんのいる世界に存在する魔物・・・あなた達は物質界の未来（22世紀ではない所）にまで侵攻しているのですか！？」

「ふはははっ！そうだ、別部隊が我が統制機構の戦力増強のため、このエイグスの強奪、そしてたしか金色をした妙な物体を手に入れるのに必要な娘の奪取のために我々がいる、22世紀より遙か遠い未来に赴いたのだが、娘の方は失敗したそうだ・・・さてそろそろ消

えてもらおうか！」

と隊長はエイグスに乗り、攻撃を開始する。

「おい、あんた」

とラグナはワルキューレに言う。

「はい」

「俺から離れてろ。俺はこいつをぶつ潰す。行くぜ、ドラえもん！」
ラグナの掛け声にドラえもんが応じる。

『分かったよ、のび太君。防御結界の術式発動！』

と右手が赤く発光し、イシターとワルキューレを輪のようなものが包み込む。

「防御結界の術式を張つといたから二人とも、そこから動くんじゃねえぞ」

そう言うところラグナはエイグスに向かって駆け出す。

「生身でエイグスと闘り合うつもりかっ！！！」

と巨大な拳でラグナに殴りかかる。それをラグナはかわす。

大剣を右手に持ちエイグスを切り上げる。

「インフェルノ・デイバイダー！！！」

「ぐおおおっ！！！」

赤黒い瘴気を纏い、切り上げる必殺技『インフェルノデイバイダー』がエイグスに炸裂する。エイグスの機体に亀裂が走る。

そしてそのまま剣をしまい、拳を振り上げ、エイグスに拳骨をかます。

「ガントレットオ！」

エイグスが前のめりになる。そして、蹴り上げた！

「ハーデス！！！」

エイグスは殴られ、蹴られたところがひしゃげる。

ラグナは地面に着地し、剣を再び抜く。

「脱出しとけよ」

とそう言う。一体何をするつもりなのか。

「デッドスパイク！！！」

と剣を地面に突き立てる！すると地面から獣のような赤黒い瘴気が現れ、エイグスに喰らいつき、飲み込んでしまった。

「う、うわああああああああああ！！！」

と隊長は脱出できずにそのままエイグスと運命をともにした。

「あーあ、だから脱出しとけていったのによ・・・」

とラグナはそう言いながら剣を収めた。

数十分後・・・、統制機構の兵士達を地下牢に閉じ込め、片づけが終了した。そしてワルキューレと共に、幻想界へと旅立つ。

「んじゃ、行ってくるぜ」

「行つて参ります。イシター様」

と統制機構から奪った、次元転移術式装置を手にイシターに別れの挨拶をするラグナとワルキューレ。

「武運を祈っております」

とイシターはにつこりと笑う。

ラグナ達は術式装置を起動させ、幻想界へと向かうのであった。

TO BE CONTINUE・・・

EP1-1「幻想界へ・・・運命の胎動」(後書き)

ドラえもんがセリフが少ないな・・・。次回はゼノサーガキャラが登場しますよ。

EP1・2「並走せし齒車」何故、神界でエイグスが送られてきたか」（前巻）

この話はラグナが神界へ向かう最中に起こった、超未来での話です。よってラグナは今回は出番なしです。（のび戦ACEでもそうだったので）

会話文だらけで文章は少なめだったりします。それではどうぞ。

EP1-2「並走せし齒車」何故、神界でエイグスが送られてきたか？」

ラグナがレイチエルにより神界へと送られている同時期の超未来。（22世紀ではない）

ウォーグリンデ艦内、この艦は宇宙を航行するヴェクター・インダクトリー社製の巨大な宇宙艦隊である。この艦のブリッジ内で館長らしき人物と一人のエンジニアらしき女性が話をしていた。

「ほおー、なかなか素晴らしいデータではないか。シオン君。うむ、実戦データも申し分ない。」

「ありがとうございます、艦長。」

と女性、シオンが微笑みながら返す。

「ところで今、KOS-MOSはどうしている？」

KOS-MOSというのは対グノースス用の女性型戦闘アンドロイドのことであり、シオンは彼女のことを本当の娘のようにかわいがっている。

「えっ？KOS-MOSなら調整室で自由にさせてますけど？」

「ハア？何をやっとなんだ。いつでも戦闘出来るように充電しとかなくてどうする！」

「ええっ？で、でも傍にはアレン君がいますし、それにあの子にも人としての心も教えてあげたいし……。」

すると、館長はバンと、デスクを叩く。

「ロボットが心を持つ時代ではないのだぞ！KOS-MOSもレアリエンもただ戦う兵器でいいんだ！」

シオンはその言葉にカチンときたのか館長に詰め寄る。

「艦長！それは問題発言ですよ！確かにあの子は対グノースス用に作られたものだけど人の心を持つ権利だってあるはずですよ！」

「ええい！うるさい！前のヴォークリンデのときも早く起動させておけばあんな事にならずにすんだのだぞ！」

「そ、そんな……」

「とにかく！KOS・MOSは充電しておけ、いいな！」

「…はい。」

シオンはこの男に何を言っても無駄だと思ったのだろう。ため息をつきながらKOS・MOSの調整室に戻ってきた。

「ただいま。」

「お帰りなさい、主任。あれ、その様子だとまた艦長と口論になったみたいですね。」

と出迎えたのは、シオンの部下であるアレンだった。

「ええ…、あの人つたらずにKOS・MOSやレアリエンを兵器扱いするんだから…。」

とはあ、と再びため息をつく。

「軍人には主任の考えは理解できませんよ。」

「あゝあ、あの人は何の障害もなくM・O・M・O・ちゃんやKOS・MOSを受け入れたっていうのに…。」

「あの人達つて2年前に主任が過去に行つて協力して一緒に戦つたつていう人達ですか？」

「2年前の戦いですか？懐かしいですね。」

とピンクの髪の少女M・O・M・Oが懐かしそうにいう。

「そうか。M・O・M・O・ちゃんも戦つたんだっけ？」

「はい。あの時、M・O・M・O・は観測用じゃなくて戦闘用になつてましたよ。」

実を言つとこの少女M・O・M・Oも人間ではない。グノーシスを観測するために作られた存在。レアリエンなのである。

2年前の戦いというのはゲーム『ナムコクロスカプコン』のストーリーであり、作者はナムコクロスカプコンをやっていないので、詳しくはWIKIとかで調べて欲しい。（汗）

「いいなあ、僕も過去に行つて太古の魚釣つてみたかったな。それにその人達とも色々話してみたかったなあ。」

とまだ見ぬ過去の旅に思いをはせるアレン。

「アレンさんならすぐに仲良くなれる人達ばかりでしたよ。」

そうよねとM・O・M・Oに相槌を打つシオン。

「あんまり楽しかったばかりとは言えないけどね。KOS・MOSなんか整備する場所がなかったものだから、あちこちボロボロになっちゃって大変だったんだから。」

そのとき、ずっと調整槽のそばに立っていたKOS・MOSが話しかけてきた。

「シオン。」

「あら、何、KOS・MOS?…あつ忘れてた。艦長があなたを充電しろってうるさいの。あなたには残念だけでもう一度眠ってもらうことになっちゃって、ごめんね。」

「わかりました。…お休みなさい、シオン。」

「はい、よく出来ました。お休みなさい、KOS・MOS。」

そう言うときKOS・MOSは自分の調整槽の中に仰向けに入った。

シオンはスイッチを押して、その蓋を閉めた。

「そう言えば主任。主任も休んだほうがいいですよ。最近働きすぎですからね。」

「うん、わかったわ。あつ、M・O・M・O・ちゃん、これからレアリエン整備室に行くけど一緒に来る?」

M・O・M・Oはにつこりと笑う。

「はい。行きましょう、シオンさん。」

「じゃあアレン君、KOS・MOSのことよろしくね。」

そういうときM・O・M・Oの手をとり整備室へと向かう。

「任せてください、主任。」

シオンとM・O・M・OはKOS・MOSの調整室を出て、レアリエン整備室に向かった。

「やあ、シオンさん。わざわざごくろうさまです。」

「いえ、レアリエンのみんなにはいつも元気できて欲しいですからね。じゃあM・O・M・O・ちゃんも入って。」

「はい。シオンさん。」

今度はM・O・M・Oがガラス張りのケースの中に入った。この

ケースは言わば、体調管理をするためのものである。

「うん。どこにも異常なし。バッチリね。」

とシオンはM・O・M・Oの体の異常を調べ、判断する。

「すごいですね。アンドロイドの整備だけでなく、レアリエンの方もこなすなんて・・・。」

とカウンセラーはシオンのスキルの凄さに目を丸くする。

「ええ。私実はこっちの仕事をしてみたかったです。今の仕事が終わったら転属願いを出すつもりなんですよ。」

その時、シオンは急にめまいがした。カウンセラーの人が支えていなければ、危うく倒れるところだった。

「だ、大丈夫ですか？」

と心配そうにシオンの顔色を伺うカウンセラー。

「え、ええ…大丈夫です。」

そう言いながら何とか立ち上がるシオン。

「ご自分の体調管理も大切ですよ。ここは私に任せて、仮眠してきたらどうです？」

「はい…。じゃあ、よろしくお願いします。」

こうしてシオンは少しふらふらしながらも、自分の部屋に戻り、ベッドに横になった。

「ふう…。確かに少し働きすぎたのかな…。自分の体調管理もちやんとしないとね…。…今まではコンピューターとずっとにらめっこの毎日だったけどああして戦う日々というのも悪くなかったわね。みんなどうしているかなあ…。」

シオンがもの思いに耽っていると、突然警報が鳴りだした。

「き、緊急警報！？どうして・・・。」

と突然のことに狼狽するシオンだった。

その頃、ブリッジ内

突然の緊急警報に驚きを隠せないのは艦長たちも一緒だった。

「何だ！一体何が起きたんだー！！」

「前方空間に大規模な空間歪曲をキャッチ。大質量体がゲートアウ

トしてきます！」

「コラム有効領域の外だと!？」

「U・M・N・のジオデシック構造体が強制置換されています!」

「対象は何らかの方法を使ってU・M・N・に干渉している模様。」

「重力閉鎖甚大です!」

「質量算出中…質量界の一致断裂、明確な数値が出ません!」

「波高が!？」

「これじゃあまるで津波じゃないか!」

「質量予測値増大…通常空間に実数化します!」

「艦長!！」

「正面来ます!！」

正面には半透明な化け物・グノース・が艦隊の前に立ちふさがった。

「グ…グノースか!」

艦長は恐怖を込めてつぶやいた。

警告アナウンスの放送が全艦隊に流れた。

「コンディションレッド発令!コンディションレッド発令!艦隊はゲートアウトしてきたグノース軍と戦闘を開始する!エイグスパイロットは至急搭乗し応戦せよ!戦闘用レアリエンは自分の持ち場に着け!なお、非戦闘員は独自の判断で脱出ポッドを使うことを許可する。」

アナウンスが終わると同時に、あちこちで爆発音が聞こえてきた。

「グノース!?!どうしてまた!?!…そうだ、M・O・M・O・ちやんが整備室に!」

シオンは腕にM・W・S・を装着するとレアリエン整備室に急いだ。幸い、整備室に着くまでの道でグノースには会おうことはなかった。

何故ならばグノースは霊体のような存在であることをして、実体化させなければ攻撃出来ないからである。そのあることができるのはこの艦隊ではKOS・MOSとM・O・M・O・だけしかない

のだ。

ともかく、無傷で整備室に着いたシオンは急いでM・O・M・Oの入ったケースの蓋を開けた。他のレアリエンは戦闘用なので、すでにケースは空だった。

「あっ、シオンさん。お早うございます。」

とM・O・M・Oは笑顔で挨拶する。この様子だと何も知らないようだ。

「M・O・M・Oちゃん！今、この艦にグノーススが襲ってきているのよ！」

「えっ！グノーススですか！？」

と驚愕の表情を浮かべるM・O・M・O。

「とりあえず、M・O・M・Oちゃんのヒルベルトエフェクトで近くのグノーススだけでも固着して頂戴！」

「はい！わかりました！：ヒルベルト、発動。」

すると、M・O・M・Oの体から淡い光が放たれた。そしてその光は広範囲に広がっていった。これがヒルベルトエフェクトという装置で簡単に言えば、グノーススに攻撃出来るようにする装置である。難しく言うと、虚数空間に存在するグノーススが実数空間、つまり我々の世界にいるとき、虚数存在であるグノーススを実数で表す装置らしい。（作者はゼノサーガとかやってないのでまるっきりわからないんだが・・・）

「ま、まあ 詳しいことは皆さんの方で調べてね（；。）」

「シオンさん。誰と話してるんですか？」

とあさつてのほうを向いて話しているシオンに突っ込むM・O・M・O。

「えっ？い、いや、何でもないのよ。（；。、）じゃあKOS-

MOSのところに行きましょう。」

「はい！」

話は変わり、ブリッジでは。

「百式レアリエンがヒルベルトエフェクトを展開しました。この艦

から半径1kmのグノーススを固着しました。」

「アンプリファイアーを作動せよ！少しでも多くのグノーススを固着するのだ！」

艦長の呼び声に応じ、オペレータはボタンを押す。

「アンプリファイアー起動！半径60km内のグノーススの固着に成功！」

「以前はヒルベルトエフェクトを展開できなかったが今回は違うぞ……艦砲発射と同時に光子魚雷一番から三番まで発射！イーゲルシュティンはオート操作で行え！全艦隊に通達、アンプリファイアーを起動しヒルベルトの波高を増幅せよ！」

一方、シオンとM・O・M・O・は襲い掛かるグノーススを倒しながら調整室へと急いでいた。

「シオンさん！あれを！」

M・O・M・O・が指差した方には通路にグノーススが4体集まっていた。

「ここを通らなきゃ調整室へは行けない……。やるわよ！M・O・M・O・ちゃん！」

とM・W・Sを構えるシオン。それに応じてM・O・M・Oも装備しているロッドを構える。

「はい！M・O・M・O・、頑張ります！」

そしてグノーススに向かっていく、シオンは胸中でこんなことを考えていた。

（でも、どうしてこの艦を襲うの？今回はアレを積んではないのに……。色々と考えることはあるけど、行動あるのみね！）

再び話は変わり、ブリッジでは。

「グノースス、残り1000体まで殲滅完了。」

オペレータの報告に満足そうにうなづく艦長。

「ふふふ……飛んで火に入る夏の虫とはこのことだな。一気に片付ける！」

とそこへ、

「艦長！」

オペレータの一人が艦長に向かって言う。

「何だ！騒々しい！」

「艦隊の周辺で空間転移現象が起きています！」

これにはグノーシス相手にいい戦績を残せて上機嫌だった艦長も驚いた。

「何だと！？」

「何だこれは！？規模は小さいがあちこちで無数に発生しているぞ……！艦長！反応はこのブリッジ内にも発生しています！」

「何い！？」

オペレータのその言葉通り、ブリッジ内、入口付近で空間歪曲が発生した。そしてなんと統制機構の兵士が転移してきたのだ。その中に1人だけ雰囲気の違いリーダー格の男がいた。

「長官！統制機構第9番部隊、目的地に無事到着しました！」

長官と呼ばれたリーダー格の男は満足そうにうなずく。

「よし、さっそく作戦に取り掛かるぞ。」

「何なんだ、貴様らは！？」

「貴様がこの艦の艦長か……。この艦は我々が乗っ取った。これから我々の指示に従ってもらう。」

「はあ！？何を言ってる……」

艦長の言葉をさえぎる男。

「我々はこの艦隊に積まれているエイグスの強奪、そして百式観測用レアリエンのプロトタイプを誘拐……じゃなくて奪還しに来た。」

「百式だと！？まさか貴様らはU・TIC機関か！？」

艦長の言葉に男はいいや、違うな。と首を振る。

「我々はそんな野蛮な組織ではない。もちろん、無関係だ。ただ……この時代の人間ではない……ということだけは教えてもよからう。」

艦長はわけが分からないのだろう、頭に疑問符を浮かべている。

「さあ、百式を渡してもらおうか、さもなれば……」

「ふんつ。わしらを殺す気か？わしらを殺せば操縦者がいなくなるのだぞ？」

男はバカが、と言った後。

「誰が殺すと言ったかね？おい！やれ！」

と取り巻きの統制機構の兵士に命令した。そして兵士達は、オペレータの前にある、コンピュータの所へ行くと、

「失礼しまーす、ポチツとな。」

とアンプリファイアーのボタンをOFFにする。

「あつ！なんてことを！艦長！アンプリファイアー停止！グノーシス固着範囲、半径1kmまで減少！」

「何だと！？」

と狼狽する艦長。

「はははっ。さすがはドラコルル長官。思いつく作戦は全て悪いことばかりですね！」

と褒めてるのかバカにしているのか分からないセリフを言う統制機構の兵士。そう、この男、かつてピリカ星で、のび太（後のラグナ）達と戦ったギルモア將軍の手下、ドラコルルだったのだ。

「フツ、まあな。…それって褒めてんのか？」

とノリツツコミを兵士にかますドラコルル。

「なんて事をするんだ！こんな事をすれば、貴様らもグノーシスに殺されるぞ！」

艦長の言葉にドラコルルは『バカかお前』と言うような顔で笑った。

「はははっ！我々は飼い主を噛む飼い犬を連れてきたりしないさ。」

「か…飼い犬だと！？そんな…まさか、そんなはずが…」

艦長の言葉を無視し、

「さてと、仕事を再開するか…」

ドラコルルは冷酷に言い放った。

一方、シオン達はKOS・MOSの調整室になんとかたどり着いていた。そこでは、すでにアレンがKOS・MOSを起動させて待機していた。

「アレン君！KOS・MOS！無事だったのね！」

「はい。主任もご無事で。さっき充電が終わってやっと起動させました。」

「ご苦労さま、アレン君とポン、とアレンの肩を笑いながら叩き褒めるシオン。」

「アンプリファイアー無しで広域にヒルベルトを展開出来るのはあなたしかいないわ、KOS・MOS！」

「了解しました。ヒルベルトエフェクト、展開します。」

「そう言うとKOS・MOSは額に取り付けてある装置を起動させた。すると、先ほどのM・O・M・Oのように青白い光を広範囲に放った。」

「よし、とりあえずこれで一安心ね。あ、アレン君。ブリッジと連絡ついた？」

「ええ・・・とシオンの問いに答えるアレンだが、はあ・・・とため息をつく。」

「それがさっきから何度もやってるんですが全く連絡がつかないんですよ。」

「：まさか、もうグノーシスにやられちゃったんじゃない？」

「そんな！それじゃあこの艦は今無人で動いていることになりますよ！？」

「いいえ、シオン。とKOS・MOSは否定する。」

「今この艦には一定方向のベクトルを感じます。ですがこの艦のブリッジには複数の熱源反応があります。何故人がいるのに先ほどの航行ルートを逸れているのかは現在の状況では情報不足です。自分達の目で確認すべきだと判断しますが？」

「相変わらず、的確な意見ね。よし、ブリッジに向かいましょう。」
「こうしてシオン達はブリッジの様子を確認するためにブリッジへと急いだ。」

途中で襲い掛かってくるグノーシスは殆ど、KOS・MOSが掃討したので、道中は楽だった。だが、所々の扉やエレベーターが動か

なかったりしたので、遠回りをする羽目にはなったが。そんなこんなでようやくブリッジにたどり着いたシオン達が見たものは統制機構兵士2人とグノーススを2体連れて立っているドラコルルだった。「フッ、やはり来たか。」

「誰ですか、あなた達は！？…あつ、艦長！」

よく見ると兵士に艦長が抑えつけられていた。

「あわわわ…な、何であいつらのそばにグノーススがいるんだ！？しかも襲わないし…。」

とグノーススを見て、慌てるアレ。

「成分を検索します！…あれは複製された個体のようです！」

「グノーススを…複製！？じゃあこの襲撃はあなた達が！？」

とシオンの問いにドラコルルは拍手をしながら言う。

「ご名答。我々の目的はエイグスの強奪とその百式を手に入れることだ。」

「M・O・M・Oちゃんを！？まさかあなた達はU・T・I・C機関なの！？」

ドラコルルは拍手をやめ、ふう…とため息をつく。

「またそれか…。我々はこの時代の人間ではない。」

「ええっ！？じゃああなた達は過去の人間なの！？」

「その通り。未来の優れた技術が用いられた兵器を過去に持ち帰れば統制機構にとっては相当な戦力となる。それに…アレを手に入れるにはその子が必要だそうじゃないか。」

とドラコルルの言葉にはっ、とシオンは気づく。

「アレ…ってゾハルのこと！？あなた達は一体何をするつもりなの！？」

「さあな、上層部の連中なら知ってるだろうが、まあいいさ。さてと、じゃ大人しく百式を渡せ。さもなくば…わかるな？」

と艦長に目配せをするドラコルル。

「ヒイイイ！お、おい！助けてくれ！」

「くっ…」

あれ？」

しかしよく見てみると、ドラコルルの手元にいたのは、M・O・M・O・ではなく、KOS・MOSだった。シオンがM・O・M・O・を押し出した瞬間、KOS・MOSはM・O・M・O・を押しつけて身代わりになったのだ。だが、そのまま大人しく捕まっているようなKOS・MOSではなかった。

「てやつ！」

「グベバ！！！」

KOS・MOSはそのままドラコルルをおもいきりぶん殴った。

その衝撃でドラコルルは意味不明な悲鳴をあげ、後ろにいた兵士と一緒に壁まで吹っ飛ばされた。

ガシッ！

「へ？」

「はあっ！」

「うわあああああっ！！！！あぎゃ！」

『グガッ！！！！』

『ガゴッ！！！！』

次にKOS・MOSは艦長を捕らえている兵士に素早く接近し掴み、それをハンマー代わりにして、2体のグノーススをまとめて殴り飛ばした。その兵士は余りの衝撃に気を失っていた。KOS・MOSはその兵士をポイツと投げ捨てると艦長を連れてシオンの下に戻った。

「任務完了しました。シオン。」

その有様を見ていたシオンは半眼で苦笑しながら言った。

「…相変わらず、乱暴ね。でもよく出来ました。じゃあ急いで脱出するわよ。」

ところがブリッジを出ようとした矢先、倒したはずのグノーススがシオン達の前に立ちはだかった。

「えっ？そ…そんな！？このグノーススはさっきKOS・MOSが

…」

「…改めて成分を検査してみました。このグノーススは今までの個体よりも強化されているようです。」

「はははっ！そいつらは特別に強化されたグノーススよ！」

なんとあれだけ吹っ飛ばされたドラコルルが服をはたきながら、何事もなかったかのように立ち上がっていた。

「そなたっ！？KOS・MOSの一撃をあんなに近距離でくらったのに！？」

アレンは信じられないといった表情で驚く。

「死ぬほど痛かったが・・・俺はこの程度じゃやられはせん！さて、卑怯者には制裁を加えてやらんとなあ・・・いくぜ！」

と手の関節をボキボキ鳴らしながら4人に向かってくるドラコルル。

「あなたが言えたことじゃないと思うけどね…（ボソリ）」

とボソリと呟くシオン。そこへKOS・MOSがシオンに向かって言う。

「シオン、M・O・M・O、アレン。あなた方には2体のグノーススの相手をお願いします。私はこちらの敵性体と交戦します。」

「わかったわ。KOS・MOS！じゃあM・O・M・O、ちゃん、

アレン君、いくわよ！」

シオンはうなずくとM・W・Sを構え、グノーススに向き合う。

「はい！M・O・M・O、頑張ります！」

「任せてください！主任！」

こうしてKOS・MOSはドラコルルと、シオン達はグノースス2体と戦うことになった。

シオン達の方はシオンとM・O・M・Oが主力となり、アレンは後方からのバックアップという形をとった。（と言うか物陰に隠れるというだけだが）

何故ならシオンとM・O・M・Oは2年前の戦いに参加していたので、ある程度戦い慣れしていたのに対し、アレンは戦闘経験0の上に性格が災いして、前衛には不向きだからである。とは言っても強化されているとはいえ、グノースス自体の強さはいいて変わら

ず、耐久性が上がっている点だけが強化されていた。

シオンは1体のグノーススの攻撃をかわし、その隙に、M・W・Sのソードで真つ二つにした。

「さすが主任！」

と拍手をする。がもう一体のグノーススがアレンに向かってくる。

「ひゃあああああ！！！」

「させません！プチメテオ！！！」

とロッドを変形させ、グシャリ、とグノーススを叩き潰すM・O・M・O。

2体のグノーススは撃破された。

一方、KOS・MOSの方はお互いに譲らない激しい戦いとなっていた。

ドラコルルはどうやら肉体強化手術が施されていたようで、パワーやスピードも戦闘用アンドロイドのKOS・MOSに引けを取らないほどだった。

（しっかし・・・、こりやばいな・・・）

ドラコルルはあくまでも生物であるがために、長時間の戦闘でスタミナが落ち始め、さらに最初のKOS・MOSの奇襲でダメージを受けていたのもあって、徐々にKOS・MOSが押し始めた。

「KOS・MOS！加勢するわ！！！」

それに加えて、強化型グノーススを倒したシオン達が加勢のためにこちらに向かってきたのが見えたので、ドラコルルはこのままでは不利だと判断した。

「くっ…なかなかやるなあ…。他の艦に派遣した残存部隊を連れてくる！待っている！」

そう言うと、ドラコルルは懷から煙玉を取り出して、自分の少し前に放り投げた。そして爆発すると同時に走りだし、爆風を追い風として利用し、そのままブリッジから逃げ出した。

「あっ！逃げられた！」

「追走しますか？私の移動速度なら追いつけますが？」

「…いえ、だめよ。今はこの艦を脱出するのを優先させましょう。」
遅れてアレンもやってくる。

「いやあ、とにかくみんな無事で良かった…あれ？艦長がいませんよ！？」

「艦長なら先ほど我々が戦闘中にいち早くブリッジを出て行くのを確認しています。おそらく、この艦の脱出ポッドの所に向かったと考えられます。さらに報告ですが、この艦のエンジンが後8分16秒07で火を吹いて爆発すると推定されます。」

とやれやれといった感じでアレンはため息をつく。

「全く…一体何なんですか、今回の艦長は…って爆発！？ここにいたら死んじゃうじゃないか！？それにKOS-MOS、戦闘中にそんな事がわかっていたならどうしてもっと早く倒さなかったの！？」「申し訳ありません。ですが今の私の最大出力は40%までしか上がりません。おそらく起動の際に何かしらのトラブルが起きたようです。」

「今はそんな事よりも早く脱出しなくちゃ…でも今から脱出ポッドの所に向かったんじゃ間に合わないわね…。」

とそこへKOS-MOSが提案する。

「…シオン。調整室に行きましょう。」

「おいおい…まさか充電したいなんて言うんじゃないだろうね…。」と呆れ顔のアレンだが、シオンには思いつく節があった。

「…充電…まさかKOS-MOS！？」

ええ、そうです。とKOS-MOSはうなずく。

「このままでは私達は99.99%の確率で死にます。ですが、残りの0.01%はあの部屋である時のようにエンセフェロンダイブを行うことです。今もこの艦には、小さい時空の歪み、ゆらぎ、が発生しています。エンセフェロンダイブを行えば、何らかの現象で過去との接点が合い、過去の世界へ飛ぶ事が出来るかもしれません。」

「そんな無茶苦茶な…」

「でもそれしか方法はなさそうね…。実際に私達はそれで過去に飛ばされてる訳だし…。わかったわ、調整室に行きましょう。」

こうして過去へ飛ぶために、シオン達は調整室へと向かった。調整室でまずKOS-MOSが調整槽の中に入り、3人はエンセフェロンダイブに必要な装置を取り付けた。

「これでよし。M・O・M・Oちゃん、空間の歪みはどうなってる？」

「はい、小さいですけどまだあちこちで歪みが発生しています。」

「よし、やるわよ。エンセフェロンダイブ開始！」

「あー、神様！」

とガタガタ震えながら祈るアレ。そして4人は過去へととんだ。

その頃、艦長は脱出ポッドの操作パッチの前にいた。

「へへへ…。ここが開けば脱出ポッドは目の前だ。」

しかし、その扉を開けた途端、中からドラコルルが統制機構兵士達と一緒に出てきたのである。

「何っ！？貴様ら…。」

「ふん。この艦から脱出するにはここしかないからな。さあ、百式はどこにいる？」

「ふんっ、知らんな。この脱出ポッドはわし1人で使うつもりなのだからな。」

「何っ！？じゃあ、まだあいつらはこの艦内を彷徨いているというのか！？」

その時、兵士の1人が何かを察知したらしく、ドラコルルにあわてて報告した。

「長官！この艦内で大きな次元転移現象が確認されました！」

ドラコルルは驚きを隠せなかった。

「何だっ！？次元転移…ということはやつらは過去に飛んだのか！？転移先を逆算しろ！すぐに追っぞ！」

と艦長は馬鹿にしたように笑う。

「プッ！ばっかじゃねえの？あんな連中に逃げられるなんてさ。」

「黙れ！！貴様にもう用はない！」

ドラコルルは逆上して刀で艦長の首を切り落とした。艦長の首があった場所は赤い噴水が噴出し、艦長の体は、虚しくその場で倒れこんだ。

「フン…クズが。」

と刀を納め死体につばをはくドラコルル。

「長官！転移先、計算終了しました！」

「よしっ、でかした！すぐに追うぞ！」

その時、ドラコルルの通信装置に連絡が入った。

ドラコルル

「むっ？誰からだ…。」ピッ”こちら、ドラコルル。”

と通信装置から調子に乗った人を小ばかにしたような声が聞こえてきた。

「あーもしもし、お元気ですかぁ？どうですか、超未来の艦は？わたくしも行ってみたかったですねえ、宇宙旅行なんてリッチじゃありませんか。」

「あんたか…何か用か？」

ドラコルルはその声の主について何か知っているようだ。

「どうやら百式の奪還には失敗したようですね。」

「うるさい！今からやつらを追って、今度こそ捕まえてみせる！」

「その件についてですが、あなたは奪ったエイグスを持って、帰還してください。」

「何い！？」

と反論するドラコルル。

「神界に向かった統制機構第9番部隊が突然神界に現れた『死神』ラグナ・ザ・ブラッドエッジに苦戦しているそうです。エイグスを1体でもいいから使いたいの、持って帰って来いと上層部が命じています。今、あなたがそこにいるのも、セワシ・ノビ・キサラギ少佐のおかげ、なんですよ。」

ドラコルルは半ば煮え切らない表情を浮かべる。

「くっ…わかった。これより第8部隊、帰還する。」

「あーそれから、百式の現在地を教えてください。今度はわたくしが行きますので。」

「…やつらの現在地は、現代物質界（21世紀）、日本の東京都練馬区月見台すすきヶ原だ。」

「わかりました。では、アーディオース。」

と通信を切る、ジョーカーと呼ばれる男。

「待て、ジョーカー！その場所には例のガキ共が…ちっ、切っちゃったか。」

と舌打ちをするドラコルル。そこへ兵士が報告をする。

「ちよ、長官この艦はまもなく爆発します。急がないと我々も…。」

「ああ、わかってている…。これよりアジトに帰還する。」

こうしてシオン達は辛くも脱出に成功した。だが、また新たな追っ手がやって来るようだ。それにドラコルルが警戒していたようにも思えた、例のガキ共とは一体誰のことなのだろうか？

次回へと続く。

TO BE COUNTENED…

EP1-2「並走せし齒車」何故、神界でエイグスが送られてきたか」（後書

ラグナは次回で少し登場しますよ。

何故、のび太がブレイブルーを手にしたのかも触れるかもしれません。

EP1-3「過去と未来の出会い〜追憶〜」(前書き)

今回はあのガキ大将とナルシスト泣き虫が登場。
ラグナもちろん登場します。

EP1-3「過去と未来の出会い〜追憶〜」

幻想界、ラグナ一行SIDE

ラグナは夢を見た……。

その夢はあの惨劇の夢だった。

燃え盛る自分の家、無残に殺された両親、自分の名を何度も呼ぶ愛しき人と親友。マネキンのように転がる自分の腕。そして血に濡れた刃を片手に狂ったように笑う自分の未来の孫である少年とその背後にいる緑色の何か……。

その夢は自分が野比のび太という過去の名を捨てても拭い去れない忌まわしい過去の夢だった……。

「ラグナさん、大丈夫ですか？」

目を開けると上からワルキューレが心配そうに自分を見ていた。どうやら転移する際、疲れがたまって寝てしまったようだ。

「……心配ねえ……大丈夫だ」

と起き上がるラグナ。辺りを見回す。

「ここが幻想界か……」

「そうですね……どうやらあそこに見えるのがキノコ城のようです」

と山の麓にある城を指差すワルキューレ。

「キノコ城？統制機構の支部じゃなくてか？」

とポリポリと頬をかきながら問うラグナ。

「どうやら転移ミスをしてしまったみたいですね……」

と苦笑いをするワルキューレ。

「……とりあえず、情報収集だな」

そんなわけで、キノコ城へ向かうことになったラグナ一行であった。

ANOTHER SIDE

その頃、21世紀の物質界、日本東京都練馬区月見台すすきヶ原。
この街の空き地で子供達にいろんなものを自慢している少年、骨川
スネオがいた。

「みんな、コレを見る。これが1/150スケールのエッフェル塔
の模型だぞ！」

と塔の模型を子供達に見せびらかすスネオ。

「うわー！すつげえ！」

「エッフェル塔ってこんなに大きいのね。」

と目を輝かせていう子供達。

「うふふふ、そうでしょ？そうでしょ？」

といい気になっっているスネオだが、突然少年の一人が水を差す。

「でもさあ、なんか東京タワーみたいじゃないか？」

「えっ！？」

とスネオは驚きの声をあげる。

「そう言われれば、東京タワーみたいね。」

「実際、東京タワーなんじゃね？」

「あーあ、つまなくなっちゃった。みんな帰ろう。」

と飽きて帰っていくギャラリーたち。

「ま、待つてよみんな！そ、そうだ！僕のうちに来ない？うちに来
れば、もつとすごいプラモデルがあるんだよ。1/60スケールの
ストライクフリーダムガンダムや、00ガンダムとかさ・・・」

しかし、子供達はすでに空き地からいなくなっていた。

「ねえ！みんな…、はあ…。」

ため息をつくスネオ、そこへ1人の少年が近づいてきた。

「やあスネオ君、なにを持っているのかな？」

「ジャ、ジャイアン！…やっぱり僕の友達ジャイアンだけだよ。
だからこれあげるよ。」

とエッフェル塔(?)をジャイアンと呼ばれた少年に差し上げるス
ネオ。

「えっ？いいのか？」

と意外そうな声をあげるジャイアン。

「うん、いいよ。あ、それとワンダーモモのライブチケットが手に入ったから今度一緒に行こうよ。」

「おお、ほんとか？ありがとう、心の友よ！…でもさなんかスネオ、お前変わったな。前は嫌々貸してたのに。」

とスネオの変わりように珍しそうに言うジャイアン。そうなんだよね・・・とスネオも言う。

「なんか…のび太やドラえもんがあの事件以来いなくなってから毎日が退屈で…。今まではのび太をいじめて、その後ドラえもんの道具でのび太に仕返しされるのがなんだか楽しくてさ。それにいろんな所に冒険したのも、楽しかったなあ。」

ラグナー行SIDE

「くしゅん！」

と山道を歩いている最中ラグナはくしゅみをした。

『どうしたののび太くん？』

「いや別に、誰かがうわさでもしてんじゃねーの？」

『そうだねー、ジャイアンたち元気にしてるかな？』

「さあな・・・」

と天を仰ぎ、遠い世界（物質界）にいる2人の友人を思い浮かべた。

話を元に戻してジャイアンSIDE。

こちらでは昔話に花を咲かせていた。

「そうだな。でもスネオはいつも、どっかに隠れたり逃げたりしてなかったか？」

「ぼ、僕だってやる時はやったさ！改造したラジコン戦車で活躍しただろ。」

とムキになり反論するスネオ。

「おっ！それってピリカ星の独裁者をやっつけたやつか」

「うん、こうしてみると、冒険もたまには悪くないね。」

とあさつてのほうを向き過去の冒険に思いをはせるスネオ。

「そんなこと言っていると、本当に冒険の旅が始まるかもしれねーぞ。」

とジャイアンはからかい気味にいう。

「うふふふ、まさか。」

と言うスネオ（冒険フラグ *k t k r*）、そのとき空き地に妙なかん高い音が響いてきた。

「な、何だ!?!」

「何の音だこりゃあ!?!」

と、いきなりすることに驚きを隠せない2人。すると、2人の横になんとあのグノーススが2体、空間転移してきたのだ。

「かかかか、怪物だ!!!」

とすでにビビッているスネオ。

「何だこのバケモンは!?!」

さらに前からも2体、グノーススが現れた。

「うわあああ、向こうからも来た!!!」

「こんにやろー!これでもくらえー!!!」

ジャイアンは落ちていた石を拾って、勢い良くグノースス目掛けて投げつけた。しかし、グノーススは幽霊のような存在なので当たるはずもなく、そのまま体を素通りしてしまった。

「ちょ!なにはずしてんの!」

「違う!たしかに当たったはずだ!俺はジャイアンのエースピッチャーなんだぞ!」

2人でギヤアギヤアもめている間にも、グノースス達は距離をジリジリと詰めてきた。スネオはあまりの恐怖におなじみのあの単語を叫んでいた。

「ママアアアアアアアアア!!!」

「お前な・・・ママじゃなくて、なにか考えろよ!!!」

そのとき、さつきと同じ音が響いてきた。

「今度は何だ!?!」

2人の目の前に転移してきたのは、シオン、アレン、KOS-MOS、M・O・M・Oの4人だった。

「…う…こ、ここは？」

と頭を振りながらシオン。

「シオン、お怪我はありませんか？」

「ええ、大丈夫よ。KOS-MOS。…け、怪我ってことはもしかして！？」

うなづくKOS-MOS。

「はい。ここは仮想空間ではなく、現実の世界です。」

「じゃ、じゃあ僕達、助かったのか！？よかったー！」

と安堵するアレン。

一方、突然現れた、怪物やおかしな格好をした4人を見て、シオンたちのことジャイアンら2人は困惑していた。

「おいスネオ。こいつら、なに話してんだ？」

とスネオに話を振るジャイアン。

「僕にもよくわからないけど、この格好を見る限り…、…アキバ系？」

やはりスネオにも何がなんだか分からないらしい。

その時シオンはようやくジャイアン達に気がついた。

「あ、あなた達はこの時代の住人ですか？」

「なにわけわかんねーこと言ってるんだ？」

と返すジャイアン。するとスネオははっとした表情で言う。

「わかった！この人達、未来から来たんだよ。」

「おお、おれ達の、ネコ型ロボットの所からか？」

「ネ、ネコ型ですか？」

とM・O・M・O。

「未来からはあってるけどネコ型ではないわ…。私達はある理由でこの時代に飛ばされたの。」

と答えるシオン。

「シオン。今はそのようなことを話している場合ではないかと思わ

れます。」

KOS - MOSの言う通り、6人の周りでは4体のグノーススがど
ういう訳か場の空気を読んで、おとなしく話し終わるのを待ってい
た。

「グノース！まさか、もう転移先がバレたの！？と、とにかくヒ
ルベルト発動！KOS - MOS！」

「了解しました。ヒルベルトエフェクト展開します。」

KOS - MOSはすぐさま額の装置を発動させ、グノースを固着
させた。それと同時に、今まで半透明だったグノースが、はつき
りと見えるようになった。

「なんだ、今の光は！？」

とジャイアン、スネオはヒルベルトエフェクトを知らないため驚い
た。

「落ち着いて、大丈夫ですから。グノースに物理的に触れられる
ようになっただんです。つまり……」

「要は殴れるようになったんだな？」

攻撃できることがわかるとジャイアンはメリケンサックを装着した。
スネオはいまだに、後ろでビビっていた。一方、KOS - MOSは
この2人をじつと眺めると、シオンに話しかけた。

「シオン。私達はこちらのグノースを倒しましょう。」

KOS - MOSの発言に驚きを隠せないシオン。

「えっ！？あっちの2体はどうするの！？」

「向こうは、彼らに任せただ方が、効率良く戦闘が進みます。」

だが、シオンは納得がいかない。

「でも、彼らは民間人なのよ！？」

「2人の基礎体力を調べてみた結果、彼らの戦闘における値は、民
間人のそれを遥かに越えるものとなっています。」

アレもそれが信じられないようだ。

「あんな子供が……！？まさかそんなわけが……」

そんなシオンたちのやりとりなど気にせずジャイアンはパキパキと

関節を鳴らす。

「よし、久々に暴れるとするか！おいスネオ、お前も戦えよ。」

「えっ！？ば、僕も！？」

ジャイアンはスネオに詰め寄る。

「当たり前だろ。以前ドラえもんから盗んだ道具で強化したラジコンでいいから戦うんだよ。」

「で、でも…」

乗り気でないスネオの胸倉をつかむジャイアン

「ごちゃごちゃ言ってるねえでやるんだよ！さもないとお前からぶん殴んぞ！！」

「わかった！わかったよ！やりますよ！」

しぶしぶ了承すると、スネオはポケットからコントローラーを取り出し、操作した。すると、どこからともなくラジコンカーが走ってきた。

「あれが…この時代の兵器なのかしら！？」

さあ、とシオンの問いにアレンも言う。

「わかりません、けどあんな小さいので大丈夫なのかなあ？」

2人が呑気に話してられるのは、KOS-MOSがすでに殲滅していたからなのであった。

スネオはそのまま1体のグノースにラジコンカーを突っ込ませた。ぶつかる直前でラジコンカーを最大速度にして激突させたせいなのか、グノーススがくらくらしたところにめり込み、そのまま抜けなくなったほどであった。

「よし、これで…フィニッシュだ！」

スネオがあからさまなクロマークのボタンを押すとラジコンカーが爆発した。その衝撃は、グノーススがラジコンもろとも消滅するほどの威力だった。

「おお、やるじゃねーか、スネオ。」

スネオがグノーススを倒したのに感心するジャイアン。

「お、思ったよりも楽しかったね。」

「よし！次はオレ様の番だぜ！！」

そう言うと、ジャイアンは残りのグノーシス目掛けて突進していった。

「あ、危ない！グノーシスと素手で戦おうなんて…、KOS・MOS、援護を！」

しかし、ジャイアンはすでにグノーシスをスタープラチナ顔負けのラッシュでボコボコにたこ殴りしていた。

「オラオラオラオラオラオラアッ！！！」

最後に一発強力なのをぶちかますと、グノーシスは土管に激突した。その威力は土管をコナゴナにし、グノーシスを消滅させた。

「ざっとこんなもんよ！」

と両手をパンパンと叩きながら言い放つジャイアン。

「すごい…本当に倒してしまった…。」

とジャイアンたちの戦闘力に驚きを隠せないアレン。

「あなた達は一体…。あ、そう言えば、まだ名前を聞いてなかったわね。」

「僕は骨川スネオ。この街で一番のお金持ちさ。」

「オレ様の名は、剛田たけし。字はジャイアンだ。よろしくな！」

と自己紹介をした2人、スネオもシオンら4人に自己紹介を求める。

「ねえ、君達の名前も聞かせてよ。」

「私はシオン・ウヅキ。こっちは助手のアレン君。」

アレンはお辞儀をする。

「アレン・リッジリーですはじめまして。」

「それからこの子は、百式観測用レアリエンのM・O・M・O・ちゃん。」

「M・O・M・O・です。はじめまして。」

「百式観測用？それって会社名？」

聞きなれぬ単語を聞いてスネオは疑問符を上げる。

「M・O・M・O・ちゃんはレアリエンっていう、いわゆる人造人間なの。」

「へえー、とてもそうには見えないな。普通の女の子みたいだな。」
そしてKOS - MOSを紹介する。

「それでこっちの子は、戦闘用アンドロイドのKOS - MOS。」
「ええっ!？」

と2人は驚きの声をあげる。

「アンドロイド!? ロボットだったの!？」

「こんな美人のねーちゃんがロボットなのか!? ドラえもんとは大違いだぜ!！」

とドラえもんとKOS - MOSを比較させる2人。

「あら、美人なんて言われたわよ、KOS - MOS。」

しかし、当の本人はまったく反応せず、無表情のままだった。

「……。」

それをみたシオンはあわてて謝罪する。

「ご、ごめんなさいね。この子、あまり感情表現ができないの。一応、模擬人格は搭載してるんだけどね……。」

「表現力はドラえもんの勝ちだな。」

とそっけなく言うジャイアンだった。

再び、ラグナー行SIDE

『イッキシ!』

と今度はドラえもんがくしゃみをする。

「どうしたよ? 風邪引いたか?」

とラグナはドラえもんに聞く。

『いや別に、誰かが噂してるみたいだね』

「どうせジャイアンかスネオだろうな」

と話をしていると、ワルキューレが声をかける。

「ラグナさん、ドラえもんさん。どうなさいましたか?」

「『いや、何でもない(よ)』」

と異口同音に答えるラグナとドラえもんだった。

ジャイアンSIDE

「そんなことより君達がここに来たいきさつや、さっきの怪物との関係を教えてよ。」

とスネオは説明を求める。

「ええ、そうね。じゃあこれから話すから、よく聞いててね。」

シオンはこれまでの経緯を話した。自分達が未来の宇宙船の中からやって来たこと。その艦に統制機構という正体不明の武装組織が襲ってきたこと。艦が沈没するのでやむを得ず過去に飛んできたのであって、ここに現れたのは、偶然であること等々を。

「これが今、私達がここにいる理由よ。」

「ドラコルルっていったらピリカ星の独裁者の側近だった奴じゃないか！」

どうやら2人はドラコルルについて知っているようだ。

「統制機構つても聞いたことがある。確か突然、現れて過去の世界の粛清とか言って全世界に戦争を吹っかけている組織のことだね。」

「君達がここまで知っているなんて…本当にすごい偶然だね。」

と感心するアレン。シオンはそれを聞いてふむ、と言う。

「やっぱり、すべてはこの時代にあるようね…。もう一度あの街、

渋谷に行けば何かわかるかもしれないわ。」

渋谷ねえ…。とスネオは腕を組みながら言う。

「渋谷って12年前に起きた戦いが原因で、閉鎖都市指定を受けた街だよな。」

この12年前の戦いについてはナムコクロスカプコンを調べて欲しい。

「前に飛ばされたときはそこで零児さん達に会ったんですよ。」

とM・O・M・Oが言う。ジャイアンはよしと威勢よく言うつと、

「とにかく渋谷に行けば何かわかるんだな？だったらさっそく、出発しようぜ！」

だが、スネオは鼻息を荒くしているジャイアンを静止する。

「ちょっと待って！そのグノーススつてのが、意図的に送られたものだったら…」

そのとき、遠くの方から、爆発音や悲鳴が聞こえてきた。

「しまった！グノーススはこの街のあちこちに転移してきていたんだわ！」

「やっぱり！」

シオンはM・W・Sを構えながら言う。

「とりあえず渋谷に行く前に、この街の人達を守らないと…。アレ君とKOS-MOSは、ここから東側をお願い！私達は西側を担当するわ！」

「わかりました！主任！行くよ、KOS-MOS！」

とKOS-MOSに合図するアレ。

「了解です。アレ。」

そう言うのと、アレとKOS-MOSは空き地を出て、東へと向かって行った。

ジャイアンは2人が心配なのだろう、シオンに向き直り言う。

「いいのか？あの2人だけで行かせて？」

「KOS-MOSなら1人でも大丈夫なくらいよ。それにあなた達は、まだグノーススの怖さを知らないから私達がいた方が、安全でしょうしね。」

「統制機構か…。もうただの軍事組織じゃあないよね。裏になにかがあるよ、きっと。」

「でもさ、ピリカ星の人間は豆粒ぐらいのでかさしかなかったはずだよな。それが同じ大きさになってるってことは……、…だあー！今は考えても仕方ねえ！行動あるのみだぜ！！」

こうして、シオンとM・O・M・Oとジャイアンとスネオの4人は西へ向かい、グノーススを倒し始めた。

このグノーススも複製されたものらしく、シオン達を見つけると、執拗に狙ってくるのだった。

ジャイアンもスネオも、子供とは思えないほどの動きと体力を持つ

ていたので、シオンの心配は取り越し苦労程度ですんだのだった。そんなこんなで、西へと向かうにつれてグノーシスが明らかに減っているのがわかった。そこでシオン達はスネオの提案で、近くにあるスネオの家で休憩を兼ねて、今後の動きを話し合うことにした。スネオは家の前に着くと、家を背にしてみんなの方を向き、例のごとく自慢し始めた。

「じゃーん！これが僕の家です。ちなみにパパとママは、結婚記念日の旅行に行ってるので今は僕がこの家の主人です。」

シオンはスネオの家を見て感想を漏らす。

「大きな家ねえ。この時代の技術でこれだけ大きな家を建てるのは大変だわ。」

「そうでしょ。そうでしょ。」

スネオは調子に乗っている。

「この家だけ、とても目立ちますね。」

「そうでしょ。そうでしょ。」

これはM・O・M・Oだ。

「でもお前の家、燃えてるぞ。」

とジャイアン。

「そうでしょ。そうでしょ。……えっ？」

慌てて振り返ると、確かに家のあちこちで出火していた。

「うわー！僕の家が燃えてる！どうしよう、どうしたらいいんだ！？」

慌てるスネオ、そして思いついたことが

「ママーーーーー！！！」

「いやママじゃなくて消防車を呼べよ！」

と的確に突っ込むジャイアンだった。

「だめよ！街のあちこちで火事は起きてるのよ、自分達で何とかしなくちゃ！」

M・O・M・Oは屋根の上に何かの気配を感じ指を刺す。

「あっ！屋根の上に誰かいます！」

よく見てみるとスネオの家の屋根の上に丸い球体状の何者かがいた。
「誰だ！僕の家に乗っかってる奴は！」

「んー、うるさいですねえ。そんなに怒鳴らなくても聞こえていますよ。…おや？そちらのお嬢さん方とは、どこかでお会いしましたかな？」

「…！あなたは…ジョーカー！？」

ジョーカーと呼ばれた球体状の男は振り向くと人を小ばかにしたような声を出す。

「いやー、よかった。名前出てこなかったら、どうしようかと思いましたがよ。覚えていてくれたんですね、嬉しいですよ。」

「何者だ、お前は？」

「これは失礼。ご紹介が遅れました。わたくしはジョーカー。統制機構の特殊工作員を務めさせております。以後お見知り置きを。」

「あなたも統制機構なの！？じゃあ、グノーシスを連れてきたのは

…」

その通り、とジョーカーは言う続ける。

「はい、わたくしですよ。しかし、あの程度のグノーシスでは無理みたいでしたね。」

「そんなことより僕の家火をつけたのはお前か！？」

とスネオ。

「おんやあ？あなたの家でしたか。ええ、そうですよ。それにしても…よく燃えますねえ。わたくし、こういう目立つものを見ると…無性に壊したくなる性分なものでしてね。いやはや、つい出来心でやっちゃいました。」

ジョーカーの言葉にカチンと来たのかジャイアンが怒鳴り声を上げる。

「こんにやろー！降りてこい！ぶん殴つてやる！」

「そういう訳にもいきませんねえ。わたくしにも百式の奪還という任務がありますからねえ。…まずはわたくしのキュートな部下の相手をして頂きますよ！」

と指をならす。すると横の草むらから、3匹の丸っこいモンスターが飛び出してきた。見た目は赤いカー。イに耳が生えたような感じでとてもかわいらしい容姿をしていた。

「なんだこいつら？」

「なんかグノーシスとは、違うモンスターみたいだけど……っていうよりモンスターにも見えないね。」

と何となくかわいらしいそのモンスターを見て感想を漏らす2人。

「あら、このかわいい生物ってたしか……」

どうやら2人はこの生物を知っているようだ。

「過去のデータと一致します。この生物はムウです。」

「やっぱりそうだったのね……。たけし君、スネオ君。この生物は、れっきとした敵よ。見た目に惑わされないようにね。」

「誰だろうと邪魔する奴はぶっ飛ばす！」

と、指をバキバキと鳴らすジャイアン。

「そうだよ！早く火を消さないといけないし！よし、とっておきだ！」

そう言うと、スネオはさっきより少し大きめコントローラーを取り出して操作した。すると今度は車ではなく、零戦のラジコン3機がどこからともなく飛んできた。

「くらえ！機銃発射！」

ボタンを押すと、零戦は一斉に機銃をムウに向けて、発射した。ムウ達は為すすべもなく、あっさりと蜂の巣になった。一掃し終わると零戦は何処かへ飛んでいった。

「どうなってるのかしら？あの技術、調べてみたいわね。」

とスネオの持っている道具に興味を示すシオンだが、M・O・M・Oに止められる。

「シオンさん！そんなことより早く火を消さないといけませんよ！」

とガチャンと鍵の開く音が聞こえる。スネオが開けたようだ。

「もう鍵は開けたよ！中に消火システムがあるから。」

「なんだ。それなら楽勝じゃんか。」

「でもそれを起動させるには2人のお手伝いさんが1枚ずつ持っている2枚のカードキーが必要なんだ。でもそのお手伝いさんがここにいないってことは…」

シオンが続ける。

「まだこの中に！？それならなおさら急がないと、行くわよ！」

こうして家の中に突入したシオン達だったが、すでに火が家全体にまわっていて危険な状況だった。そこで4人を2人ずつに分けて、2人のお手伝いさんを捜すことにした。そして、一階と二階のクロ―ゼットの中から縛られている状態で見つかった。2枚のカードキーを受け取った一行は、リビングにある放水機能の起動キーに2枚のカードキーを通した。

「よし、これで水が出るぞ！」

すると、部屋や廊下、さらには庭からも放水が始まり、あっという間に消火することができた。が、すぐに放水が始まったのでスネオ達も水を大量に被ってしまった。

「わー…ずぶ濡れた…」

「早く体を拭かないと、風邪をひいてしまいます…」

とびしょびしょになりながら言う、M・O・M・Oとスネオ。

「でも火を消せたし、とりあえずは、良しとして…今は、外に出ましよう。さつきから姿が見えないジョーカーのことが気にかかるわ。どこかで隙を伺っているのかもしれないから、気をつけましよう。」

「あんにやるー！人の命で遊びやがって！許せねー！！」

と鼻息を荒くしてジョーカーを探そうとするジャイアン。

「あっ！ちよつとたけし君！！！」

とシオンたちもジャイアンについていく。

だが捜す必要はなかった。何故なら、ジョーカーが盾を持った、黄色いムウを2匹連れて待っていた。

ジョーカーは拍手をし、言った。

「いやあ、素晴らしかったですねえ。自らの命をも省みず他者を助けるその様。なかなか見られるものではないですよ。」

「ジョーカー！どうして関係ない人まで巻き込むの！」

「あなた方だけ傷つけても面白くないでしょう。さあ！大人しく百式を渡しなさい！」

「誰が渡すか！オレ様が相手になってやる！」

とファイティングポーズでジョーカーを迎え撃つジャイアン。

「のほほ、いいでしょう。わたくしのキュートなパワー、見せてあげますよ。」

そう言うと、ジョーカーはいきなりジャイアンに殴りかかってきた。ジャイアンは避けようとしたが、さっきの放水で服が濡れ、思うように動けなかった。

さらに、ジョーカーの攻撃は、見た目とは裏腹に結構な威力があった。

それをまともにくらったジャイアンは、後ずさりしながら態勢を立て直すのがやっとだった。一方、ジャイアンと同じように、上手く動けないことと、今までのグノースとの連戦、一般人の救助、消火活動などを立て続けに行ったので、ジャイアンほどスタミナのない3人は、さっきより少し強めの盾ムウにあっさりとやられてしまった。

「み、みんな！」

「のほほほ、さてどうしますか？今なら百式を渡せば見逃してあげますよ。」

ジョーカーの要求を突っぱねるジャイアン。

「そんなこと出来るか！オレは、友と認めたやつは絶対に見捨てねえ！！！」

「のほほほ、なら仕方ないですねえ。そのまま死んでいただきますよう。」

「くっ、くそっ！みんな元気を出すんだ、やられちまうぞ！」

だが、スネオは壁まで飛ばされていて、シオンとM・O・M・O・は盾ムウに抑えつけられていた。

ジャイアンはしばらく考えた結果、

「よし！ならオレ様が元氣の出る歌を歌ってやるぜ！！」
といった。

「えええええっ！！？」

とスネオは驚愕した。

「う…歌を？」

ジャイアンはポケットの中から愛用のマイクを取り出した。

「ほう、歌ですか。…のほほほ、まあ死ぬ前に思い残す事も一つぐらい、あるでしょうしね。ここは歌わせてあげましょうか。」

M・O・M・Oはジャイアンの愛用のマイクを分析する。

「あのマイク…特に変わったところは無さそうですけど…」

「もしかしたら私達の知らない、この時代の技術が使われてるのかもしれないわね…。何かこう、特殊な音波を出せるとか…」

だがスネオはそれを知っているのだろう、ジャイアンに歌をやめるようにわめいている。

「そんなトンデモ能力なんてないよ！と、とにかくジャイアン！それだけはやめて！！」

しかし、ジャイアンはマイク無しで発声練習をして、すでに準備万端だった。

「お願いだから本当にやめて！ジャイアン！！」

「そんなに必死になって止めようとするってことは、…まさか、自分の命を削るほどの技とかなの！？」

とシオンだが、スネオは違うよと反論する。

「そんなんじゃないって！むしろ命削られるのはば…」

「よし！いくぜー！！」

ジャイアンは聞こえていないスネオの声を遮ると、大きく息を吸い込み、歌い始めた。

「オーレは！！ジャイアン！！！！ガーク大！！将！！！！」

「アッー！！！！」↑（スネオ）

マイクを通して、凄まじい音量の歌が始まった。普段リサイタルで聴かされているスネオはまだしも、一度も聴いたことのない者達に

とつては、もはや超音波による攻撃でしかなかった。

「きゃあああ！な、何なのこれー！？」

「ま、まるで音波の津波みたいです…」

「うわわわっ！なんという酷い歌！いや、もはや歌ですらない！」

「……………」

ムウはすでに気絶して、ひっくり返っていた。他の4人はとにかく耳を塞いで、ただじっと耐えていた。まるで長い間この歌が続いていたかと思えるほどに、”長い間”が”永遠に”と思い違えるほどにじっと耐えていた。だが、ジャイアンの歌はそんな薄い防護壁をまるで無視するほどの音量だった。

そしてようやく歌が終わった時、4人の中で、唯一立ちっぱなしだったジョーカーは意識こそあったものの、足元がおぼつかない様子だった。

一方、ジャイアンはというと歌を歌い終えた達成感からなのか、やる気満々になっていた。

「よっしゃー！めっちゃ元気出たぜー！！…うん？ジョーカーのやつ、なんかふらふらしてやがるな…。…チャンス！！」

ジャイアンはジョーカーに急接近すると、そのまま高く蹴り上げた。「あたっ！」

「独学で覚えた某全米チャンプの得意技を喰らいやがれ！」

ジャイアンはジョーカーの落下地点に移動すると、右腕に炎を宿し、ジョーカーが落ちてくるのに合わせて、その炎の宿った右腕を振り上げると同時に、自らも飛び上がった。

「ジャイ龍拳！！！！」

その飛び上がったジャイアンの姿はまさしく龍、天へと昇る炎の龍の如しだった。

「アーレー！」

まともにくらったジョーカーは火達磨になりながら5、6mぶっ飛ばされ、地面に叩きつけられた。ジョーカーはなんとか立ち上がったが、ダメージが大きく、またもふらふらしていた。

ジャイアンも着地し炎の影響で乾いた服をパンパンと叩くと言いつつ。

「その様子じゃもう無理だろ。さっさと帰れよ。」

「まさかわたくしともあろう者が…一流のヒールともあろう者が…こんな子供の作戦を見抜けなかったとは…。まさか歌で攻撃出来るなどとは、思いもなかったですからねえ。…あなたの言う通り、わたくしはもう限界のようですね。調子に乗ったヒールはコテンパンになる…、というのが定石ですので…ここは一度、身を引かせて頂きますよ。今度は必ず百式を奪いますから、それまで大事に持っていて下さいよ。それでは、アーディオース。」

そう言つとジョーカーはどこかへ転移していった。

「あのやろつ…ふざけたやつだったけどかなりの実力者って感じだったな。…まあとりあえずはいいか、なあみんな！」

くるつと振り返つた先にはジョーカー以上にふらふらしている3人がいた。

「おいおい、みんな大丈夫か？」

と3人に駆け寄るジャイアン。

「え…ええ、な、なんとか…ね。…とりあえず追つ手は追い払えたみたいだし、グノーシスも殲滅できたことだから…、ここは一度空き地に戻りましょう。アレン君達もそのうち、戻ってくるでしょうしね。」

と言つシオン。

「ん…何か、まだ元気ないみたいだな？もう一曲いくか？」

「…それはいい！！！（です！！！！）」

とジャイアンの提案に反論する3人だった。

シオン達はひとまず、先ほどの空き地に戻ることにした。しばらく待っているとアレンとKOS・MOSが戻ってきた。

「アレン君、KOS・MOS。大丈夫だった？」

「はい、主任もご無事…ではなさそうですね、ふらふらしてるみたいですけど…大丈夫ですか？それにスネオ君もM・O・M・O・ちゃんも？」

とアレンはふらふらになっている

「ええ、大丈夫よ。少し疲れたただだから…。それより、アレン君が無傷なのが驚いたわ。」

とほとんどボロボロじゃないアレンを見て驚くシオン。

「ほとんど戦闘はKOS・MOS1人でやってましたからね。僕は倒れてる人の治療ぐらいしかすることがなかったんです。」

「へえー、すごいんだな、KOS・MOSは。」

とジャイアンはKOS・MOSを褒める。

「私は役目を果たしただけです。」

「とりあえずこの街は安心だね。」

とスネオが言う。

「でもここに長居すれば、また街が襲われるかもしれません…」
M・O・M・Oの言葉にうなづくシオン。

「そうね…。なら早くこの街を離れて渋谷に向かいましょう。」

「渋谷なら、僕の家からずっと西に向かえば着くはずだよ。」

とスネオ。

「よし、じゃあ途中のコンビニで腹ごしらえしてから行こうぜ！」

「え、遠足じゃないのよ、たけし君…」

ジャイアンの提案に突っ込むシオンだった。

こうして再び追っ手を退けたシオン達は、現地協力者のジャイアンとスネオと共に渋谷を目指すこととなった。はたしてシオン達は、無事渋谷に辿り着けるのだろうか？

次回へ続く。

TO BE CONTINUED…

EP1-3「過去と未来の出会い〜追憶〜」(後書き)

次回はラグナ視点でいきます。
あの配管工が登場しますよ。

EP1-4「カエル仙人の導き」（前書き）

ブレイブルー新作のラグナ編をようやくクリア。ネタばれなのであまりいえませんが、はつきり言ってEDが尻切れトンボだったな・・。
・。ディケイドのTV版の最終回並みに・・。
さて、ハイド流ブレイブルーのEP1-4始まり始まり。

EP1-4「カエル仙人の導き」

ラグナ達が出山している頃、キノコ王国の城下町では統制機構の部隊とキノピオ達親衛隊が衝突しようとしていた。

「いいからそこを退けと言ってるんだ！」

と兵士の一人が言う。

「退けるわけないでしょう！」

そういうとキノピオの一団の一人が道を通せんぼする。

「この国の姫さえ渡せばおとなしく引きあげると約束してやるからそこを退くんだ！」

「姫を渡したりなど、断じてさせません！」

「弱い者いじめは嫌いだが…やむを得ん。これよりキノコ狩りを行う！」

隊長の号令と共に統制機構兵が武器を構え、キノピオ達に襲いかかるうとしたとき、キノピオ達の背後から1人の男が駆けつけてきた。
「ヤッフウウー！」

「だ、誰だ！？何者だ！？」

「マリオさん！」

マリオと呼ばれた男はキノピオ達を見ると親指を立てながらニカッと笑う。

「OK、キノピオ達。後は俺に任せな。」

「質問に答えろ！貴様は何者だ！」

と隊長は声を荒げながら言う。キノピオ達はマリオの自己紹介をはじめた。

「この方こそ、元配管掃除屋で現在はキノコ王国の客員騎士を務めておられる、伝説の兄弟の兄！」

「イツツミー、マリーオ。」

「…誰だか知らんが、構わん！まとめて片付けてしまえ！」

隊長の言葉で兵士達はマリオに襲い掛かる。

「今までは亀ばっか相手にしてきたが今回は少しは楽しめそうだないくぜ!!」

マリオは強靱な跳躍力で高く飛び上がると、近くの兵士を思い切り踏みつけた。そして、その踏んだ勢いでもう一度飛び上がり、再び別の兵士を踏みつけた。こんな調子でマリオは軽く、3人の兵士を倒した。

「他愛もないぜ。」

とやれやれといった感じで言うマリオ。

「何だこいつは…データには登録されてなかったぞ!?こ、こんなつたら全員でかかれ!」

隊長の命令で、残りの兵士がマリオに銃の照準を合わせた。

「チッ、卑怯な奴らだぜ。」

と、その時、

「ユフイイイイ!!」

突然横の脇道から、緑色の服を着た男が飛び出してきて、横一列に並んでいた兵士3人をまとめて蹴り飛ばした。

「ようルイージ、ビビってどっかに隠れたのかと思ったぜ。」

とマリオはルイージと呼ばれる男に言う。

「へっ、ヒーローは遅れて到着するもんだぜ。」

とルイージは鼻を人差し指でこすりながら言った。

「今度は何だ!? 貴様もそいつの仲間か!？」

そうともとマリオとルイージは異口同音に言う。

「俺達こそ、伝説の兄弟コンビ、」

そしてコンビ名を言う。

「マリオブラザーズだ!」

「ルイージブラザーズだ!」

2人は互いに自分の名前を強調したコンビ名を同時に名乗った。そして、

「はあ?」

マリオはルイージの胸倉をつかんで怒鳴る。

「オイ、ちょっと待てや！何でお前の名前がコンビ名についてんだ！？俺が兄貴なんだから、俺の名前がつくはずだろうが！」
ルイージも反論をする。

「兄貴っていったって、双子なんだからたいして変わらないだろうが！」

ああ！？とマリオがルイージの発言に反論する。

「それでも優先されるのは俺なんだよ！それに俺の方がプリティーだからいいんだよ！」

はあ！？とルイージが怒鳴る。

「なにがプリティーだ！俺の方が背が高いから、俺なんだよ！このゲジゲジヒゲが！」

「なんだとお！ナマコみてえな服着た奴が偉そうに言うんじゃねえ！」

「やんのか！？」

「望むとこよ！」

こうして2人がコンビ名でギアギアもめている間、ずっと待っていた隊長はいい加減しびれを切らして、上空に向けて発砲した。

その音で、2人はようやく我を取り戻した。

「おらあ！いつまでふざけてんだ！たくつ、こっちは早くしないとやばいつてのに……」

「まだ、やっていたのか？君達は？」

と兵士達の後ろに一人の少年が現れる。その少年はどこか、雰囲気はのび太に似てはいるがメガネはかけておらず、その瞳は妖しく冷酷に青く光っていた。兵士はその声を聞きビクツと身をふるわせ後ろを振り向く。

「こ、これはセワシ・ノビ・キサラギ少佐！も……申し訳ございません！」

と隊長がセワシと呼ばれた少年に向かって敬礼する。

「ピーチ姫拘束の任務はなるべく揉め事を起こさずにやれって言ったのに……、何だこの様は。早速ひと悶着起こしているじゃない

か」

「し、しかし・・・このキノコどもが、我々の要求にこたえず・・・応戦しようとしたため・・・」言い訳は無用だ！まったく・・・君達がそうだから我々はこの世界の人々から野蛮人の集団と思われるんだ！・・・まあしかたがないか？君は僕と違って精神面が軟弱だからね」・・・おっしゃるとおりです・・・」

と隊長は言い訳をするが、セワシの一喝で口をつぐんだ。

「さて・・・と。すまなかったね、君達。僕の無能な部下が迷惑をかけてしまつて」

とキノピオやマリオたちのほうを向くセワシ。一方、マリオはセワシを見て何かを感じていた。

（何だ・・・こいつ・・・かなりの邪悪な気を感じやがる）

ルイージがセワシに詰め寄る。

「何だ、お前？何者だ？」

「ああ、自己紹介が遅れたな。僕はセワシ・ノビ・キサラギ、統制機構所属の軍人だ」

「統制機構だと？お前の無能な部下とやらもそう言つてたがお前も同類か？」

とルイージがいきり立つ。

「統制機構なのはあつてはいるが、僕をこの馬鹿と一緒にされてもらつては困る・・・。さて本題に入ろうか、ピーチ姫を我々に引き渡して欲しい」

今度はマリオが怒鳴り声を上げた。

「何だと！？お前ら、ピーチ姫をどうするつもりだ！？」

「心配なくていい、彼女には手荒な真似はしないさ」

と言うと後ろにいた子供を前に引つ張り出した。

「っ！てめえ！」

「街の外にいたから、僕が保護してやったのさ。」

マリオの後ろでは子供のそばに行こうとする母親をキノピオ達がしっかりと抑えていた。

「坊やー!」

「ママー!」

と同時に手をのばすが親子の手は届くはずもない。

「てめえ……断ったら子供を殺すという脅しか……そりゃ」

やれやれ……とセワシはため息をつく

「嫌われたものだね、ただ僕は子供を前に出しただけさ。だけど・
・僕の申し出を断ったりしたら……」

と刀を抜き、子供の首に当てる。

「シヨックでうっかりこの子の首を『ユキアネサ』が刎ねるかもしれないな……」

と冷酷に言い放つ。その時だった。

「待って!」

とマリオたちの後ろから声がかかり、後ろを振り向くと、一人の女性
性が立っていた。

「……ピーチ姫!?」

とそこにいた味方陣の全員がおどろいた。

姫!どうやってあの部屋から出てきたんですか!?部屋の前には見
張りを2人配置してあったんですよ!」

と側近のキノピオがピーチ姫に説明を求める。

「ごめんなさい、ちよっと別の方法で出てきたの。」

マリオはピーチの手に持っている傘を見てつぶやいた。

「傘ですか……」

「あなた方の目的は私なんでしょう。私が捕まりますから、この国
から手を引いてください。」

マリオはピーチの前に立ちはだかり言う。

「ダメだそんなこと!」

「私は大丈夫。必ず……あなたを待ってるから。」

「ピーチ姫……」

と何も出来ずにクソッ!と毒づくマリオ。

「さあ、要求を呑んでください!」

わかりました。とセワシは刀・ユキアネサ・を鞘に収めうなずく。
「もちろん、いいですよ。我々の任務は聖女であるあなたの拘束、DNA採取ですからね。お目当てのものが取れたらすぐに王国に帰しますので・・・ご安心を」

そっとうとセワシは掴んでいた子供を母親に向かって投げ返した。

「ああ、坊や！」

「ママー！」

と親子は抱きつく。それをセワシは確認した後、ピーチ姫に向き直る。

「では・・・来ていただきましょうか、姫」

セワシは隊長にピーチ姫を連れて行かせ、自分はその後ろについた。残りの兵士は倒れている兵士をたたき起こして連れてこさせるよう指示すると、先に街を出ようとした。

しかし、

「やっぱりそんな事させられねえっ！」

ルイージは自分を抑えきれずにセワシに向かって走り出す。

「よせ、ルイージ！」

マリオの静止も聞かず、ルイージはセワシに殴りかかる。

「おい、テメエ！こつち向きやがれ！」

そっとうとルイージはセワシに拳を繰り出したがセワシに片手で受け止められる。

「何っ！」

「すぐに返すと言ったのに・・・馬鹿な奴だ」

とルイージを突き放すと、ユキアネサを抜きルイージに斬り付ける。

「なんとっ！」

ルイージも紙一重で回避し、セワシと距離を置く。

「危ねえな・・・ん？」

とルイージは違和感を感じ自分の上着を見やると、さっきの斬撃で切られていた。がそれがピキピキと音をたて凍り始め、ついにはルイージの服全体に及んでいた。

「な・・・何だ！？うつ、体が・・・うごかな・・・い」

身の危険を感じ服を脱ごうとするが、動けず、凍結がルイージの体自身に及んでしまい。そのままルイージは氷像と化してしまう。

「ルイージーーーーーーー！」

とマリオは変わり果てた弟の姿を見て慟哭する。

「よく見たら、いい氷像じゃないか。君の家に飾って見たらどうだい？」

プツン、セワシの一言でマリオの何かが切れた。

「お前・・・よくもルイージを・・・」

と怒りに打ち震えながらセワシをにらむマリオ。

「君も氷像になりたいかい？」

「うおおおおおおおっ！！！！グア！」

「ごめんなさい、マリオさん！あなたまで失うわけには行かないんです！」

マリオがセワシに殴りかかろうとしたときキノピオがすんでのところでマリオを殴って気絶させた・・・。

一方、ラグナたちは、幻想界のモンスターと戦いながら麓まで下りてきていた。その麓では青い炎を灯したたいまつを二本自分の後ろに立てている不気味な風格の男が立っていた。

「Welcome！いい物が揃ってるぜ。」

「何だお前？」

ラグナが男に向かって聞く。

「オレは武器商人だ。この世界の武器は知り尽くしてる。お前のその剣、この世界のものじゃないな。それと・・・その右腕、魔導書か・・・しかも蒼の力を宿した奴・・・『蒼の魔導書』^{ブレイクル}だな」

『っ！？』

と蒼の魔導書であることを指摘され、驚きを隠せないドラえもん。

「おいテメエ、何でそれを知ってやがる！？統制機構の奴か！？」

とラグナは男に詰め寄る。

「俺は統制機構とかいう物騒な奴じゃない、ただの武器商人さ…さあ、見ていってくれ。」

この謎の商人は様々な武器を取り扱っていて、中には物質界にしかない銃まで売っていた。だが2人とも武器を変えるつもりはなかったので、ラグナの銃にも変形できる剣の弾薬を補充する程度の買い物で終わったが、それでも男は満足したようで気前よく見送ってくれた。

「ヒツヒツヒツ…Thank you。」

男と別れた後、2人はさらに歩き続け、ようやくキノコ城の城下町にたどり着いた。

「やっと着いたぜ」

とのびを言うラグナ。

「しかし…なんだか街全体が暗い雰囲気ですね…」

と町の雰囲気を見て言うワルキューレ。

『とりあえず、町の人に聞いてみようよ。ひょっとしたら何かあるかもしれないし』

そついうわけで、町の人間に話を聴いてみることになった。だが、どの住人も話を聞こうとはせず用事があるからと逃げるように家に入ってしまった。初めは温厚な態度だったラグナも、次第にイライラする。

「くそつ！何だつてんだよ！だーも、埒があかねえ、直接城に行つて来る！」

そついうとラグナは一直線に城へと向かう。が門兵に止められ、槍を構えられる。

「うおつ！何だ！？」

「貴様！あの時の氷を使う剣士！ここへ何のようだ！」

と槍をラグナに突き刺そうとするが大剣で受け止められてしまう。

「あつぶねーな、何だよ！いきなり！それにな、俺は氷なんか使わねーよ！」

そこに騒ぎを聞きつけワルキューレが駆け寄る。

「ラグナさん！一体何なんですか、これは！？」

「知るかつての！俺の顔を見ていきなり槍向けてきたんだよ！くそっ！何がどうなってやがんだ！？」

「何の騒ぎだ？」

と大臣がやってきた。

「はっ！大臣！例のあの男が・・・」

とラグナを指差す。

「おい、門兵。よく見たらこの男ではないぞ。髪の毛は白くないし、それにオッドアイでもない。何よりも奴らの着ている青い制服ではないではないか」

『「！？」』

と大臣の言葉にラグナとドラえもんは驚愕の表情を浮かべる。

そしてラグナは大臣に詰め寄る。

「ちよいと大臣さんよ・・・今の話聞かせてくれよ」

「な、何だね？君は！？」

といきなり近づいてきたラグナに驚く大臣。

「俺の事はどうだっていいだよ！今、青の制服がどうのこうのって言ってたよな。もっと詳しく聞かせてくれよ」

とそう言っ胸倉を今にもつかもつとしているラグナだが、それをワルキューレが止める。

「ラグナさん、ストップ！ここは私が・・・」

「？あなた様は？」

と疑問符を浮かべる大臣。

「私は女神イシター直属乙女の騎士ワルキューレです。今の話を少しお聞かせ願えませんか？」

「なんと・・・！？わかりました・・・」

そっいうわけで、キノコ城に入ることになった。

キノコ城で、大臣は何故、町の雰囲気があったのかを話した。

統制機構の部隊がこの町を襲い、ピーチ姫が連れて行かれたのこのことである。

『なるほど・・・大体分かったよ』

とラグナの右手からドラえもんが口を開く。

「どうした、ドラえもん。某世界の破壊者の物まねして」

『何で、イスターさんが僕らをここへ転移させたか、それはピーチ姫が自分と同じ統制機構やっしきのターゲットの一人だつてことが分かつてたんじゃないかな・・・それで僕らにそれを阻止させるためにここへよこしたんだ』

「だけだよ、もうとくに連れ去られてるじゃねーか。畜生・・・どうせなら城下町の近くに転移させろつてんだ・・・」
と毒づくラグナ。

『そうだね・・・』

と同意するドラえもん。

「いえ…むしろあなた方には遅れて来られた方がよかったかもしれない」

「あ？どういうことだったそりや？」

と大臣の発言に疑問符を浮かべるラグナ。

「奴らを率いていた者は氷を操る剣士でとてつもなく強く、人質まで取られ我が王国最強の騎士兄弟も適わなかった…おそらくあなた方が加勢しても同じだったでしょう。ですが…こうしてあなた方に来ていただいたのも何かの縁…お願いします！姫を、お助けくださいませんか！」

わかつています、とワルキューレはうなずく。

「言われなくてもそのつもりです」

「当たり前だ。もともと俺らは統制機構やっしきをぶっ潰す気でここに来てんだ！特にその氷を使う剣士って奴もぶちのめす！」

と首の間接を鳴らしながら言うラグナ。

『それじゃあ、早速出発しよう』

とドラえもんが出発をうながしたその時、

「ちよつと待った！」

「ん？」

ラグナたちは声のする方に振り向くと、入口の所にマリオが扉に寄りかかっていた。

ま、マリオさん！とキノピオがマリオに心配そうにかけよる。

「もう動いても大丈夫なんですか？」

大丈夫だ！とマリオは笑顔で言う。

「俺は百万回やられても負けない男だぜ！」

「誰だお前？」

とラグナはマリオに聞く。

「俺か？俺の名はこの国最強の客員騎士で伝説の兄弟の兄！イッツミー、マリーオー」

とかっこよくポーズを決めるマリオ。

（この世界にも英語があるのか・・・）

と考えたラグナだが、言葉には出さず黙ってマリオの話を聞くことにした。

「奴らはピーチ姫をさらい、弟のルイーダはリーダーの男の剣士に凍らされちまった。俺は奴らを倒して2人を助けなきゃならねえ！だから、俺もあんたらについていかせてもらうぜ！」

『もちろんいいですよ。人手は多い方がいいですからね』

「ま、断る理由もねえし・・・いいぜ。なあ、ワルキューレ」

とドラえもんの承諾にボリボリと頭を掻きながら言うラグナ。

「ええ、ラグナさんの言うとおりです。歓迎致しますよ、マリオさん」

こうしてドラえもん、ラグナ、ワルキューレはマリオの申し出を快く受け入れた。

「お前ら・・・」

マリオは、目を潤ませながら感謝を述べる。

よかったですな、マリオ殿！と大臣。

「今回は共に戦ってくださる仲間がいてくれて」

マリオは目にたまった涙をぬぐい、笑顔を見せる。

「へへ…まあな。じゃあさっそく出発しようぜ！」

とマリオが言った所で、ラグナがある問題を言う。

「けどよ、どうやって追いかけるんだ？奴らはもう自分達の支部に戻ってるだろうと思うし、手がかりゼロだぜ」

『そういえば、そうだね・・・イシターさんは統制機構の支部はどこにあるのかっていう肝心な所は言っていないみたいだし・・・』

「『うーん・・・』」

と考え込む2人と蒼の魔導書。そこにマリオが提案を出す。

「何をしたらいいのか、わからない時は…ケロケロ湖にいるカエル仙人に相談しに行こうぜ。あのじいさん無駄に物知りだから、多分そいつらの事も何か知ってるかもしれないぞ」

「じゃあ決まりだな。そのケロケロ湖って所に行こうぜ」とラグナ。

「でしたら、途中で通ることになるキノケロ水路の入口の番兵には、こちらから通れるように手配しておきますね。」

そういうと、大臣はGPSで番兵に通すように手配していた。

「助かるぜ、大臣。よっし、じゃあ行ってくるぜ！みんな！」

と親指を立て、サムズアップするマリオ。

「皆さん！改めて姫の事、よろしく願います！」

とラグナとワルキューレに握手する大臣。

「当たり前だ、統制機構やつらの好きにさせるかっての」

「これも私達の使命ですから」

こうしてラグナたちは新たにマリオを仲間に加えて、ピーチ姫が捕まっているであろう統制機構の支部の手がかりを得るためケロケロ湖にいるカエル仙人に会いに行くことになった。

一行は城を出ると、まずは街の道具屋に行き回復アイテムなどを買い揃えた。

ちなみにラグナが持っていた物質界の硬貨がいつのまにか、幻想界の硬貨に変わっていたのは気のせいではないだろう。それはともかく、準備を整えた一行はさっそくキノケロ水路に向かうことにした。

途中の道のりでもモンスターは出てきたが、マリオ曰わく、カメの一族をフルボッコしたせいなのか、敵の数が減ったそうだ。そう言われると、クリボーはいるのにノコノコがないのはそういった事情があったからなのだろう。それともかく、一行は柵で周囲を囲ってある土管の前までやってきた。

「ここか？マリオ？」

と土管を見て啞然とするラグナ。

「ああ、この土管をくぐった先がキノケロ水路だ」

「土管とは…ずいぶん変わった入口ですね」

と土管をしげしげと眺めるワルキューレ。

「俺としては、ワープする土管なんてのもあったからこいつはずっとまともだと思うが…まあいいか」

マリオは少しぼやいたが、構わず柵の番兵に話しかけた。

「おつす。お役目ご苦労さん」

「あつ、マリオさん！大臣からは連絡が届いてますよ。ケロケロ湖に行きたいんですか？」

「ああ、カエル仙人にちよいと用があつてな。ここを通してくれるかい？」

はい。と番兵のキノピオが答える。

「もちろんいいですよ。でも気をつけてくださいね。最近水路で巨大な生物が確認されているんです」

「わざわざありがとよ。んじゃ、行ってくるぜ」

マリオはラグナとワルキューレを連れて、土管の中に飛び込んでいった。

キノケロ水路は、水路というより石造りの洞窟と思わせるほど、広い内部構造だった。

モンスターは外の連中とは違い、毒をもつ種類もいたりしてなかなか苦戦することが多かった。しかも途中では水路の水を抜かなければ進めない所があり、その排水スイッチを探す羽目になったりなど手の込んでいる水路であった。水を抜いた所を進むと土管があり、

中に入り奥に進んでいくと青い炎が灯ったたいまつが二本見えてきて、その前に見覚えのある男が立っていた。

「Welcome! いい物が揃ってるぜ」

「て、テメエはあの時の!? なんでこんな所にいやがる!？」

ラグナが男に聞くと男は当たり前だというように答える。

「当たり前じゃねえか。オレはただの武器商人…なんだぜ」

「いや! 答えになってねえから!」

と突っ込むラグナ。

「何だコイツ? 怪しい奴だが…知り合いか？」

男を見ていぶかしげにワルキューレに問うマリオ。

「ええ、この方はキノコ城に来る途中で会った方で、ただの武器商人だそうです」

「なるほど・・・」

「ヒツヒツヒツ…そういうことよ。…ところであんた。」

とマリオを指差す男。

「ん? 俺か？」

「そんなちやちな手袋で戦うよりも、こっちのメタルグローブの方がオススメだぜ。安くしとくぞ。」

そういうと男は金属で出来た丈夫そうなグローブを取り出す。

「ちやちな手袋だとお!? 俺がコイツをどんなに大事にしているのも知らねえでよくも…」

「…確かに。だが、1人ならそれでも構わねえが万が一、あんたのそのプライドで他の2人が傷ついたらどうするつもりだ？」

男の返答に雷に打たれたように黙るマリオ。

「!…そ、そうだな…お前の言う通りだな。わかった、そいつを売ってくれ」

「ヒツヒツヒツ…Thank you」

とマリオはメタルグローブを購入した。その光景を見て・・・

(あの野郎・・・口回しが上手いのか、それともマリオが乗せられやすいタイプなのか…)

（あの時の戦いするときにもこうして突然現れて武器を売っていく商人の方がいらしゃいましたね…）

新しく買ったグローブを装備したマリオはどこか嬉しそうだった。

「よし、じゃあ行こうか」

「ちよつと待ちな」

と男がラグナたちを静止する。

「何だ、まだ何か買ってくださいってか？」

とラグナは心底うざそうに言う。

「ここから先の道はボートの類がないとキツイぜ。そこで、オレが小舟を売ってやろう。」

男の言葉にマリオははつとする。

「そうか、この先はアレだからな…俺は構わないが、2人は経験ないし、ワルキューレは女だからな。その辺を考えるとすれば…買うしかないか。」

「ヒツヒツヒツ…あんた、わかつてるじゃねえか。」

「すでに一度、体験済みなんぞね。」

とマリオ。ラグナたちはさっぱり訳が分からないようだ。

「こんな小舟買ってどうするんだ？何がなんだかわかんねえんだが」とマリオに聞くラグナ。

「この先の階段を降りた辺りに置けばいいんだ。まあ、すぐにわかるって。」

マリオはそう言うと、小舟を担いでさつさと階段を降りていった。ラグナとワルキューレは商人に一応礼を言ってから（ラグナのほうはドラえもんが強制的に言わせた。）、マリオの後を追いかけた。階段を降りた先はだいぶ広い空間になっていた。マリオは2人の近くに小舟を置くと、奥の壁のそばにあるスイッチを押しに行った。

「こんなところに小舟置いていいんですか？」

とワルキューレが聞く。

「へへへ…まあ見てなつて。」

そついいながらマリオがスイッチを押そうとした時、横の通路から

何かのうなり声が聞こえてきた。

「何か来てるみたいだぜ」

と腰にかけてある大剣を手に取り臨戦態勢を取るラグナ。

「ちっ、これから面白い事するつてのによ！」

マリオは舌打ちする。

奥から現れたのは、クロウラーという名のハナチャンを巨大化して、さらにグロくしたようなモンスターだった。

「おいおい・・・でけえな。しかも見るからに毒持ってそうだし」

ラグナの言うとおり、クロウラーの口から呼吸とともに紫色の霧を吐いていた。

「ああ、さっさと倒したほうがよさそうだな・・・」

そういうと、マリオはいったん壁から離れ、ラグナたちの元へ戻る。先に仕掛けてきたのはクロウラーだった。クロウラーは甲高い雄たけびを挙げながらラグナ達に向かって、毒霧を吐き出す。

「しゃらくせえ！」

とラグナは前に立ち、瘴気を纏った右腕で毒霧を払う、そして大剣を銃に変形させ、連射する。だが、やたらでかいのでかすり傷程度だ。

「ラグナ援護するぜ！」

そう言いながらマリオはファイアボールを放ち、ラグナを援護する。ウルキューレも、2人の攻撃の隙の時に毒霧を喰らわないように斬りつけていた。しかし、これほど攻撃を受けてもクロウラーは倒れる気配はない。

「くそ・・・ちががあかねえ。そればかりか俺やマリオばかり狙ってきやがる」

「全くだ・・・、何だよこの虫は・・・」

『それってのび太君やマリオさんが赤い服着てるからじゃないの？』とドラえもん。

「それではこの虫は牛虫とでも呼びましようか？」
とウルキューレ。

「ワルキューレはともかく・・・ドラえもん！冗談言ってる場合かよ！」

とドラえもんに突っ込むラグナ。

『ごめんごめん。所でいい作戦思いついたんだけど』

「作戦？」

とドラえもんの提案に耳を傾けるマリオ。

『ちよつと二人とも耳貸して』

「ん？ああ、分かった」

とラグナとマリオはドラえもんに耳を付ける。と言ってもドラえもんは現在ラグナの右腕に擬態しているため、実際はラグナの右手に2人が耳を押し付けているという形になる。

「なるほどな・・・そりゃあいい！」

とドラえもんの作戦に大いに賛成のマリオ。そして牛虫もといクロウラーに向かうと、

「やい！悔しかったら俺に追いついてみな！」

と下を出す。クロウラーはその行動に怒ったのかマリオに向かってきた。クロウラーの体当たりを受け哀れマリオはミンチにならず、そのまま通り抜ける。突然の事態にでクロウラーは訳が分からず、そのまま壁に激突してしまった。

とそこへラグナがクロウラーの上に飛び乗り、大剣を銃に変形させ、突きつける。

「チエックメイトだな。虫野郎・・・ベルゼルブ・ブラスト！」

と銃に装填されている弾丸に瘴気を込めて放つ。弾丸はクロウラーに着弾し、内部にもぐりこんだ後、込められた瘴気のはじけ飛び、クロウラーの内臓を破壊した。

クロウラーは穴という穴に体液を撒き散らしながら絶命した。

「ふう・・・、作戦成功って奴だな」

と別のほうからマリオがやってくる。

実は、種はこうである。前もって幻影の術式をかけ、ホログラム幻影をつかい、クロウラーをおびき寄せる。そしてクロウラーが幻影に体当たりし

て壁に激突したのを見計らい、ラグナが止めを刺すという形である。
「さて・・・だいぶ時間をとられちゃったから急ごうぜ。」

「ええ、そうですね。でもこの小舟で何をするつもりなんですか？」
とマリオに問うワルキューレ。

「まあとりあえずお前ら、そいつに乗ってな。」
と小舟に乗るように促すマリオ。

「わかった、んじゃ乗ろうぜワルキューレ」

とラグナはワルキューレの手を握り、小舟に乗る。それを確認した
マリオはさっきのスイッチを押しに向かう。

「あの時は生身で流されて死ぬかと思ったからな。」

「死ぬって…何やらかしたんだよお前!？」

と顔面蒼白でマリオに問うラグナ。だがマリオは返事はせず、スイッチを押すと急いで小舟に乗り込んだ。すると、スイッチの付いていた壁が上に上がっていきその奥から何かの音がしてきた。

「マリオさん、この音は一体何なんです？」

とワルキューレがマリオに問う。

「さっき水を抜く場所があつただろ。実はその水は別の所に貯ま
ていて別のスイッチを押さないと外に流れない仕組みなんだよ。」
今度はラグナがマリオに聞く。

「…それでその貯まった水はどこから外に流れるんだ？」

「もちろん、ここ」

とキラツの要領で親指でここを指差すマリオ。

「『えええええつ!?!』」

さつきから聞こえていた音は水が勢いよく流れ込んできている音だ
った。

マリオ

「イヤッホーイ!大迫力の川下りの始まりだぜ!」

「オイイイイイイイイイ!こんな小舟じゃ絶対無理だろオオオ
オオオオオオオオツ!」

と某SF大江戸コメディの白髪のパパの男のようなツッコミをする

ラグナ。

「…神のご加護を…」

ワルキューレは神に祈っていた。

『ワルキューレさんが神頼み始めちゃったよ！』

と頭を抱えそうな声音で言うドラえもん。

そうこうしているうちに、鉄砲水が小舟を勢いよく押し流していた。

「Here we go！」

「うわあああつ！」

「キヤアアア！」

『アッー！』

マリオ達を乗せた小舟は川に放り出され、そのままの勢いでどんどん流されていった。

ラグナとワルキューレは必死に舟の縁を掴んで揺れに耐えていた。

一方、マリオは2人の後ろで流木にぶつかからないように舟を巧みに操っていた。しばらく経つと、流れが緩やかになり揺れることもなくなった。マリオは岸に舟をつけると、さっと降りた。ラグナとワルキューレは、少しふらふらしながら降りてきた。

「おい、大丈夫か？」

と心配そうにたずねるマリオ

「ま、まあなんとか…」

「そっか。ケロケロ湖はすぐ近くだからな、張り切って行こうぜ。」
マリオは先頭を歩きつつも2人と右腕のドラえもんを気にしながら、ゆっくりと進んでいた。しばらく歩き続けると大きな湖が見えてきた。その湖には中央に小さな島があり、そこまで橋が架かっていた。

「あの島にカエル仙人がいるんだ。」

と島を指差すマリオ。

「一体、どんな奴なんだろうな…」

そうですねえ・・・とラグナの言葉に相槌を打つワルキューレ。

「仙人と呼ばれるほどの方ですから…徳のある方だと思いますが…」
そう言いながらラグナはカエルが神様のような服を着た姿を、ワルキューレはカエルの被り物をかぶった某パン工場のおじさんみたいな徳のありそうな姿を想像していた。

「へっ、ただの物知りのエロじじいさ。まあ、会えばわかるよ」

というわけで、3人は橋を渡って島に向かった。そこでは白い髭を蓄えたカエルがお茶を飲んでいた。

「カエル仙人！ちよつとじゃまするぜ」

カエル仙人はマリオに気づくと結構はしゃぎながら言った。その傍らで、想像していたものとは違ったのか、舌打ちしてるラグナとワルキューレがいたが気にしてはいけない。

「おっ、マリオちゃん久し振り」。ちつとも来ないから心配したよ」

おっ？とマリオは嬉しそうに言う。

「もしかして俺が来ること知ってた？」

「もち知ってたよー。噂はすぐ耳に入るからの。そして君達のこともな。女神イシター直属”乙女の騎士”ワルキューレちゃん」

とワルキューレを指差すカエル仙人

「ど、どうしてそれを！？」

いきなり名前を呼ばれワルキューレは驚いているようだ。

「そりゃそうだろ」

『ワルキューレさんは有名だからですよ』

とラグナとドラえもんは言う。

「君達も知っているぞい、他の世界から導かれた男、ラグナ・ザ・ブラッドエッジ君に、自我を持った蒼の魔導書、ドラえもん君じゃろ？」

「んなつ！」

『え！？ええー！？』

と驚きを隠せないラグナとドラえもん。それを見てマリオは、な？と言う。

「何でも知ってるんだよ。この爺さん」

「じいさんは余計じゃ！…ではさっそく本題に入ろうかの」

「私達はまだ何も話していませんが…」

とワルキューレ。

「ホホホ。わしを誰だと思つとる。それでも仙人じゃぞ。キノコ王国で起こった事件、女神イシターが君達をこの世界に送つた理由を、適当にまとめれば自ずと答えが出てくるわ」

「す、すごい…」

とワルキューレは啞然とする。

「それじゃあ話が早えーや。教えてくれよ。俺達はこれから何をすればいいのかを。」

と説明を促すマリオ。だが、カエル仙人はそれを静止する。

「まあそつ焦るでない。何故このような事件が起きているのか、とりあえずその辺から知つといた方がいいじゃろう？」

まあな、とラグナは答える。

「なんで連中がイシターやピーチを誘拐しようとしていたのかわかんねーし」

ワルキューレも続ける。

「それにイシター様は、統制機構は魔大戦を再び引き起こそうとしているとおっしゃっていました。この事件と魔大戦とはどういうつながりなのですか？」

うむ、とカエル仙人はうなずくと続けた。

「長いから耳をかつぽじつて聞くように。…今から約5000年

前、”物質界” ”幻想界” ”神界” ”魔界”、この四つの世界は一つじゃった。人、悪魔、神は互いに協力し合い、それぞれの知識、力を使って世界を政経していった。しかし、しかしじゃ。その中の数少ない心無き者達の邪悪な意志により、その世界は破壊と混乱に陥ってしまった…。それが”魔大戦”じゃ。奴らの力は強大じやった…悪しき心はどんなものも壊してしまう…。悪しき心に堕ちた者はみなモンスターとなり、あらゆる民を傷つけた。戦況は完全

に悪しき者達が有利だった。じゃが人々は諦めなかった。そこに一人の英雄が現れた、『ヤマトタケル』じゃな、彼は蒼の宝剣・クサナギで世界を分裂させその時にできた”時の狭間”に悪しき者達を封印したのじゃ。こうして魔大戦は終戦を告げ、タケルは英雄として後世に語り継がれるようになったのじゃ。これでめでたしめでたし。ならよかつたんじゃが。ここ数年か前に起きた同じような事件、ワルちゃんは知ってるじゃろ？」

「はい、あらゆる世界を巻き込んだ事件が起きました。ちなみにワルキューレの言っていたこの事件のことはナムコクロスカプコンをやってみると分かる。

「その時に世界の交わりが起こったこと、そして物質界、とくにドラちゃんのいる22世紀でも何か大きな事が起きたじゃろ？」

『ええ、黒き獣の出現・・・第1次魔導大戦のことですね・・・』とドラえもんが答える。この黒き獣はこの小説のプロローグにちょっぴり出ているのでぜひそれも見て欲しい。

「そうじゃ。その出来事により、時の狭間に封印された悪しき者の心が一時的に解かれたのじゃ。その心は自分達と同じ意志のある者、憎しみを持つ者の中に入ったのじゃ。それが奴らの黒幕じゃろう。」

カエル仙人の言葉にラグナの脳裏にあの惨劇がよぎり、一人の男を思い出す。あの時、地に濡れた刃を握っていた自分の未来の孫・・・セワシの後ろで、笑っていたあの緑色の猫型ロボット・ユウキ・テルミ・・・を・・・。

『の・・・太君・・・び太君・・・のび太君！』

とドラえもんの声でわれに返るのび太。

『カエル仙人の話はちゃんと聞かなきゃダメだよ』

「ああ・・・悪い・・・」

と頭を掻きながらカエル仙人の話を聞くラグナ。カエル仙人はまだ話を続けている。

「統制機構の目的は世界の融合。もう一度世界を一つにすることじ

や。そして悪しき者達のようにその世界を自分達の物にする…」

「へっ、よくあるパターンだぜ。」

とマリオ。カエル仙人はじゃがな・・・と続けた。

「英雄・ヤマトタケルは宝剣の力が悪用されないようにとクサナギを4つのかけらにわけて蒼の境界に封印し、4人の娘にこれを守るようにと託したそうじゃ、だから世界をもう一度一つにするにはその4人の娘の末裔のDNAを採取し、それから次元接触用素体を作りクサナギのかけら・・・つまり4つのムラクモユニットを手に入れ、もう1度クサナギにもどすことじゃ。きっとピーチ姫はそのタケルの娘の1人だったということになるの。」

「な、何だってー!」

とマリオ。

「それでは、4人の娘の末裔うち一人は、統制機構の手に落ちたということになりますね・・・」

とワルキューレ。

「まあ、そういうことになるのう」

とカエル仙人はうなずく。

「だったら、俺たちのやることは決まったな、幻想界の統制機構支部をぶっ潰す」

あのな・・・とラグナがマリオの口を挟む。

「俺やワルキューレはそのために、ここに来てんだよ(俺の場合はウサギに強制的に送られたが)・・・ところでカエル仙人さんよ、やつらの支部はどこにあるかわかるか？」

とカエル仙人に聞くラグナ。

「うむ、恐らく西の大陸の天空時院近くじゃな。じゃがそこにはいるには天空寺院の大巫女様の協力が必要じゃろうな」

天空寺院と聞き、マリオは目を丸くする。

「天空寺院!? あそこって超がつくほどの聖域じゃねーか。一般人なんか入れてもらえねーよ」

とマリオ。

「イシター様直属の私なら問題ないと思いますが」
とワルキューレが突っ込む。

「あ・・・そうでした」

と反省するマリオ。それを見てカエル仙人もうなずく。

「うむ。それが一番良い選択じゃと思うぞ。それに天空寺院の大巫女様はかなりのお力を持ったお方じゃ。もしかしたら4人の娘の末裔の1人かもしれんの。」

『ああっ!』

「まさか!」

「何だと!？」

「マンマミーア!」

「・・・」

「・・・」

『・・・』

2人とドラえもんの冷たい目線がマリオに深く突き刺さっていた。

「・・・すみませんでした」

と何故か謝るマリオ。まあまあとカエル仙人はなだめる。

「これはわしの推測じゃ。あまり気にせん方がいいぞ」

「でも、その可能性は十分あるぜ」

とラゲナ

「ああ、確かにな。でも行ってみなきゃ何も解らねえさ。それにどの道、天空寺院には行かなくちゃならねえんだ。早いところ出発しようぜ。カエル仙人! ありがとよ!」

カエル仙人はマリオの言葉にテレながら言う。

「なーに、マリオちゃんとなしの仲じゃないか。天空寺院に行くにはここから西の大陸に行き、北へ進み、ノイシュタットという港町から船で東の大陸に渡らねばならない。長い旅になるじゃろうが、気をつけるのじゃぞ」

「お心遣い、誠に感謝します」

と感謝の言葉を述べるワルキューレ。カエル仙人は途端にワルキューレ

ーレの手をとり言う。

「な〜に、そんな丁寧にせんでもええわい。困った時はいつでもわしの所に来なさい。ワルちゃんのためなら何でもしてあげるからのお」
「あ、ありがとうございます」

と少し引きながら言うワルキューレ。

その光景を見て、ラグナ、マリオ、ドラえもんは

（（このエロジジイ・・・））

と心の中で思ったという。

「そうじゃ、ついでにこのカエル仙人特製のゴージャスなお守り、”ケロケロバッジ”をやるう」

とワルキューレにケロケロバッジを渡すカエル仙人。

「ありがとうございます。大切にに使わせていただきます」

「いいってことよ。そうそう、西の大陸に行ったらあそこに行つてみるといい。かつて1人の悪魔が治めておつた塔、”ドルアーガの塔廢墟跡”へな」

「何故あの塔の跡地に？」

とワルキューレは疑問符を浮かべる。

「そこへ行けば、もう一つの何かがわかるかもしれん。まあ年寄りの勘じゃ。忘れんように行くんじゃぞ」

マリオはおう！と言いながら続ける。

「これでやる事は決まったな。天空寺院を目指すぜ！」

こうしてラグナたちは統制機構幻想界支部に行く為に、天空寺院を目指して旅する事になった。3人（+α）は改めてカエル仙人に礼を言う。と橋を渡り、次の目的地へと向かっていった。ラグナたちが行った後、カエル仙人は1人、呟いていた。

「いつの時代になつても悪は必ず現れる。じゃが今回の悪は何かが違うような・・・。そして、あのラグナ・ザ・ブラッドエッジ、いや野比のび太・・・彼には何かを感じる・・・。それが何なのかはいずれ彼自身が知ることになるじゃろう・・・」

カエル仙人はそうつぶやくと虚空を見つめた。

TO BE COUNTENED

EP1-4「カエル仙人の導き」(後書き)

何となく、グダグダなような気がする・・・。
でもそんな事は気にせずに次回もがんばりますよ。

EP1-5「ロースタウンの異変」ラゲナが戦う理由」(前書き)

今回はラゲナ(のび太)の過去について少し触れております。
少しグダグダかもしれませんが。
それではどうぞ。

EP1-5「ローズタウンの異変」ラグナが戦う理由」

ケロケロ湖を出発して、天空寺院を目指していたラグナ一行は、途中、町に立ち寄っていた。何故そうなったのかはマリオがある提案をしたからだった。

それは数分前にさかのぼる。

「なあ、とりあえず今夜はこの町で休んでいこうぜ。キノコ城を出てから、ずっと歩きっぱなしで足が痛いし、川下りで舟にあちこち体ぶつけて痛いし、じーさんの長い話で耳まで痛くなっちゃったからよ。それにここまでは俺が知ってる道のりだったが、西の大陸は全く知らねえ。未知の領域に踏み込むなら明るい方がいいし、準備も整えておかねえとさ・・・」

「却下」

とマリオの提案を一蹴するラグナ。

「何でだよ」

と不服顔のマリオ。ラグナはため息をつくともマリオに詰め寄る。

「あのな、俺達は急いでんの！一刻も早く天空寺院に行って図書館（統制機構支部の別名）を潰さなきゃいけないの！それに、宿泊まれる金なんか無いって言ってるの！OK？」

「まあまあ・・・」

とラグナとマリオの間を押しわけワルキューレが押しのける。

『のび太君、マリオさんの言うとおりこのまま歩きっぱなしじゃダメだよ。もうちょっと自分をいたわらなきゃ・・・でもさ、マリオさんこの町のこと知ってるんですか？』

とドラえもんはラグナをいさめ、マリオにこの町のことを問う。

「ああ、ローズタウンって町だ。以前の冒険でこの町を救ったことがあるんだよ。宿屋のおかみさんに頼めば、またタダで泊めてくれるかもしれないし、早く行こうぜ。」

と言っわけで、ラグナはしぶしぶローズタウンで一休みすることに

した。

しかし、そのローズタウンでは不思議なことが起きていた。町民が動かずに突っ立っていて、さらに空からはどこからともなく矢が降っていた。

「何だこりゃ!？」

とラグナは驚く。マリオは信じられないといったそうに目を見開いていた。

「こ、こいつはまさか・・・」

とか細い声で言う。

「そこの方に話を聞いてみましょう。」

とウルキューレが切り出した。ラグナたちは近くにいた町民の話を聞くとどうやら空から降ってくる矢に刺さると動けなくなるそうだとマリオはそれを聞き、よっぽど信じられないのか叫んだ。

「ばかなっ! こんな事が起こるはずがない! 奴らは俺が壊滅させたはずだ!」

「奴等? 奴等って誰だ?」

とラグナが聞く。

「・・・とりあえずこの話は後だ。宿屋に行こう。こうなったいきさつを知りたいからな。」

降ってくる矢を避けつつ、マリオ達は宿屋の中に入りカウンターの奥にいる女性に話し掛けた。

「おーす、おかみさん」

マリオの声におかみさんと呼ばれた女性は微笑んだ。

「あら、マリオさん。お久しぶりですね。ちよっと待っててくださいね」

そう言うとおかみさんは2階に向かって呼びかけた。

「トイドー、マリオさんがいらしてくれたわよー」

すると2階から小さな男の子が駆け降りてきた。どうやらこの子がトイドーだろう。

「わあ! マリオさんだ! ねえ、また旅してるの?」

といいながらマリオに抱きつくトイドー。

「ああ、悪い奴を懲らしめるためにな」

とトイドーの頭を撫でながら言う。とトイドーはラグナたちに気づく。

「あれ？その人達は誰？」

「ちよつと事情があつて、一緒に旅をしている連中だ」

「へー、お兄さん達誰？」

と自己紹介を求める。

「私はワルキューレと申します」

とお辞儀をするワルキューレ。

「俺はラグナ・ザ・ブラッドエッジだ。ラグナでいいぜ」

と頭をかきながら自己紹介をするラグナ。

『僕、ドラえもんです』

とラグナの右腕からドラえもんが自己紹介をする。

「えっ！？右腕が喋った！？」

とトイドーが驚く。

「ああ、ドラえもんは俺の義手なんだ」

「へえ、すごいね。触ってもいい？」

とトイドーが関心深げにドラえもんに言う。

『いいよ』

「ありがとう。わー、すごく硬いね」

『そりゃ僕は元々ロボットだからね』

とラグナの右腕もといドラえもんを触り喜ぶトイドー。

「無邪気なもんだな子供つてのは・・・」

と苦笑するマリオ。そしておかみさんのほうへ向き直ると町の外が何故あなつたのかを聞く。

「それよりおかみさん。どうなってるんだ、この町の状況は？」

それが・・・と言葉を濁すおかみさん。

「わかりません...ある日突然空から矢が降ってきたんです。刺さった人はご覧の通り、動けなくなってしまうんです。矢はどうやらあ

の森から飛んできているようなんです。」

マリオはおかみさんの言葉にふむ・・・と何か考え込んだ後、言う。
「やっぱりそうか…よし立ち寄ったついでだ。この事件の元凶、俺達が見つけてやる！」

トイドーはラグナの右腕を触るのをやめマリオに向き直る。

「えっ！本当！」

「でもよろしいのですか？連れのお二人を見る限り…何か急ぎの用があるのではありませんか？」

とおかみさんはラグナとワルキューレを見て心配そうに言う。

「なあにずっとタダで休ませてもらってたんだ。このくらいやらないと英雄の名が廃る。」

「それに困っている人を見過ごすわけにはいきません。力を尽くしましょう。」

「・・・たく、しょうがねえな。こいつら2人放っておくわけにもいかねーし・・・俺も手伝うぜ」

「ありがとう！ワルねえちゃん！ラグナ兄ちゃん！」

と意見が3人一致したラグナ一行。一方ドラえもんは考えにふけていた。

（…カエル仙人の話に出てきた”時の狭間”と、さっきのマリオさんの言葉が妙に引っ掛かる…思い過ごしならいいんだけど…）

おかみさんは嬉しさのあまり瞳を潤ませ感謝の言葉を述べた。

「そうですね、皆さんありがとうございます。ささ、お上がりになつてください。お代なんて結構ですからゆつくり休んでくださいね。」

「また悪いなおかみさん。じゃあ、明日に備えて休ませてもらうぜ。」

というわけで、3人はさっそく休ませてもらうことにした。

その日の夜中・・・ラグナは夢を見た。そう、まだ自分がのび太だった頃、あの惨劇が起こる数時間前の記憶だった。

あの日、のび太は一人空き地の土管で寝そべり青空を見上げていた。
「雲ひとつ無いきれいな空だなあ・・・」

とふとドラえもんを未来へつれて帰ろうとしたセワシを殴ったことを思い出す。

あの時、のび太はたまたまその現場に居合わせていた。

ドラえもんとか誰かの話し声が聞こえ耳を澄まして聞いていた。

その誰かは声でセワシだと分かった。だんだんとドラえもんとセワシの話し声は口論となり、セワシの言った一言に知らぬ間に激昂してしまった。

『ロボットの癖に人間に反論するのか！？』

その言葉を聞き、のび太の何かが切れた。そして次の瞬間、自分はセワシを殴っていたのだ。

「さすがに、セワシを殴って追いついたのはまずかったかな・・・」
と思考にふけるのび太。と不意にのび太の携帯電話がなる。

「もしもし？」

と電話に出ると、ドラえもんだった。

『のび太君、今何処にいるのさ？今日はしずかちゃんと一緒に勉強をするって約束だったろ？もうしずかちゃん来ちゃってるよ』

「えっ！ああ、そうだった！ごめん！今戻るよ！」

とのび太は土管から飛び降りるとすぐ、家に直行した。

家に戻ったのび太が目にしたものは真っ赤に燃える自分の家だった。

「な・・・なんだ！？何が起こってるんだ！？」

と自宅の門をくぐり庭を見える。するとすでに避難していたドラえもんとしずかがいた。しずかは少し怪我をしており、ぐったりしている。

「しずかちゃん！ドラえもん！一体何が・・・」

「のび太君！今すぐ、しずかちゃんをつれて早く逃げるんだ！ここ

は僕が・・・」

「おじいちゃん・・・」

とドラえもんの言葉をさえぎり、聞き覚えのある、しかも冷たい氷のような声が聞こえた。振り向くとセワシがいた。何故だろうか、右手には日本刀を握っていた。

「セワシ・・・？何でこんな所に・・・」のび太君ダメだ！もう僕らが知っているセワシ君じゃない！早く逃げるんだ！」・・・え？ドラえもん、それってどういう・・・」

とドラえもんの言葉にのび太が振り向いた瞬間だった。

「・・・おじいちゃんが悪いんだよ・・・」

その声と共にヒュンと日本刀が振るわれ、次の瞬間・・・ドサリ。と何かが落ちた音がする。

「？」

のび太が音のしたほうを見ると、右腕らしきものが落ちていた。何だろう・・・マネキンかな？とそう思った瞬間だった。

「ウツ！」

と右腕の二の腕部分に焼け付くような痛みが襲う。とっさに右腕を抑えようとするが、

（・・・あれ？感触が・・・無い？僕の二の腕から先の感覚すら全く・・・無い？・・・まさか）

と右腕に目を持ってくると、自分の右の二の腕から先が消失していた。

「・・・ツ！！ハアツハアツ！」

ラグナは宿屋のベッドで寝ていたが、この夢で目が覚めてしまう。野比のび太の名を捨てても拭い去れない過去の記憶。それが悪夢として彼を苦しめていた。

「くそつたれ・・・」

ラグナはそう毒づくベッドから起き上がり暖炉の前の椅子に腰掛け、燃え上がる暖炉の火をぼーっと眺めていた。すると、

「…どうなされました？」

ラグナが振り返ると、ワルキューレがベッドから起き上がっていた。
「ワルキューレか・・・悪いいな、起こしちまって」

とラグナが申し訳なさそうに言う。

「いいえ、私も眠れなかつたんです」

そう言うと、ワルキューレも隣の椅子に腰掛けた。ラグナはワルキューレを見てみる。華奢で透き通るような白い肌。澄んだ青緑の瞳、今にも光り輝きそうなブロンドの髪。とても戦場で剣を振るう戦士とは思えないほど綺麗だった・・・。それを見ているうちに、

「なあ、ワルキューレ」

いつの間にかワルキューレに問いかけていた。

「何でしょうか？」

返事を返され、ラグナは我が身を疑った。何故口が勝手に動いたのか。内心で戸惑う主を放って、口唇が再び言葉を紡ぐ。

「何でアンタは戦う道を選んだんだ？」

「え・・・？」

と不意をつかれたような顔になるワルキューレ。

ラグナも心の中でやめろ、と叫んだ。余計な真似をするな、と。しかし、体はあくまで反抗し続けるつもりの方だった。

「アンタならもつと別の、他の道が選べたんじゃねえのか？」

ワルキューレは目を丸くしていた。まさか、神族でもない男にそんなこと聞かれるのは意外だったのだろう。ラグナもまたこんなことを言うつもりなどなかった。しかし、実際に言葉として発してしまっている。自分の考えとは裏腹に動く体にラグナは戸惑った。

しかし、そうした疑問を以前から抱えていたのはたしかだった。暮らしていれば、否といっても見えてくる闇がある。この世界が、無垢で綺麗なものではないと知ってしまう。神族であり戦う力があるとはいえ、華奢な少女が命をかけて守る価値がどこにあるのか。ややあつてワルキューレが口を開く。

「私は・・・、使命の為に、いえ・・・皆を守りたいから戦う道を

選びました・・・」

ワルキューレの言葉は短い短刀か矢だった。耳を介さずラグナの胸にするりと突き刺さる。

（皆を守る・・・か・・・どっかで聞いたような響きだな・・・）
ドラえもんとの語らいで聞いたのかもしれないし、ジャイアンやスネオたちとの話で出てきたのかもしれない。だがどれも違っているようだ。ワルキューレは声に照れを滲ませて続けた。

「今まで傷つくこともありましたけど・・・だけど皆の涙は私は見たくありません・・・皆の笑顔が見たいから、私は戦うんです」
そう言くとワルキューレは恥ずかしそうに舌を出す。

「すいません、熱くなっちゃって」

「そうか？俺はかっこいいとおもっぜ？守りたい人の為に戦うってのはさ」

とニヤツと微笑むラグナ。とその時だった。

「うわあああああああああつ！」

とトイドーの悲鳴が聞こえてきた。

「なんだ！？」

「トイドー君の声…外からのようです！」

あわてて外に出てみると、トイドーがドアの前で動けなくなっていた。

「トイドー！うおっ！あぶねえっ！」

近くに駆け寄ろうとしたとき、空から降ってくる矢が危うくラグナに刺さるところだった。

「早く中へ！」

2人でトイドーを抱えると急いで家の中へと運んだ。トイドーの悲鳴でちょうど起きてきたマリオとおかみさんに事情を話し、トイドーをベッドに寝かせた。

「ああ、トイドー…あれほど外には出るなと言ったのに…」
と嘆くおかみさん。

「何故トイドーは外に出て行ったんだ？しかもこんな夜中に…」

とマリオは疑問に思っていた。

「マリオさん達が上に行った後、自分もマリオの役に立ちたいと言っていました…きっと何かを調べるために外に出て行ったんだと思います。」

「トイドー…」

マリオはトイドーの顔を見る。

「お願いですマリオさん！トイドーや町の皆を助けてください！」
とマリオの手を握りいうおかみさん。

「当たり前じゃないか！言われずとも、そうするつもりだ。」
ラグナはトイドーを抱え込んだときに見つけた紙をマリオに差し出す。

「そう言えばトイドーの奴こんなもん握り締めてたぜ」
マリオはそれを見る。

「これは…なるほど。ありがたく使わせてもらうぜ、トイドー。」
と紙をしまうマリオ。

「もうすぐ朝になりますしこのまま出発しましょう。」
とワルキューレが出発を促した。

こうしてラグナ達は、ローズタウンの隣にある森に入ってしまった。
『ずいぶん深い森ですね。』
とドラえもんがマリオに言う。

「この森はハナちゃん森と呼ばれていてな、入口の辺りはまだいいんだが、奥に進んでいくほど似た光景が続いて迷っちゃうんだ。だから裏を返せば、隠れるにはうってつけってわけだ。」

「なるほど…だからこの森に犯人の隠れ家のようなものがあると判断したんですね。」

とワルキューレ。でもよ、とラグナが聞く。

「すっげー迷いやすいこの森ってどう行けばいいんだ？」
ラグナの問いにマリオが答える。

「実はこの森の一番奥には開けた場所があつてな。町を狙うならそ

れなりに広い場所が必要だろ？だからそこに行けばいいと思ったんだよ。」

「で…そこにはどうやって行くのですか？」

とウルキューレ。マリオは良く聞いてくれました。といわんばかりに言う。

「それをトイドーが調べてくれてたんだ。この紙切れにはそこまでの道標が書いてある。後でトイドーに礼を言わねえとな。」

その紙切れに記された道標を辿っていくと、やがてかなり開けた場所に着いた。そこには妙に縦長の連中…というより矢のモンスター達がわらわらと集まっていたのだ。その中央には弓のようなモンスターが立っていた。

「997、998、999、1000！やっつとこしや1000本ニヤ！困った奴らの顔は最高ニヤ！さあ！次の目標は1010本ニヤ！」

目の前にいるモンスターを見てウルキューレは言った。

「彼らですね。森から矢を放ち、民を困らせていた犯人は」

「話してる内容から推測すれば間違いねえな」

とラゲナ。マリオは意外だと言わんばかりに叫ぶ。

「なっ！？そんな馬鹿な！奴らはもう壊滅したはずなのに！」

「マリオさん、彼らのことをご存知なのですか？」

ウルキューレはマリオに聞く。

「奴らは昔この国を乗っ取るうとしてきた侵略者、カジオー軍団の自立型兵器！あの俺の活躍でそいつらの親玉を叩きのめして、全て終わったはずだ…なのに何故！？」

「残党部隊ということでは？」

「そんなの絶対ありえねえ！」

一方、犯人達はマリオ達に気づいていないようで陽気に話していた。「オイラ以外のヤツラが困った顔するのはとっても楽しいニヤ！お前達もそう思うだろニヤ？」

「そのとおりです！ユミンパ様！」

「ニヤハハハ！ユカイだニヤ〜！」

「あんにやる〜！許せねー！」

マリオは思わずユミンパと呼ばれるモンスターに向かって突っ込んでいった。

「マリオさん！？」

2人もあわてて後について行った。

「ユミンパア！」

とマリオが大声で叫んで初めてマリオ達に気づくユミンパ。

「ニヤ？ニヤんだお前は！？ムムム…その髭面、どこかで見たことがあるような…、ニヤー！思い出したニヤ！お前はあの時、オイラの邪魔をしたヒゲ男！」

「俺のことを知ってるということはあの時殺りあった奴と同一…量産型ではないってことか？」

と思案を巡らせるマリオ。

「ニヤにをごちゃごちゃ言ってるニヤ！あの時の恨みここで晴らせてもらうニヤ！今度こそお前を射抜いてやるニヤ！」

と戦闘態勢に入るユミンパだが、マリオが片手で制止する。

「待てユミンパ！お前、どうやって復活した！？」

「知らないニヤ！目が覚めたら部下達とここで一緒に倒れてたんニヤ！これは天がもう一度チャンスくれたからニヤ！」

「なんだと…、だったら二度と悪さ出来なくしてやるぜ！」

マリオは素早くユミンパに殴りかかったが、ユミンパの体は細いのであっさりと避けられてしまった。

「ニヤハハハ！そんな大振りじゃ当たらないニヤ！次はこっちの番ニヤー！」

そう言うユミンパは手下を1体掴み、自分の体にセットして矢のごとく放ってきた。だがマリオもこれを軽く避けてみせた。

「へっ、そんなへなちよこな飛ばし方じゃ俺には当たらないぜ。」

「ニヤ、ニヤにお〜！よくもオイラを馬鹿にしてくれたニヤ〜！もう許さないニヤ！お前たち！アレいくニヤー！」

と手下たちに言う。

「ラ、ラジャー！」

ユミンパは少し後ろに下がるとさつきより体を大きく曲げ始めた。その弦の上に手下達が何体も乗り始めた。

「まさか…これは…」

と冷や汗をたらすワルキューレ。

「ちよつとヤバいかもな…」

と苦笑い混じりにマリオが言う。

「お前が挑発するからだろうが！」

とラグナが突っ込んだ。

「食らうニヤ〜！ユミンパ流、五月雨！」

ユミンパから幾つもの矢がマリオ達めがけて飛んできた。さすがのマリオ達もこれは避けきれず、ともに喰らってしまった。

「くっ…ユミンパ。お前、こんな技持ってたか？」

「この技は前々から考え付いていたニヤ。でもある理由で禁断の技にしたんだニヤ。」

とユミンパの意味深な発言に眉をひそめるマリオ。

「何故だ？」

ユミンパは突然腰を押さえ叩く。

「それは…アイタタ！…あんまりやると腰が曲がってしまうからニヤ。」

そんな様子を見てラグナ、ワルキューレ、ドラえもんは

（元々曲がつているように見えますがね…）↑ワルキューレ

（禁断の技なのにちよつとバカにされたくらいで使うのはいいのかな？）↑ドラえもん

（アホだ…こいつ…超がつくほどアホだ…）↑byラグナ

「でもこんな技使ってこんぐらいしかダメージが与えられないだつたら意味ないんじゃないの？」

と何ともないようにマリオは立ち上がり腕をぶんぶん回す。

「ニヤにおゝ！よくも言ってくれたニヤ！だったらもう一度やってやるニヤ！」

ユミンパは再び体を大きく曲げ始めた。そして、手下達が弦の上に乗ろうとしたその時、

「ファイアーボール！」

マリオがユミンパに向けてファイアを放ったのである。体を大きく曲げているユミンパは、動くことが出来ずまともに喰らってしまった。

「ギャアア！あ、熱いニヤ！」

と火に包まれながら飛び跳ねるユミンパ。

「確かにその技は強いかもしれねえ。けどな、単独で使うのは隙が大きすぎるんだよ。技の繋ぎつてのを、もう少し考えた方がいいぜ。」

と説教を始めるマリオ。

「ぐぬぬぬ…せ、説教なんか聞きたくないニヤ！」

「だったらお望み通り、これで終わらせてやるぜ！」

マリオはユミンパの所までスライディングで滑り込んだ。

「いくぜ！上スマッシュ！（浮かして）空中横！（落として）下スマッシュ！（浮かして）空中横！（落として）最後に！チャージ横おおおお、スマアアアアアアアッシュ！（横にぶっ飛ばす！）」

マリオは次々と技を当てて（ ）内のように、最後はユミンパを吹っ飛ばした。

「ワルキューレ！そっち行つたぞ！」

ユミンパが吹っ飛んでいく先には、すでにワルキューレが待ちかまえていた。

「行きますよ！ラグナさん！」

ワルキューレは剣を思いつき振って、野球の要領でユミンパを打ち返した。その先ではラグナを担いだマリオが高くジャンプしていた。

「止めはラグナ！お前が決める！どりゃあ！」

とラグナを投げる。

「カーネージ！」

ラグナは大剣を逆手に持ちかえるとそのままユミンパに突き刺す。

「シザアアアアアアアアアアアア！」

そしてそのまま叫びながらユミンパを地面に叩きつけた！

「ギャアアアアアアアアアアアアア！」

というユミンパは断末魔と共に爆散、消滅した。ユミンパが死ぬと同時に手下たちも消滅する。

「ま、こんなもんだな。ローズタウンの人もこれで元通りだろ」

と大剣を背中にかけてラグナが言う。

「ああ、そうだな。しかし何故奴らは復活したんだ？」

とマリオがユミンパが復活したことに疑問に感じる。

「わかりません…私も少し不安が残りました」

とワルキューレも不安顔だ。

「今は悩んでも仕方ねえだろ。とりあえず町に戻ろうぜ」

こうして、ユミンパを倒したラグナ達は元来た道を戻り、ローズタウンに戻った。町では今まで動けなかった人々が嬉しそうに外を歩いていた。3人はひとまず宿屋に向かうことにした。中に入るとトイドーが元気に走り回っていた。

「あ！マリオお帰り！」

と嬉しそうにマリオにかけよるトイドー。

「マリオさん！お怪我はありませんか？」

おかみさんも心配そうにかけよる。

「ああ、大丈夫だ！それより、元に戻ったのか、トイドー！」

マリオはトイドーを抱き上げ嬉しそうに言う。

「うん！僕ずっとマリオが悪い奴をやっつけてくれるって思ってたよ！」

「本当にご無事でなによりです。」

それを見て微笑むワルキューレ。

「皆さん、ありがとうございます。このことで何かお礼をしたいのですが…」

とおかみさんが聞いてきた。ドラえもんが口を開く。

『これから僕達は、西の大陸に向けて出発するのですが…どうやら橋が壊れてしまっていて、渡れないんです。無理を承知でお願いしたいのですが…どうか橋の修理をしてもらえませんか？』

「そんなの、お安い御用ですよ。すぐに町のみんなを集めれば明日にでも出来ますので、皆さんはそれまで休んでいてくださいな。お代なんて結構ですから。ごゆっくりお休みください。」

3人はお言葉に甘えて、さっそく休ませてもらうことにした。3人が寝ている間に町の人々総出で橋の修復してくれた。

次の日の朝、町の入口で人々と別れの挨拶を交わすことにした。

「町の間みんなが手伝ってくれたおかげで、橋を無事に修復されました」

「マリオさん！どうかお氣をつけて！」

「あなた達にも本当に感謝してるわ。」

「マリオ、ラグナ、ワルキューレ、ドラえもん、ありがとうございます！」

と町の人は手を振りながら言う。

「みんな！また来ると思うがここでお別れだ！俺はこれから、世界を救う旅に出る！今度会う時は偉大な英雄になってくるぜ！」

とサムズアップをするマリオ。

「おかみさん、御世話になったな」

とラグナ。

「皆さんに平和が訪れんことを…」

とワルキューレ。

『それじゃあ皆、さようなら』

とドラえもんの順に別れを告げる。

ラグナ達は町の人々に見送られながら町を後にし、橋を渡った。

「んじゃ、まずはドルアーガの塔跡地に行こうぜ」

と町の外へ出てラグナは伸びをしながら言う。

こうしてラグナ達は無事、西の大陸へと進むことができた。はたして、ドルアーガの塔跡地に一体何があるのだろうか？そして、倒したはずのユミンプが復活していたのは何故なのだろうか…。それは次回の講釈にて……。

T O B E C O U N T E N E W D . . . 。

EP1-5「ロースタウンの異変」ラゲナが戦う理由」(後書き)

いかがだったでしょうか、次回はラゲナ達はドルアーガの塔跡地へ向かいます。

EP1-6「戦士達（たたかうものたち）のつどい」（前書き）

コンティニューソフト
ブレイブルーCSでΛ-11でプレイしてみたけど、操作するのが
難しい。けどラスボスのテルミ戦まで行けました。結局そいつに負
けたけどね・・・。

EP1-6「戦士達（たたかうものたち）のつどい」

ラグナ達がローズタウンを出発して、ドルアーガの塔廃墟跡に向かっている頃、その跡地では2人の男女が待ち合わせをしていた。2人は誰かを待っているらしく、イライラと同じ場所を行ったりきたりしている。

「遅い・・・遅い遅い・・・んもー遅ーーーーーい！」

「だから落ち着けよ、ルーティ。遅い、遅いってまだ約束の時間から10分しか経ってないじゃないか」

と青年は女性、ルーティを落ち着かせるが、

「あのね、スタン！十分じゃない！レディを待たせるなんて、黄金の騎士も底が知れたわね！」

「忍耐力がないな」

と相変わらずおかんむりのルーティに呆れ顔の青年、スタンだった。
「あのね、私は都会派のレディだからアンタみたいな田舎者とは違うの！」

と反論される。

「それは関係ないだろ！……ねえルーティ」と
とスタンはルーティに聞く。

「なによ！」

「黄金の騎士がまた動き出したって事は、やっぱり何かしらの事件が起きたって事なのかな？」

それを聞き、ルーティはうーんとしばらく考え、口を開く。

「さあね。でもあの戦いで全て終わったんじゃないの？神の目もこの世界から消滅しちゃったし。ていうか、私達ももう旅をする意味無いんじゃないの？」

「それは言えてるね。でもやっぱり気になるな……」

「あんたも人のこと言える立場じゃないじゃないのよ！そんなこと、黄金の騎士が来れば、すぐにわかることじゃない！あーもう！ホン

ト遅いわね！」

とまた再び『黄金の騎士』が来ないので再び苛立ちを感じ地団駄を踏むルーティ。

『スタン』

ふとスタンの腰に差ししてある剣が声を発する。

「ん…どうしたんだ、デймロス？」

とスタンは剣、デймロスに語りかける。

『気をつける、スタン。何かの気配を感じる』

ここで説明しよう、実はこの剣、デймロスはただの剣ではない。意思を持った剣『ソーディアン』の一つであり、またルーティの持っている剣、アトワイトもまたソーディアンなのである。

「何だつて?!」

と驚愕の声をあげ警戒するスタン。

「どうしたのよ？スタン、デймロス？」

とスタンの異変に気づき、振り向くルーティ。

「気をつけて、ルーティ。近くに誰がいる！」

「黄金の騎士じゃないの？ようやく来なすったか」

「違うつて！」

と突っ込みを入れるスタンだった。とその時。

「見つけたぜ、お二人さん」

突然、後ろから声が聞こえてきた。声のした方を振り返ると、塔のテラスに見知らぬ男が立っていた。

「何者だ！お前は！」

とスタンは男に問うが、

「人の名前を聞くときはまず自分から名乗るのが礼儀じゃないのかい？」

と言り返される。

「あ…そうか」

バシン！

お間抜け顔のスタンをルーティはどっから持ってきたのかハリセン

で張り倒した。

「おバカ！納得してどうすんのよ！ちょっとあんた！いつからそこに居るのよ！」

男はくつくくと笑いながら言う。

「安心しな、今来たばかりだよ。デート中のカップルの会話を盗み聞きするような趣味は無いからね。」

「デデデ、デートオ！？誰がこんな田舎もんとー！」

「い・・・田舎者って・・・あ、あんまりだ・・・」

顔を真っ赤にして否定し、田舎者扱いするルーティにスタンはむなしくなり涙目になってしまう。

「で？私達に何の用よ？」

「実は君達の持つ喋る剣に用があるんだ」

と男は2人の持つデймロスとアトワイトを交互に指差し言った。

「ソーディアンに用だって！？」

と聞き返すスタン。

「そういうこと、それがどうしても欲しくてね・・・それさえあれば我が統制機構はもっと強くなれるんだよ。なーに、少し貸してもらっただけさ。データさえ取ればこちらとしては満足なんだ」

「誰があんたなんかに貸すもんですか！」

「何故データを取る必要があるんだ！？それに部隊って・・・一体何の話だ！？」

と男のソーディアン引渡しを拒否するスタンとルーティ。男ははあ、とため息をつく。

「やはり、話し合いでは無理か・・・こうゆう手はあまり好きじゃないんだけどねえ」

男が手を挙げ、その合図と共にスタンとルーティを3人の統制機構兵が取り囲んだ。

「な、何だ！？」

「ちよつと！何するつもりよ！」

と突然の出来事に狼狽する2人。

「任務はソーディアンの奪還だ。どちらか一本手に入れば構わない。マスターの方はどうしようが好きにしる。だがソーディアンには傷一つつけるなよ」

「了解しました。スネ吉様。これより戦闘を開始します」

男、スネ吉の命令にうなずき、銃を構える兵士達。それと同時にスタンもディムロスを構える。

「来るぞ、ルーティ！」

「スタン！しっかりやんのよ！」

「よし！つて…えっ？」

とスタンが振り向くとルーティは近くの岩陰に隠れ、仮。ラ。ダー剣に出てくるギ。レンの如くジーと見ていた。

「ちょ…ルーティ！？」

「何よ？あんたレディに戦えっていうつもりなの？」

「いや、そんな事言わないけど…数が数だし…手伝って…大丈夫よ。ちゃんと回復とかアシストしてあげるから。さっ張り切っていくわよ」…あんまりだ…」

説得しようとするもあっさりとルーティに拒否され滝のような涙を流すスタンだった。

そんな光景を見て、統制機構兵は…

（こいつ、尻に敷かれてる感があつて…なんだか可哀想だな…でも任務はこなさせてもらうぜ！）

彼らは彼らなりにスタンを哀れに思っていた…そんなわけでスタンは一人で戦うことになってしまった。しかし、

「セイッ！ハアッ！」

ズバァッ！

「グワァッ！」

ドバァッ！

「ガハァッ！」

「止めっ！飛燕連脚！」

ガガガッドゴォ！

「チャバアツ！」

統制機構兵はソーディアンに傷がつくのを恐れてか、あまり強い攻撃を仕掛けてこなかった。そのおかげで、スタン1人でも案外楽に勝ててしまったのだ。目を回して倒れている統制機構兵を尻目にスタンはスネ吉に向き直る。

「どうだ！」

ルーティも戦闘が終わったのを確認しスタンの横に並びアトワイトをスネ吉に向ける。

「さあ！次はあんたの番よ！」

だがスネ吉は2人のほうを向かず、あさつてのほうを向いていた。

「……」

「ちよつとあんた！聞いてんの！？」

スネ吉はしばらく黙った後、

「あちゃー、やっぱりここにも転移してきたか。悪いけどまた今度奪いに来るわ。君達も早くここから離れた方がいいよ」

そう言うときスネ吉は転移装置でどこかへ転移していった。

「あっ！あいつ逃げた！」

「何だったんだ、あの男。デймロス、何かわからないかい？」

とスタンはデймロスに聞く。

『さあな。見たことのない連中だった。それよりスタン、まだ何かいるぞ』

「えっ？」

「まだ何がいるつてのよ！」

と狼狽するスタンとルーティ。

『ルーティ、気をつけて！こっちに向かって来てるわ！』

アトワイトの声と共に2人の前に何かが姿を現した。

一方その頃、ドルアーガの塔廃墟跡を目指して歩いていたラグナ達はスタン達のいる所のすぐ近くまで来ていた。

「なあ、少し休もうぜ」。足が棒になっちまってよ」

マリオはラグナから大剣をかりそれを杖代わりにして歩いていた。

「塔の廃墟跡までもう少しなんだからそこまでがんばれよ」

とラグナはマリオに向かって言う。

「でもよーだいたいこんな所に何があるってんだよ」

マリオの問いにワルキューレは、「さあ・・・」と言い肩をすくめる。

「わかりませんが、何か不吉なものを感じます。それにカエル仙人がそこに行けと仰ってましたから」

「ケツ、あんなじーさんの言うことなんざ、あんまり信じない方がいいぜ」

「お前、ムチャクチャなこと言ってんな」

とラグナは半眼で言う。そうですね、とワルキューレも苦笑しながら言った。

「でもこの先、なにがあるかわかりませんし…ここで少し休んでいきましようか。」

ワルキューレの問いにドラえもんも答える。

『そうだよのび太君。歩き続けてもう昼になるし、そろそろ昼食にしようよ』

「・・・たく、しょうがねえな・・・飯食ったら行くぜ」

そう言うラグナはマリオに水筒とおにぎりを渡す。

「ヤッファー！」

よっぱど喉が渴いていたのだろう。マリオは水筒とおにぎりを取るとさも美味しそうにたいらげていた。ラグナはそれを見てやれやれ・・・といった感じで自分の分のおにぎりを食べようとする。ふと・・・

ざわり・・・

と何者かの気配を感じ、振り向く。

「どうしましたか？ラグナさん」

「だれかいやがる・・・おい、そこにいるのは分かってんだ！出て来い！」

ラグナが一喝すると、3人の周りを3体のスライムが取り囲んだ。

「なんだよ、ただのスライムじゃねえか。でもこのスライム何か黒いな・・・コーヒーが混ざってんのか？」

『墨汁が混ざってるんじゃないの？』

と冗談を言い合うマリオとドラえもん。

「黒いスライム…まさか！こんなことが起こるなんて！」

とワルキューレは狼狽していた。

「どうした、ワルキューレ？」

とラグナが聞く。

「黒いスライムは野生では存在しない種なのです！その正体は、悪魔ドルアーガの邪悪な魔力に染まったスライムなんです！」

「なんだって！？奴はもう消滅したんじゃないのかよ！？？」
とマリオは驚く。

「確かにあの日、ドルアーガは完全に消滅したはず…」

「何かワケがありそうだな。きっとカエル仙人は、このことを知らせたかったんじゃないのか」

そうですね・・・、とラグナの問いにワルキューレはうなずき剣を抜く。

「いくらドルアーガの手先でも、この者達は下級クラスのモンスター。ここは戦って切り抜けましょう！」

こうして3人は黒いスライムと戦い始めた。しかしワルキューレの言ったとおり黒いスライム達は「ジェットス。リームアタック！」をするわけでもなく、そこらのスライムよりは強かったものの、意外と楽に倒せてしまった。

「ちっ、話になんねえぜ。」

とスライムの死骸を踏みつけながらマリオが言う。

「しかし、何故またドルアーガの手先が再び現れたのでしょうか…」

…まさか！ドルアーガがまた！」

「そんな大げさに考えんなって。どうせ生き残りかなんかがまだいたんだろ？」

とマリオの考えを・・・ですが、とドラえもんが否定する。

『昔マリオさんが倒したという怪物も復活していた…これが偶然とは考えにくいですね…』

なら・・・とワルキューレは思案にふける。

「何者かが彼らを復活させたということなんでしょうか…」

「そんなの決まってるんだろ。図書館、統制機構の連中だ」

その時、道の先で剣がぶつかり合う音が聞こえてきた。

「この音は・・・誰かが戦ってるみたいだな、ラグナ、ワルキューレ！助太刀しに行こうぜ！」

そう言くとマリオは2人を連れて、急いで音のする方へと走った。

そこでは、スタンが青い抜け殻の鎧兵2体とスライム1体と戦っておりルーティは後ろで応援していた。

「ちよつとスタン！しっかりしなさいよ！」

「そんな事言ったって3対1はきついよ、おわっ！・・・ルーティ

…しかも相手はドルアーガの手先なんだよ。」

と青い鎧の魔物の攻撃をかわし、弾きながらスタンは反論する。

「何言ってるの！下級クラスのブルーナイトとスライムじゃないの

！もう！しょうがないわね！」

苦戦しているスタンを見かねて、アトワイトを抜きながらスタンの援護に向かう。その時、

『ウガアアアアアアアア！』

『ギシャアアアアアアアア！』

ルーティの後ろにブルーナイトとスライムが新たに現れた。

「げっ！」

「くそ…まだいたのか。ルーティ！逃げるんだ！」

「な、何カッコつけてんのよ！あたしだって戦うわよ！何よ！たかがスライムと抜け殻の鎧なんて、2体ともボコボコにしてやるんだから！」

と強がるルーティだが、いきなり出てきたのにびっくりしてか腰を抜かしており、半泣き状態である。この状態ではいくらルーティが

ソーディアンのマスターでもやられるのは時間の問題であった。と
その時。

「イヤアフウウウ！」

ガツーン！！！！

『グゴツ！』

突然マリオがスタンのそばにいたブルーナイト目掛けてとび蹴りを
かました。

「えっ！？」

「だ、誰だ！？」

突然の乱入者に驚きを隠せないスタンとルーティ。

「トレビアーン。この中身のない鎧もドルアーガの手先か。ど頭か
ち割ったるけえのお！オルア！」

ドゴォ！

『グワアアアアアアアアア！』

何故が見事な広島弁で話すと、ブルーナイトの頭目掛けてジャンプ
で踏みつけて本当に兜を破壊した。

「たいしたことないじゃん。」

と頭部を破壊され絶命したブルーナイトをみて言うマリオ。その時
マリオの後ろでは、今にもスライムが襲いかかろうと忍びよってい
た。

「おい！ヒゲ、ボサっとしてんじゃねーぞ！」

ズバァ！

『ピギイイイイイイイ！』

今度はラグナが飛び込みながらスライムを叩き斬った。

「雑魚が！」

とラグナはそう言い捨て、大剣を振りスライムを斬った際にこびり
ついた体液を払う。

訳の分からない2人の登場にルーティは啞然としていた。そのせいで、
ブルーナイトとスライムが背後から近づいていたのに気がつけ
なかった。

「オイねーちゃん！あぶねえぞ！」

とマリオが声をかける。

「えっ？あっ！？」

『グルルルルルルル・・・』

『ギチギチギチギチ・・・』

「ル、ルーティ！」

スタンも2人も狼狽していた。何故ならこの距離ではルーティを助け出そうにも間に合いそうに無いからである。ラグナは大剣を銃に変形させてブルーナイトとスライムに向け発砲しようとする。そこへ、

「ルーティさん！そこを退いてください！」

ズバァ！

『ピギヤアアアアアアアア！』

最後にワルキューレがスライムを斬り伏せ、ルーティの前に走り込んできた。

「あ、あんたは確か乙女の騎士、ワルキューレ！なんでこんなところにいるのよ！？」

とルーティはワルキューレを見て驚いていた。

「その話は後ほど…、ワルキューレ参ります！でやっ！」

ガギイン！

『グオツ！』

ワルキューレはブルーナイトに斬りかかり、剣を弾いて飛ばさせた。

「はああっ！」

ズドッ！

『グアアアアアアアアアアアアッ！』

そしてブルーナイトを一突きでくし刺しにして倒した。残っている敵はスタンが戦っているブルーナイト1体だけとなった。

スタン

「1体だけなら楽勝だ！たあぁありゃああ！」

斬ッ！

『ウギヤアアアアアアアアアッ!』

スタンは全力で剣を振り、ブルーナイトを真つ二つにした。

「なんとか落ち着いたな。」

敵を全滅させマリオは帽子でスライムの体液やらで汚れた服をはたく。

「危ない所を助けてくれてありがとう」

とラグナたちに感謝の言葉を言うスタン。

「いいんだよ、礼なんかよ」

「お久しぶりです。スタンさん。ルーティさん。」

とワルキューレが言う。スタンもワルキューレを見ると嬉しそうに顔を輝かせる。

「ワルキューレさん!あの日から3年ぶりですね!」

「なんだ、知り合いだったのか?」

マリオの問いにワルキューレはええ、と答える。

「彼らは3年前に起きた事件で共に戦った戦友なんです。」

「あんな達は新顔ね。ワルキューレ、紹介して」

とルーティはワルキューレにラグナとマリオの紹介を求める。

「いいですよ、彼はラグナ・ザ・ブラッドエッジ、と『僕、ドラえもんです』・・・はい、喋る右腕はドラえもんさん、彼らは物質界から来たんです」

「物質界!? 転移してきたのか!?!」

とスタンが驚く。

「ま、そんなもんだ」

ラグナは肩をすくめ答えた。

「そして「この俺が、あの有名な兄弟の長男、マリオだ!」・・・」
とワルキューレの紹介をさえぎり、マリオが自己紹介をする。

「マリオって、たった2人で強大な敵のアジトに潜入して、キノコ王国の姫を救ったっていうあの伝説の英雄兄弟の!?!」

どうやらスタンはマリオを知っているらしく目を輝かせている。だが、

「もつといい男かと思つてたけど実際はおっさんだったのね。」
ルーティの反応はいまいちだった。

「クラア！気にしてること言っくんじゃねえ！コレデモまだ20代なんだぞ！」

気にしていることを言われ憤慨するマリオ。

「おっさんばいのは事実だろーが」

「orz」

とラグナにつっこまれ、へこむマリオ。

一通り紹介が終わったので、今度はスタンとルーティが紹介をする。
「俺はスタン・エルロンだ。よろしく。」

「あたしはルーティ・カトレット。レンズハンターをやってるわ。
黄金の騎士と呼ばれてここで待つてたら奴らに絡まれたわけ。」

「黄金の騎士とはギルガメスさんのことですか？」

とワルキューレはその黄金の騎士について知っているようだ。

「はい。何か俺達に頼みたいことがあるらしくて・・・」

「黄金の騎士、ギルガメスだと！？お前ら悪魔ドルアーガを倒した
つていうあの英雄と知り合いなのかよ！？」

とマリオは驚きを隠せないようだ。どうやら黄金の騎士ことギルガ
メスは幻想界では有名のようだ。

「まあ、私達は彼がどうしても言うから色々と力を貸してあげ
てるんだけどね」

そういえば、とスタンはドルアーガのモンスターが来る前に妙な連
中が来たことを思い出していた。

「ドルアーガの手先が来る前に、変な奴らが来たんですよ。ここら
辺では見かけない武装をしていて、俺達のソーディアンを狙ってき
たんです。」

「武装集団…！間違いねえ！図書館、統制機構の連中だ！」
とラグナが表情を険しくする。

「ちよつと、その統制機構ってのはいったいなんなのよ！？」

「その事は私からお話します。」

ワルキューレはスタンとルーティに自分がここにいる理由も含めて、これまでのいきさつを話した。

「…俺達の知らない間に、そんな事が起きていたなんて…」とスタンは愕然としていた。

「女ばかりを攫ってそのDNAだけそれで人形を作ってよからぬことを企むなんて、何処の変態組織よ！」

『変態ってわけじゃないですけど・・・』

「いや、大体あつてるだろ」

とドラえもんはルーティの発言につっこみを入れる。マリオはとにかく、とスタンたちに言い、そのまま続ける。

「そのソーディアンってのを狙われている以上、お前たちの安全は保障できないってことだ。」

「…また、共に戦ってもらえますか？」

ワルキューレの問いにスタンはうなずく。

「もちろんですよ！俺達の世界をメチャクチャにしようなんて、絶対に許さない！」

「もちろんギャラはたんまりでるんでしょうね？」

ルーティもいろんな意味でやる気満々だ。

「もちろんそれなりのお礼はさせていただくつもりです。」

とワルキューレの答えにルーティは俄然やる気を出していた。

「よし、いっちょやってやるわ！」

その時、

『ギチギチ・・・』

『グルグルルル・・・』

ドルアーガの手先のモンスター達が再び5人の周りを取り囲んだ。

「ちっ、うぜーな・・・何回束になってかかってこようが、同じなんだよ！おいお前ら少し下がってな、行くぜドラえもん！」

『うん！のび太君！』

と右手を目の前にかざし瘴気を纏わせようとしたが・・・。

「そつだ！何度復活したって結果は同じだ！」

「ん？」

ズババア！！！！

『『ピギユアアアアアアアアアアア！！！！』』

その声と共にラグナが見やると、脇道から金色の鎧に身を包んだ男がスライムを斬り散らして現れた。

「な・・・何だ？！」

「ファイヤーエレメント！」

グオオオオッ！

『『グギヤアアアアアアアアアアアッ！』』

今度は反対側から女性が炎の壁を作り出し、多くのモンスターを焼き払った。マリオは金色の鎧を纏った男を呆然と眺めていた。

「黄金の…騎士…」

ルーティとスタンはギルガメス！と（その男の名であろう）叫ぶ。

「ちよつと！遅いじゃないの！」

とルーティはおかんむりのようだ。

「すまなかった…こちらでもこの者達に襲われてね。でも何とか間に合ったよ…」

スタンも女性に駆け寄る。

「お久しぶりです！カイさん！」

「お久しぶりです。スタンさん。ルーティさん。こちらから呼んでおいて遅れてしまい、申し訳ございません…」

と謝罪する女性、カイ。ふとギルガメスはワルキューレに気づく。

「…！ワルキューレじゃないか！何故こんなところに！？」

「色々と事情がありまして今は彼らと共に旅をしているのです。」

「彼ら？」

とワルキューレの近くにいたラグナとマリオに気づく。

「君は確か、キノコ王国の英雄兄弟のマー・・・「イツツミィ、マママァーリオー！」噛んでるぞ・・・」

「おい、ヒゲ！緊張しすぎだぞ！」

『マリオさん落ち着いて』

とつつこむラグナとギルガメスとドラえもん。ふとカイはラグナを見て言う。

「そついえば、あなただけ違う何かを感じるのですが・・・」

「俺はラグナ、この喋る右腕は義手でドラえもんって言っただ。俺たちは物質界から来たんだよ」

「物質界！？もつとも他界との壁が厚いとされているのに何故また・・・」

とカイはラグナが物質界から来たと聞き、驚きを隠せないでいた。

「...やはり異世界との混合は再び起こっていたのか。ドルアーガが復活したのも異世界とのつながりがあるに違いない。・・・ん？」とギルガメスが腕を組んで考えていると、遠くの方からモンスター達がウジャウジャやって来るのが見えた。

「どうやら、立ち話をしている場合じゃなさそうだな・・・」

とマリオが言う。ラグナもそうだなと言う。

「数が多いな、俺は大丈夫だが・・・お前らの体力が持つかどうか・・・」

そんなラグナたちにギルガメスがこんな提案をする。

「まずは、この場から離れた方がいいな。二手に別れば追っ手も半分になり、逃げるのが楽になるはずだ。」

「では、どう分けるかを決めないと・・・」

そついうワルキューレをルーティは一蹴する。

「そんな事決めてる時間はなさそうよ。とりあえず適当に逃げて、後は成り行きに任せましょ。スタン！行くわよ！」

そつ言うのと、ルーティはとつと走っていった。

「え！？そんな急に言われても！待ってよ、ルーティー！」

スタンはあわててルーティの後ついて行った。

「おい、こら！まだまとまってねえのに動くんじゃねえ！」

マリオは連れ戻すべく、2人を追いかけていった。

「おい、ヒゲ！道解んのかよ！？」

ラグナもマリオを追いかけて行ってしまった。

「おい君達！…行ってしまったか…」

とため息をつくギルガメス。

「仕方ありません。私達は別の道を使って、合流しましょう。」

「そうね。行きましよう、ギル。」

こうして、ラグナ、マリオ、スタン、ルーティの4人（ドラえもんを含めると5人）とウルキューレ、ギルガメス、カイの3人の2チームに分かれて塔から離れることになった。ラグナ達はいったん4人で集まって話し合っていた。

「で、成り行きで集まったのがこのメンツってわけだ」と腕を組みながらマリオ。

「とりあえず、出来るだけ塔から離れてウルキューレ達と合流しようぜ」

そう言うラグナは持っていた大剣を杖代わりにしよっころしよ、と立ち上がる。

「それじゃ改めてよろしくな。」

「おう、スタンだったっけ？よろしくな」

とラグナとマリオはスタンと握手をする。

「もしモンスターが出てきたときはあんた達3人でやりなさいよ」

「ハア？」

とマリオはルーティの発言に「このアマナニテンダ！！？（↑何故オンドウル語！？）」という顔になっていた。

「おい、ルーティ。」

とスタンは言うが、ドラえもんにさえぎられる。

『まあいいじゃないですか。女性なんだし。』

「そうそう。この喋る右腕君の言うとおりよ。大丈夫だって。危なくなったら回復ぐらいはしてあげるから。」

とウインクするルーティ。ラグナはそれを見てやれやれ・・・とため息をつきながら言う。

「ちっ、仕方ねえな。そんじゃ、アシストは頼んだぜ。」

話がまとまった所で、4人（実質的には5人）は塔から離れ始めた。

時々ドルアーガの手先のモンスターが襲いかかってきたが3人で切り抜けながら、先を急いだ。その途中、マリオがスタンに気になっていたことを質問した。

「なあスタン。さっきソーディアンがどうの言ってたよな。」

「ああ、ソーディアンを狙った武装集団が来たって話?」

「ソーディアンってのは、俺の記憶が正しければ、太古の昔に起きた天地戦争で使われた、究極兵器のことじゃなかったか?」

マリオの問いにstanは得意げになってうなずく。

「ああ!その通りさ!ええっと...地上が天上でどうのこうなので...、何だっけディムロス?」

といきなり剣に向かって話し出したのでラグナは「何だこいつは」という顔で言う。

「ディムロスって...誰に話してんだ?」

「もしかして今、ソーディアンと喋ってたのか!?」

マリオの問いにルーティはその通りと言う。

「ソーディアンの声はその持ち主、つまりマスターにしか聞こえないのよ。ちなみにあたしのソーディアンはアトワイトっていうの。」

と自分のソーディアンを見せるルーティ。その態度がマリオの神経を逆なでさせる。

「なんでお前みたいなのがマスターなんだよ。俺みたいな由緒正しき英雄が持つのに相応しいのによ。」

さあね、とルーティは肩をすくめる。

「まっ、選ばれし者の差ってやつ?おっさんにはハンマーとかが一番似合ってるわよ。」

「だ、誰がおっさんじゃゴルァ!」

「そうだ!ルーティとか言ってたっけ?お前、こいつを馬鹿にしすぎだぞ!」

とラグナもルーティにどなり、続ける。

「大体こいつがヒゲでおっさんだってことは見りゃわかるだろうが!」

マリオはギルガメスに問いかける。

「そのつもりだったが…どうやらその必要がなくなってしまったよ
うだね。」

そうね…とギルガメスに続くようにカイも言う。

「ここ最近、ソーディアンを探している連中が現れ始めて…私達の
ところにも来たのよ。あなた達の居場所を教えろって。」

「それで、知らないと言ったら急に襲いかかってきてね。だから君
達に忠告しようと思って呼び出したんだが…奴らに先を越されたよ
うだ。」

「そうなんですか…。」

とスタンは言った。カイはワルキューレに向かってそれでは…
と言い続ける。

「私達はもう少しこの大陸を探索してみます。他の場所でドルアー
ガの手先のモンスターが転移されているかを調べるために。」

「私達はさっきお話しした通り、天空寺院に向かいます。」

ああ、とワルキューレに続くようにマリオもうなずく。

「図書館の幻想界支部の内部なかに行くにはそこしかない。それに大巫
女様やしろつてのも、図書館に狙われる可能性があるからな」

スタンはとりあえずさ…とルーティに聞く。

「俺達はどうしよう、ルーティ？」

決まってるでしょ？とルーティは肩をすくめ言う。

「もちろん、ワルキューレ達と一緒に行くわ。」

『じゃあ新しい仲間ってことでよろしくお願いします』

とドラえもんは嬉しそうに言う。

「ああ！よろしくな！ラグナ、ドラえもん！」

こうしてスタンとルーティが仲間になった。

「それじゃあ、僕達はこれで。」

「きつとまたどこかで会う日が来ますから、皆さんどうかご無事で。」

とギルガメスとカイはワルキューレとラグナ、マリオと握手する。

マリオの場合は緊張しすぎて（とくにギルガメスと握手する場合は）ガチガチになっていた。

「そちらもお気をつけて。カイ、ギルガメス。」

こうしてギルガメス、カイの2人と別れたラグナ達は、新たにスタンとルーティを迎え入れて天空寺院へと赴くため、ノイシュタットに向かうことになった。

T O B E C O U N T E N E W D

EP1-6「戦士達（たたかうものたち）のつどい」（後書き）

ここで用語説明をしたいと思います。

蒼の魔導書^{ブレイナル}・・・ラグナ・ザ・ブラッドエッジが所持している魔導

書。現在はラグナの右腕に擬態しており、自我を持ち言葉を喋る。

またラグナはドラえもんと呼んでいる。

聖女・・・古の英雄、『ヤマトタケル』の4人の娘の末裔のこと、
魔大戦が終わり、蒼の宝剣『クサナギ』の力を悪用されないように
と、4つの欠片『ムラクモユニット』にわけ蒼の境界の何処かに隠
し4人の娘にこれを守るように託した。統制機構の目的は、その聖
女のDNAを採取し、次元接触要素体を作り上げ、4つのムラクモ
ユニットを手に入れ、『クサナギ』の復活。それを使い世界を再び
融合させ、支配することである。現在、判明中の聖女は女神イシタ
ーとキノコ王国の姫ピーチである。

図書館・・・統制機構支部の別名。由来は大量の魔導書（蒼ではな
い）を所持しているため。

EP1・7「熱き眼差しの向こうに」追憶」(前書き)

再びラグナの回想シーンがあります。少し残酷描写あり。グダグダ
あります。
それではどうぞ。

EP1-7「熱き眼差しの向こうに――追憶――」

ドルアーガの手先のモンスターの攻撃を避けるためにドルアーガの塔廃墟跡を後にしたラグナ達はギルガメス、カイの2人と別れ、ノイシュタットへと向かっていった

「そっぴやノイシュタットはどうやって行くんだ？」

「ここからだとなへまっすぐ進んで、山を越えればすぐに着くよ」
ラグナの問いにスタンは答える。確かに辺りを見回すとすぐ近くに大きな山々が北方に連なっていた。

「それでは参りましょう。ノイシュタットから船に乗れば、天空寺院はもう目と鼻の先です。」

「よし！Bダッシュで駆け抜けようぜ！」

それを見てワルキューレとマリオは意気揚々と言う。

「戦闘はあんたらに任せたからね。」

というルーティの発言に一時は口論となったがその時はドラえもんやスタンがその場を収めた。

5人が平原を抜け、山道にさしかかるまでにそんなに時間はかからなかった。その山道を少し進むと辺りが深い霧に覆われた。

「何だ？すげー霧だな・・・」

『そうだね、これじゃ前が見えないよ』

とラグナとドラえもんがつぶやく。スタンはこの霧について解説をする。

「この辺りの山道は白雲の尾根と呼ばれるほどいつも霧がかかっているんだ。でもほとんど一本道だから迷うことはないよ。」

深い霧の中をゆっくりと慎重に進むラグナ達に、今までに出てきたモンスターに加え、ドルアーガの手先のモンスターもちらほら現れるようになっていた。さらには、山にしか生息しない少し変わったモンスターもいて、ラグナ達は慣れない霧の中の戦闘に苦戦しながらもなんとか先に進んでいった。そのままどんどん進んで行くと、

やがて霧が徐々に赤く染まっていっただ。

「ん…、日が沈んできたみたいだな…」

とスタンが赤くなつた霧を見ていう。

「霧の夜は危険ですね。今日はここで野宿にしましょう」

ワルキューレが提案するが、

「えゝ！嫌よそんなの！」

ルーティはいやそうな顔で反論する。そうだとマリオもうなずく。
「こんなモンスターだらけの山道での野宿は、自殺行為みたいなものだぞ」

違つたわよ！とルーティはマリオとラグナを指差している。

「あんたらみたいなおっさんや白髪頭が何するか解らないから恐いのよ！」

「「な、何いー！？」」

「い、一体何をなさるおつもりですか？」

とラグナとマリオを交互に見て後ずさりするワルキューレ。こういうときになると、最も常識のあるワルキューレがなぜか、天然キアラになってしまうのだ。

「いや、ヒゲはともかく俺は何もしねえぞ」

とラグナは否定する。

「俺だつて何もしねえよ！」

とラグナの言葉にマリオも反論した。そうだよ！とスタンもうなずく。

「マリオさんは英雄だよ。そんな事するわけ無いじゃないか。とにかくこのまま進むのは危険だ。ノイシュタットまでまだ先は長いんだから、やっぱりここで休もう」

そうですね、とドラえもんもスタンの意見に賛同する。

『それじゃあ、燃えるものを集めましょう。猛獣は火を警戒するつて言いますし』

5人は木の枝や落ち葉を近くからかき集めた。そのかき集めにマリオがファイアを放ち、火を点けた。

「火を自由に扱える俺がいるから暖をとれるんだぞ。ありがたく思え！」

とマリオが自慢げに話す。だが、
「別にデймロスがあるからあんたの力なんか頼らなくてもよかったわよ」

とルーティに切り返される。

『我は火起こし機ではないのだから。』

とスタンのソーディアン、デймロスが反論し、ルーティにうるさいわね！と小突かれる。

それを見ていたドラえもんは、うらやましそうにいう。

『いいですよネ・・・ソーディアンって、僕ものび太君の剣と話せたらな』

でもね、ドラえもん。とルーティはドラえもんに向かって言う。

「それはそれで結構うるさいかもね。アトワイトは静かだけど、デймロスはやたらと突っ込んでくるんだから」

『我は間違いを正しているだけだ。ルーティ』

「それがうるさいって言うてんの」

とデймロスとルーティは口げんかになってしまふ。

「まあまあデймロス。落ち着いて、ね？」

とそれをいさめるスタン。それを見たラグナはドラえもんにごうい
う。

「俺もごめんだな・・・しゃべる剣って・・・大体口うるさいのは
ドラえもんだけで十分だしな」

ドラえもんはその言葉にカチンときたのか反論する。

『あのね、のび太君。僕がいちいち言うのは君に注意しているだけ
なんだよ。それを口うるさいってなんだ！？』

「そっこのが口うるさいって言うんだよ！」

『何だよ！』

「何だよ！」

とドラえもんとラグナも口げんかになってしまふ。

「ドラえもんさん、ラグナさんも落ち着いて」

とワルキューレがラグナとドラえもんをなだめるといふ事態に発展した。が

「おめえら！うつせえぞ！飯が焦げたらどうすんだ！」

とマリオの雷がおち口げんかは終わった。その夜、ローズタウンから貰ってきた保存食やキノコをみんなで分けて、一時の楽しい夕食を過ごした。

寝る時・・・見張りはスタン、マリオにまかせ、ラグナとワルキューレ、ルーティは今までの疲れがたまっていたのかすぐ寝てしまった。

「まったく・・・暢気なやつらだぜ。」

と3人の寝顔を見てマリオは言う。そうですね、でも・・・とスタンは言う。

「仕方ありませんよ。ドルアーガの連中と戦って、白雲の尾根も歩いたんですからね。みんな疲れていて当然ですよ。マリオさんも横になつたらどうですか？」

「そんな堅苦しい言葉使うなよ。マリオでいいぜ、スタン。」

「ああ・・・そうですね。あ、いや！そうか！」

というスタンのしぐさにマリオは苦笑を漏らす。

「そつえば、何でマリオはワルキューレさん達と一緒に旅をしているんだい？」

「・・・キノコ王国の姫が俺達の追っている奴ら、統制機構に捕らわれてな・・・そして助けようとした俺の双子の弟、ルイージが氷を使う剣士にやられて凍らされちゃった。それで俺は姫を助けるため・・・そして、ルイージを救うために旅に出ることを決意したんだ。」

とピーチ姫をさらいルイージを凍らせた剣士、セウシ・ノビ・キサラギの顔を思い出し拳を握り締めながらマリオは続ける。

「奴らの目的についてはまだわからない事だらけだが・・・。とにかく奴らの次の狙いは、大巫女様に間違いないはずだ。事がこれ以上

大きくなる前に潰さないと……取り返しのつかない事になりそうですよ……」

と齒噛みし……開き直ったかのように呟く。

「あーしかし、ノイシュタットに着いたら酒とキノコで一杯やりてえな。なあスタン？」

とスタンに聞くが……

「……ZZZ」

スタンは寝ていた。

「……。眠っちゃったか……仕方ねえか。」

それから、マリオは1人で火を眺めながら見張りを続けた。

ラグナは夢を見ていた。あの惨劇の日、セワシに腕を斬られた直後の夢だった。

「うわあああああああああああつ！ぼ、僕の腕があああああああああああああ！」

と斬られた右腕を押さえ、のた打ち回る、のび太。

「のび太君！！！」

とドラえもんが駆け寄ろうとするが、

「人の心配している場合だよ」

とドラえもんの頭上にロボットのような何かが飛来し、ドラえもんの顎を蹴り上げた。

「グアアッ！」

と吹っ飛ばされ転がるドラえもん。

「ど……ドラえもん……」

と這いながらドラえもんの元へと向かうが、何者かがのび太の前に立ちはだかる。それはドラえもんに似ていたが、ボディカラーは碧そして頭がとがっており、何よりも鋭い、吐き気を催すほどの狂気と邪悪をその目ににじませていた。

「おやおやおやおや……、右腕斬られて、出血多量で死にそうなのに他人の心配か？まあいいや……俺の名はユウキ・テルミだ。」

どうせお前からここで死ぬんだから覚えなくていいぜ……」
と笑いながら言う。

「お前……パパやママを……どうしたんだ……」
と息も絶え絶えにそのロボット、テルミに問う。

「ああ、あのジジババの事？あいつらなら殺したぜ」

テルミはさも当たり前のように残酷な笑みを浮かべ言う。のび太は、それを聞き、驚愕の表情から絶望……そして憎しみへと変わっていった。

「ヒヤハハハハ、いいねいいね、死にそうなのにその表情！なら……お前のダチのこのロボットを殺したらどんな表情を見せるかな
つと」

「ッ！やめ……ろ……！」

のび太の静止もむなしくテルミは持っていたバタフライナイフでドラえもんの起動装置めがけて突き刺す。ドラえもんはウツ。と呻いた後、起動を停止した。

「ドラ……えもん、う……ウアアアアアアアアアアアッ
！」

と最後の力をふりしぼりのび太は怒りと憎しみをにじませながら、立ち上がりテルミに向かっていき、拳を振り上げた。だが、拳はテルミに当たることなくかわされ、塀に激突する。

「ぐ……うつ」

と力なく背中を塀にもたれるようにして座り込み、気を失った。

「ふー、怖い怖い……、さてと……このお嬢ちゃんはもらって
いくぜ」

と意識を失う前、のび太が見たものはテルミとセワシが気絶しているしずかを抱え上げ何処かへと消えていく姿だった。

それから程なくして……のび太は見知らぬ場所のベッドで目を開けた。

「ここは……」

と辺りを見回す。そしてあの時の惨劇を思い出した。

れた
・
・
・
○

呻
<

呻きは嗚咽に変わり、

嗚咽は慟哭に変わった。そのままやりきれない思いをベットのシーツにたたきつける。

と涙を流すのび太……。そしてふと気づく。自分の右腕が（色は蒼く変色しており、手の甲に機械らしきものを取り付けられてはあ
るが）あることに。そして、

と右腕から守れなかった親友の声が聞こえていた。

とのび太はまじまじとそれを見つめる。一方のドラえもんは自分の体がのび太の一部であることに驚き戸惑っていた。

とのび太が顔を上げると、扉から金髪のツインテールの髪型に、黒のゴスロリファッションの少女が2匹の動物らしきものを連れて出てきた。

ラグナはこの夢のせいでまた目が覚めてしまった。起き上がってみ

ると、マリオが火を眺めていた。

「おう、悪い。起こしちゃったか？」

と心配そうにラグナにとりマリオ。

「いや、何でもねーよ……。お前、ずっと起きてたのか？」

「そりゃ見張り役だからな。」

とラグナの問いにマリオは答える。

「もう3時間ちよつとで夜明けが来そうだから、交代な」

「何言つてやがる。いいから寝とけよ。」

「もう寝たくねえ」

とラグナは表情を曇らせながら言う。そのラグナの表情を見てか、マリオはしばらく考え、

「……。まあ、ありがたく交代してもらうが居眠りなんてするんじゃないぞ。」

そう言うときマリオは焚き火から少し離れた所に横になった。

「サンキュ、おいドラえもん。起きろ、見張りすつぞ」

こうして、ラグナとマリオは見張り役を交代し、ラグナは火をじつと眺めながら考え事に耽っていた。

やがて夜が明け始め、ラグナはみんなを起こした。だがただ一人起きない人がいた。

「ちよつとスタン！いつまで寝てんのよ！」

「ZZZ……」

そう、スタンである。ワルキューレはスタンを気遣いながら言う。

「霧の薄い今が谷を抜けるときですけど、起こしてしまうのも何だか可哀想な気がします……。夜遅くまで見張りをおやりになられていらつしゃいましたし……」

「いや、こいつはすぐに寝たぞ。」

「……。」

マリオのその発言に、ワルキューレはスタンを見ながら呆れ顔になっていた。

「こいつはね！起こさないと夕方まで寝てるやつなのよ！」

といたらただしげにルーティは怒鳴る。

『のび太より寝坊がひどいや…（ぼそり）』

とドラえもんは小声でぼそりと呟いた。

「まったく仕方ないわね！」

ルーティはスタンの鳩尾におもいつきり拳を叩き込んだ。

「ぬがぁ！？…あれ…一体何が起きたんだ？」

「ほら！さつさと出発よ！起きた起きた！」

「へ？あ、うん。わかったよ。」

ようやく起きたスタンを連れて一行は霧の薄い谷を進んでいった。

しばらく進むと霧の中に、青白い炎のそばに立つ、どこかで見たことのある男が立っていた。

「Welcome！いいものがそろってるぜ」

その男を見たラグナは嘆息する。

「またてめえかよ・・・」

「あなたとはよくお会いになりますね。」

「俺達の後でもつけてきたんじゃねえのか？」

と口々に武器商人に半眼で言うワルキューレとマリオ。

「誰なんですか、この人？」

とスタンはこの男を知らないのか聞く。

「不気味なやつ。あまり近寄らないでよね。」

「まあ、そう言うなって…うん？そこのお2人さん。」

「へ？」

「何よ！」

武器商人はスタンとルーティのソーディアンを見て言う。

「あんたらのその剣、もしかしてソーディアンじゃねえか？」

「な、何でそれを！？」

と驚くスタンに武器商人は胸を張りながら言う。

「俺はこの世界の武器を知り尽くしている。そのついでに太古の武器にも、ちよいと興味があつてな…。…それで言っちゃあなんだが取引しねえか？欲しいものがあつたら、なんでも言いな。そのか

わり、そのソーディアンをくれねえか？」

「なんでもいいのか！？…うーん、美味しいものある？」
バシン！

と再びどっから取り出したのかハリセンでスタンの頭をたたくルーティ。

「交渉してどうすんのよ！あのねえ、ソーディアンはただの剣じゃないのよ！そこの売り物と一緒にしないでよね！」

『我を骨董品扱いしたお前が言えたことか。』
とデймロスは反論する。

「う、うっさいわよ！デймロス！」

そんなやり取りを見て武器商人はため息をつく。

「そうか…なら仕方ねえな。取引の話は無しだ。普通に商売するか見ていってくれ。」

今回の買い物もラグナの銃の弾を買っただけだったが、スタンは初めて見るものが珍しいのか、欲しそうな目で眺めていた。しかしそれは、ルーティに阻止され諦めることになった。

「ヒヒヒツ…Thank you…」

こうして武器商人と別れたラグナ達は、さらに谷を進んでいった。すると、やがて霧が晴れていき周囲が見渡せるようになった。そのときにはもう谷を抜けていて、近くには大きな港町があった。

「やっとここまで来たな」

とのびをしながら言うラグナ。ワルキューレもうなずきながら言う。

「はい。あそこから船に乗ればすぐに天空寺院に着けますよ。」

「よっしゃー！だったら早く行こうぜ！」

と張り切るマリオ。

ようやくノイシュタットにたどり着いた一行。果たしてノイシュタットの船で、天空寺院へ行くことができるのか？それとも…統制機構の刺客が待ち構えているのか？待て次回！

TO BE COUNTE NUDE…

EP1・7「熱き眼差しの向こうに」追憶」(後書き)

次回、ノイシユタツで一騒動に巻き込まれます。
乞うご期待。

あと、アルバイトとかで忙しくなるのであまり更新できないと思います。
楽しみにしている方マジですいません。

EP1・8「HEAVEN OR HELL 前編」(前書き)

今回はものっそい長引きそうなので前、後編に分けて書いてみました。

それではBLAZBLUEのび太戦記異聞録へ、始まります。

EP1-8「HEVEN OR HELL 前編」

霧の山を抜け、ノイシュタットへとたどり着いたラグナ一行。町に入ってみると、どうやら祭りらしくにぎやかだった。

『へー、ここがノイシュタットかー。凄くにぎやかだね』

とドラえもんは感想を漏らす。スタンにはぎやかな訳を説明する。

「ああ、多分年に一度の武道大会でにぎわっているんだ」

「ふーん・・・、ま、俺達には、関係ねえけどな・・・」

そうですね・・・とワルキューレもラグナの意見に賛同する。

「一刻も早く天空寺院にかなければいけませんからね」

「でもよく折角来たんだしどっかで一杯やろうぜ」

とマリオは渋り顔で言うが

「ダメだ（です）」

ラグナとワルキューレに反論される。

「シヨボーン（´・ω・｀）」

「こんな親父はほつといてさっさと船乗り場に行きましょう」

そんなこんなでラグナ一行は船乗り場へ直行した。

それから十分後ラグナ一行は船乗り場についた。船乗り場では船の前で人がごった返していた。どうやら船が故障して出航できないらしい。待っていても埒が明かないのでラグナ一行は船の修理をしている乗組員に聞いてみた。

「すいませーん、俺達東の大陸に行きたいんですけど、何時ごろ修理終わって出航ですかねえ」

「大変申し訳ありません・・・、現在損傷が激しくて今日中に出航できないんですよ」

「はあ!？」

「・・・ええっ!？」

と乗組員の言葉にラグナ達は驚きを隠せなかった。

「じゃ、じゃあ修理はいつ終わるんですか？」

とスタンは修理はいつ終わるのか聞いてみる。

「早くて一週間か・・・長くて三週間ぐらいですかね・・・」

「一刻も早く天空寺院に着かなければならないのに・・・」

とあまりも長すぎる修理期間にワルキューレは落胆の色を隠せない。

「おいおい・・・兄ちゃんふざけんなよ。俺達は急いでんの。一週間も待つてらんねえの！一刻も早く東の大陸に行かなきゃなんねーの！！OK？」

と怒りのオーラを出し笑いながら詰め寄るラグナ。そこをマリオがまあまあ・・・落ち着けよと押しとどめる。

「なあ乗組員の兄ちゃんよ、他に船は無いのか？」

と乗組員に聞く。

「それなら輸入船が一ヶ月に一回来ますけど・・・」

輸入船の存在を聞き、マリオは顔を輝かせる。

「おおっ！いつ来るんだ！？」

「残念ながら昨日来て、昨日出航しました」

乗組員の残酷（？）な宣言にマリオは凍りついた。

「ふざけんなよおおおおおおおおおっ！いいから乗せろ！今すぐ乗せろ！さつさと乗せろ！」

とラグナは癪癪を起こし乗組員の胸倉をつかみ上げブンブンとゆする。

「そ、そんな！無茶ですよ！結構損傷激しいんですよ！？」

「そんなの関係あるかあ！気合で何とかしろ！気合さえあれば損傷なんざ、何ぼのもんじゃない！！！」

と乗組員の反論を無茶苦茶な理論で一蹴するラグナ。と

「いい加減にしろ！」

ゴン！

ルーティが拳骨を食らわしラグナを昏倒させごめんなさいね、と謝罪する。どうあがいても船には乗れなさそうなのであきらめることにした。とそこへ・・・

「さっきの話聞いてたアルよ。その様子じゃ何か訳ありアルね」
と中華風の服装をした少女がラグナ達に近づき言う。

「ま・・・まあそうなんだけど・・・」

と少し戸惑いを見せながらスタンが言う。

「それならいい話があるんだけどちょっとここじゃ離せないアルね。
町の北にある屋敷にくるよろし、そこで話すアルよ」

そう言う少女は去っていった。どうやらその屋敷とやらへいくのだらう。ラグナたちは打開策が無いためとりあえず少女についていくことにした。

北の屋敷

「来たアルね」

と屋敷に入るとさっきの少女が出迎えてくれた。そしてラグナ達を座らせる。

「とりあえずお父さんの話を聞くよろし」

そう言う少女はその父親を呼ぶためドアを開けた。しばらくして出てきたのはいかにも商人っぽい中華風の服を着た男だった。男はニコニコ顔で机に座る。

「やあやあやあ、よく来たアル。話は娘から聞いたアルよ」

「で？いい話って何よ？」

とルーティが口を開く。

「私達親子はある事情で遠い国からこのノイシュタットに来たアル。
だから自家用の船を持ってるアルよ」

ラグナは男の『船』という単語にピクリと眉を動かす。

「つーことは船に乗せてくれるのか？」

「そうアルよ」

と男は笑顔でうなづく。

「ヤッフウウウウウ！」

「助かりました！」

「これで天空寺院まであと少しだな」

と喜び一色のマリオ、ワルキューレ、スタン。だがラグナは表情を変えずに聞く。

「だが、その代わり俺達に何かやれ・・・と言っんじゃねえよな？」

「さすが、白髪の人察しが良いアルね。そうアル、一つ条件があるアルよ」

と男のセリフにルーティはやつぱりね、と言う。

「私も白髪の言うとおり話がうますぎると思ったのよ。見ず知らずのあたし達にそこまでするのかつてね・・・」

「その娘さんも鋭いアルね。私らはある秘薬を求めてはるばる遠い国からこの大陸に来たアルよ。そしてとうとうその薬が見つかったアルが・・・どうやら明日行われる武道大会の優勝商品だったアルよ」

んで・・・とラグナが男の後を続ける。

「お前らじゃ到底優勝できねーから俺らにやれってか？」

「そうアル」

と男はうなずく。

「なんだか面倒な取引だなー」

と渋り顔のマリオ。ですが、とワルキューレはマリオに反論する。

「それしか道は無いようですね」

「良いぜ、その取引乗った」

とラグナ達はそれを承諾する。

「やった！お父さん良かったアルね！」

と少女も嬉しそうだ。

「ああ、私らも応援に行きますから皆さんがんばってくださいね」
そう言うわけで闘技場へ受付しに行くことになった。

ノイシュタット闘技場ロビー

「ようこそノイシュタット闘技場へ。只今、明日行われる武道大会の参加受付を行っております。皆さんも参加希望ですか？」

「まあ、そういうことになるな。ルールは？」

とラグナはルールを係員に聞く。ルールは下記の通りである。

- ・チーム制で試合を行う
 - ・1チームに最大四人まで
 - ・試合は1ラウンドで相手のチームを全てノックアウトすれば勝利。
 - ・治療薬などは5回まで使用可能
- と言うことである。

「一応、武道大会は一種のエンターテイメントなので観客を盛り上げるような戦いをしてくださいね」
と係員に釘を刺された。

2人が3人に分かれて出場すると優勝できる確率が高いのだが、相手が大人数で来る可能性もありそれに決勝等で当たってしまうと元も子もないので4人出場して1人抜かすことになった。そう言うわけで、出場するのはラグナ、ワルキューレ、マリオ、スタンとなり、ルーティは応援することになった。

「それじゃあ、大会は明日の九時に開催されますので遅れないようにご注意ください」

そう言うことでラグナたちは明日の大会に向けスタン、ルーティはアイテムの買出し、マリオ、ワルキューレ、ラグナは武器等の点検に勤しんだ。

その夜・・・ノイシュタットの宿屋

ラグナは夢を見ていた。ローズタウンや霧の山で見た過去の記憶の夢とは違う、暗い闇が広がる夢・・・その闇にポツンと蒼白い光がこぼれていた。

「なんだ・・・？」

と訝しげに眉をひそめるラグナ・・・と

ーの・・・太・・・

と頭の中に声が響く。

ー・・・び太・・・

とぎれとぎれに・・・自分の名前を呼ぶ声が・・・それと同時に蒼

白い光は大きくなる。

―のび……

その声はやがてはつきりと聞こえてくる。

―のび太……

そしてその蒼白い光の正体が明らかとなる。

―のび太……どこ？

それは全裸で胎児のように丸まる少女だった。透き通った白い肌。そして白い髪 of 少女だった。

「ッ！」

ラグナは驚愕する。何故ならその少女は……かつて愛した少女に瓜二つだったから……。そこで夢は終わった。

ラグナはベッドから起き上がり……。しばらくあの夢について考えていたが、埒が明かないので再び寝た。

一方、真夜中の闘技場。

ここでは明日の武道大会に備えて土が綺麗に整えられていた。そこに一人の丸いピエロのような男が居た。ジョーカーである。

「んゝ遅いですねゝ」

どうやら誰かを待っているようである。とそこへ……

「待たせたな……」

と黒いシルエットが浮かび上がった。シルクハットを被っており、着込んでいるコートとマフラーでずんぐりとした印象を受ける。紫色の猫のような顔の男だった。

「ようやく来ましたか……。あなたにしてはずいぶんルーズですねゝ」

「そう言うなよ……。ちょっと寄り道していたら遅くなっちまったんだ。それで、こんな所に俺を呼んで一体なんのようだ？ 作戦じゃあ船に忍び込んでラグナ・ザ・ブラッドエッジ一味を待ち伏せして始末するんだったろ？」

と亜人の男は言う。

「ええ、その予定だったのですが、トラブルで変更になりました。彼らはここの武道大会に出るみたいです」

「ほう・・・それで・・・」

とジョーカーの作戦変更の報告に多少戸惑いの色を滲ませながらも亜人は言う。

「彼らは試合で体力を消耗するでしょう」

ククク・・・と笑いながらジョーカーは続ける。

「そして彼らが負け、戦意を喪失した所を狙うのですヨ。抵抗することも出来なくなった相手をいたぶる・・・嫌いではないでしょ？」
ジョーカーの言葉にキキキ・・・と亜人は気味の悪い笑い声を発する。

「ああ、嫌いじゃないぜエ」

それを聞き、ジョーカーもノホホホ、と笑う。

「ですが、作戦はソーディアンの奪還に変わりはありませんのでうつかりソーディアンまで壊してしまわないように気をつけてくださいね」

一通り笑った所でジョーカーは亜人に釘を刺す。

「ああ、わかったぜエ・・・」

と亜人はうなずく。ジョーカーは何かを思い出したように両手をパン、と叩く。

「もう一つ忘れていました。セワシ・ノビ・キサラギ少佐からの伝言です。『ラグナ・ザ・ブラッドエッジは殺さず拘束し僕の前に出すように』だそうです」

「そりやまたなんで？」

と亜人は聞く。

「さあ・・・、噂によるとキサラギ少佐のお爺様がラグナにそっくりとか・・・、まあ噂ですからね」

「殺さないで拘束すればいいんだろ？作戦は分かった。俺は行くぜ」

「一応私たちの部隊も応戦に行かせますので自由に使ってください。それでは私はこれで・・・アディオス！」

そう言うとジョーカーは転移の術式を使い闘技場を後にした。それを確認し亜人もきびすを返し闘技場を後にする。そして・・・闘技場に再び静寂が訪れる・・・。

T O B E C O U N T E N E D . . .

EP1 - 8「HEAVEN OR HELL 前編」(後書き)

謎の亜人の正体は後編で明らかになります。

次回は優勝賞金を狙って大バトル！そして迫り来る統制機構の黒い影・・・、ラグナたちの運命はいかに！BLAZBLUE - のび太戦記異聞録 - EP1 - 9「HEAVEN OR HELL 後編」お楽しみに！
それでは。

EP1-9「HEAVEN OR HELL 後編」(前書き)

船に乗せてもらうためノイシュタットの武道大会へ出場したラグナ一行。しかしその影では統制機構の間の手が忍び寄っていた。

EP1-9「HEVEN OR HELL 後編」

ノイシュタットの宿屋

「ん・・・」

ワルキューレは朝日の日差しで目が覚めた。ベッドから上体を起こし伸びをし、ラグナがいないことに気づく。

（どこに行ったんでしようか・・・）

ふと、宿屋の中庭でブン！ブン！と風を切る音が聞こえ、数を数える声が聞こえる。ワルキューレが窓から中庭を見してみる。そこにはラグナが大剣を持ち素振りをしていた。上半身裸で。

「~~~~~ッ！なんて格好してるんですか！あなたは！？」

ワルキューレが顔を真つ赤にして叫ぶ。神族といえども彼女は女性なのだから無理は無い。ワルキューレの声に気づきラグナが振り向く。

「よう、おはようさん」

「おはようさんじゃないですよ！何裸になってるんですか！？」

「裸って・・・上半身だけだろ」

と顔を真つ赤にするワルキューレに半眼で突っ込むラグナ。

「と・に・か・くっ！上半身だろうと下半身だろうと、裸は裸です

！早く上着を着てください！」

「・・・ったく、わーったよ」

ラグナ着替え中・・・

着替えを完了し、ラグナはワルキューレと共に残りのメンバーを起こしにいく。

「ったく・・・ワルキューレの奴、何で上半身裸だけでギヤーギヤー騒ぐのかね？」

スタンを起こしながらばやくラグナ。そりゃそうだよ、とドラえもんは言う。

『女の子は誰だって男の裸を見るとああいう風になるもんさ』

「そんなもんかね。しかし、起きねえなコイツ。スタン、起きろコラ」

そう言うとき先日ルーティに教えてもらった起こし方で起こした。（思いつきりスタンの腹に踵落とし）

「ごふう！あれ？もう朝？」

と一瞬うめきはしたものの何事も無かったかのように目をこすりながら起きる。

「もう朝じゃねーだろーが、早くしねーと武道大会におくれっぞ」

「あつ、そうだった。忘れてたよ」

と間の抜けた返事をするスタンにラグナは嘆息するしかなかった。

それから数十分後

闘技場のロビーにラグナ達は来ていた。

「エントリーナンバー12番、ラグナ選手のチームですね。もうすぐ武道大会が始まります。準備はいいですか？」

「当たり前だ、お前らも良いよな」

「おう、いつでもいいぜ」

「もちろんです」

「ああ」

ラグナが意気揚々と答え、マリオ、ワルキューレ、スタンもそれに答える。

ラグナチーム待合室まで移動中・・・

待合室、ラグナ達は最後のウォーミングアップをしていた。スタンはディムロスの手入れ、マリオは準備体操とストレッチを行っている。

『エントリーナンバー12番、ラグナチーム入場してください』

とアナウンスが流れる。ラグナは立てかけていた大剣を手に取るとそれを腰に差す。

「それじゃあ、行ってくるぜ」

「絶対勝つのよ、負けたら承知しないからね！」

とルーティはラグナたちに激励の言葉を飛ばした。解ってらあ、とラグナは言々とチームを連れて会場のほうへと行く。それを見届けたルーティは観戦席へと向かおうとするが、
ガッ！

と後ろから何者かに殴られ意識を失った・・・。

闘技場、客席は試合が始まるのを今か今かと待っていた。そこへ司会者らしき青年と、長い髪を後ろにまとめたいかにも武道家のような男が現れる。

司会者らしき青年はマイクを手につと高らかに宣言する。

「レディースアンド、ジェントルメン！いよいよ待ちに待った、第12回ノイシュタット武道大会を開催いたします！」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

司会者の宣言と共に客席は歓声の渦が飛び交う。

「司会は私、賀田利真栗と解説者のエンリユウさんでお送りいたします」
「オッス！オラ、エンリユウ。どんな奴が出るか楽しみだな！」

とどこぞの戦闘大好き地球育ちのサイヤ人ニートのような口調でエンリユウと呼ばれる男は挨拶をする。

「いよいよ第一試合を開始したいと思います！Bコート、第一試合！エントリーナンバー12！ラグナチームの入場です！」

と司会者の宣言と共にラグナ達が現れる。

「すっげー人ばかりだな・・・」

ラグナはあまりの人の多さに唖然としていた。そりやそうだよ・・・、とドラえもんは突っ込む。

『結構、有名な大会らしいからね。人が多いのは当たり前さ』

「続いて、エントリーナンバー5。名無しの盗賊団チームの入場です！」

とラグナが入場してきた所とは反対方向にいかにも盗賊団だとわかる服装の男達が現れた。

男の一人がラグナたちを見て馬鹿にしたように笑う。

「おやびーん、一回戦は楽勝ですよー」

そうそう、ともう一人の男も言う。

「どっからどう見ても弱そうですしね」

おやびんと呼ばれた男もラグナたちを見て高らかに笑う。

「まーっはっはっは、秘薬はあちし達がいただくのよ!」

(うつわ・・・ウゼー奴と当たっちゃった)

と盗賊団チームを見てラグナは心の中でそんなことを思っていた。

「それでは・・・コホン」

と試合開始を宣言するために一度咳払いをし、息を吸う。

「それではいきます。第一試合! HEVEN OR HELL!

DUEL! LET'S LOCK!

と試合開始を宣言する。どこぞのギルティギアの試合開始宣言と似ているが気にしてはいけない。

試合は10秒で終わった。

試合開始直後ラグナはダッシュし、拳でおやびんをぶん殴り、立て続けに取り巻きの連中もぶっ飛ばしたからだ。取り巻きの一人がワルキューレの真下に吹っ飛ばされ

「し・・・白」

とスカートの中身を見てしまいワルキューレにとどめの一撃^{けり}をお見舞いされ決着がついた。

「ノックアウト! 第一試合はラグナチームの勝利です!」

「ま、こんなもんだろ」

とラグナはパンパンと手を叩き行った。

そして数十分後

一通り試合が終わり、再びラグナたちの出番が回ってきた。今度の相手はカサンドラとソフィーティアと名乗る女性2人だった。

「ふ〜ん、別に強くも弱くもなさそうね。アンタ達はこのあたしがボッコボコにしてあげるわ」

と勝利宣言をするカサンドラ。その挑発を聞き、マリオが怒りを滲ませた声で言う。

「おうおう口の悪い子猫ちゃんだ・・・、お仕置きしてやるけえのう！」

「やれるもんならやってみなさいよ！ヒゲおやじ！」

とマリオとカサンドラの目から火花が飛び散っている。

そして試合が始まった。

「ラグナ、この女は俺がぶつ倒す。手出しすんじゃねえぞ！」

「わーったよ、スタンとワルキューレは俺の援護を頼む！」

とラグナはマリオの提案を承諾し、スタンとワルキューレに援護を頼む。

「うおおおおっ！」

咆哮し、ラグナはソフィーティアに向かって大剣を振りかぶり斬りかかる。彼女はラグナの剣を受け止め、受け流すそこへ・・・

「ハアアアッ！」

「オリヤアアアッ！」

とワルキューレとスタンが挟み撃ちにかかる。

それをスタンを蹴り飛ばして回避するがワルキューレの剣はよけられそうに無いので盾を使い防いだ。そして間合いを取る。お互い一気に決着をつけるため技を放とうと構えた。

「ワルキューリアセイバー！」

「エンジェルウィング！」

擦れ違いざまに技がぶつかり合いそのまま止まる。長き沈黙・・・、その沈黙に客席も、ラグナやスタンも固唾を呑んで見守る。やがて・・・

「グ・・・グウッ！」

うめき声をあげ膝をついたのはソフィーティアだった。一方マリオはカサンドラに優位に立っていた。カサンドラは剣で斬ったり突い

たりするがマリオは全てかわす。

「なんでえ、スローすぎて欠伸が出るぜ」

「くっそー何で当たらないのよ！」

とだんだん苛立ちを感じ剣を振り回すが、

「あっ！」

剣を受け止められ取り上げられてしまふ。そして、

ゴン！

とマリオの強烈な拳骨がカサンドラに炸裂した。

「ぐおおおおおおおっ！」

とあまりの痛さにゴロゴロと転がるカサンドラ。頭にはたんこぶが出来ている。

「いったー・・・このヒゲおやじなんてことすんのよ！」

とそこへボロボロのソフィーティアがやって来る。

「姉さん、ちょうど良い所に来たわ。今度は本気で行きましょ」

だが、ソフィーティアの答えは予想外のものだった。

「・・・貴方達の剣には邪心が感じられなかった・・・この戦いは私達の負けです。あなた方も決勝戦がんばってください。それと・・・」

とワルキューレのほうへ目を向ける。

「噂に違わぬお見事な剣の腕でした。今度会ったとき1対1でお手合わせ願います。女神の騎士ワルキューレ」

そう言々とソフィーティアは会場を出て行った。客席にもどよめきが走る。

「えーっと・・・、わっ私は負けてないんだからね！次あった時はボッコボコにしてやるんだから（特にヒゲオヤジは）」

そう言々と一目散に逃げていった。

ラグナチーム決勝戦進出。

待合室にて、

ラグナ達は決勝に備え、飲み物を飲んだりしていた。

「次の対戦相手は・・・カイ・キスクって奴らしいぜ」と対戦表を見に行っていたマリオが戻ってきた。

「”チーム”じゃなくて？」

とスタンが問う。ああ、とマリオがうなずき続けた。

「たった一人で出場しているらしい」

「たった一人ですか・・・」

とワルキューレがコーラを飲みながら言う。たった一人でここまで勝ち上がるとは相当な強さに違いはない、ラグナ達は決意を新たに決勝戦に向かった。そんな4人とは裏腹に・・・

（ルーティさん何処に行っただろう？）

とドラえもんはルーティがいないことが気になっていたが、考えるのを止めた。

そして決勝戦、

客席の熱気は物凄く高まっている。

「さあ！ノイシュタット武道大会。決勝戦となりました！左手には絶妙なチームワークで勝ち上がったラグナチーム！そして右手にはたった一人で数々の強豪を屠ってきたカイ・キスク選手がいいます！」

カイ・キスクと呼ばれた青年は、整った顔立ちの青年であった。それと同時に立ち上ってくる威圧感プレッシャーも凄かった。ここまで勝ち上がってくるのもうなずける。

カイ・キスクはしばらく黙ったあとおもむろに口を開く。

「どうやらこの大会に奴は来ていないようだ・・・この戦いは私にとって無意味だったようです」

「そうかよ・・・無意味ならさっさと帰んな」

とラグナは挑発する。だが、とカイ・キスクは反論した。

「ここで退く事は出来ない。私にもプライドと言うものがある。ここは私も全力で戦わせていただきます」

とカイ・キスクは剣を構える。

「行くぜ、皆！」

とラグナも大剣を取りマリオ、ワルキューレ、スタンに声をかけた。

「それでは、参ります！決勝戦！HEVEN OR HELL！

DUEL！ LET'S LOCK！」

そして決勝戦が始まった。

「うおおおおおっ！」

先陣を切ってラグナがカイ・キスクに斬りかかった。カイ・キスクは振り下ろされたラグナの大剣を防ぐが、

「両脇が・・・」

「がら空きですよ！」

とワルキューレとスタンが両脇から攻めてきた。

「くっ！」

それをバックステップでカイ・キスクはかわす。だが、そこにすかさずマリオが躍り出る。

「これでどうだあ！」

と拳を振り上げカイ・キスクを殴った。

「ウゲッ！」

吹っ飛ばされカイ・キスクは地面を転がった。すかさずマリオとスタンは追い討ちをかまそうとするが、

ガシッ！

と受け止められる。

「な・・・」

「あなた達のチームワーク・・・ここまでとは。すこしあなた達を見くびっていました。だが！ここからは本気で行かせてもらおう！」

そう言うときカイ・キスクの体が青く発光する。

「な・・・なんだあ！？」

と慌てるマリオ。だが気づくのが遅かった。

「ライト・ザ・ライトニング！！！」

その時、試合会場をプラズマが覆った。客席からは何が起こってるんだ！？とざわめきが起こる。

やがてプラズマが収まりカイ・キスクが立っていた。やがてラグナたちがいる部分も砂煙が晴れる。するとそこにはラグナチームは顕在しており、カイ・キスクの近くに居たマリオはとっさにラグナに右腕でつかまれ引き戻されていた。

「ライト・ザ・ライトニングを障壁一つで防ぐとは……やりますね。あなた」

「……そういうあんたもな、おいスタン、ワルキューレ、マリオ下がってろ」

とスタンたちを下がらせる。そしてラグナはカイ・キスクにやり、と凶笑を見せる。

「さっきの技を見せてくれたお礼だ。見せてやるよ……『蒼』の力を……行くぜドラえもん」

『うん!』

そう言っているとラグナは右腕を目の前にかざす。

『第666機関解放、多重虚数方陣展開……ブレイブルー、起動!』

ラグナとドラえものの掛け声と共にどす黒い瘴気が噴出した。

「なっ……!これは!?!」

とカイ・キスクは驚愕を隠せない。が、すぐに剣を構えなおす。

「くっ、スタンエッジ!」

と剣先からプラズマ弾を出す、弾かれてしまう。

「なっ、何!」

「そんなもんは効かねえ!」

「クッ、ならばライト・ザ・ライトニング!」

カイ・キスクは自らの奥儀を放つが、ラグナの放つ瘴気に打ち消されてしまう。

「終わりだ、闇に喰われる!」

そう言っているとラグナは右腕でカイ・キスクをつかむ。カイ・キスクはラグナの右腕を見て驚愕した。そう彼の右腕は人間にある右腕とは違っていた。彼の右腕は二の腕から巨大化しており黒ずんでいた。

そして掌には巨大な一つ目があつたのである。

「これが闇の力だアアアアアアアアッ！」

その右腕でカイ・キスクを地面に叩きつけ意識を無に返したのだった。

「ノックアウトオオオオオオオオオオッ！ラグナチームの優勝ですー！！」

と司会者の宣言と共に戦いは終わった。

そして数十分後・・・

「それでは表彰式を始めたいと思います」

戦いが終わり、表彰式が始まった。

マリオとスタンはこれで天空寺院に行けるな、と安堵する。ラグナに賞状と秘薬が渡されようとしたその時だった。

ガシャン！

突然電気が切れたのだ。

「何だ！？停電か？！」

と慌てるスタッフ達。その時、ラグナは何者かの気配を感じ大剣をその方向へ振り下ろした。

ガギン！

「チィ！しくじったか」

と前回、ジョーカーと話していた猫の亜人が舌打ちをする。

「何だ、テメエは・・・」

とラグナもその亜人をにらみながら言った。

「あなたはあの時の・・・」

「ジャンガー！！！」

とその亜人の名前を叫ぶ。ジャンガはワルキューレとスタンを見るとくつくく、と笑う。

「俺様の名前を覚えてくれやがって嬉しいね・・・」

といやらしい笑みを浮かべながら言った。そしてそのまま続ける。

「本来なら・・・、負けた後ぶっ殺そうと思ってたんだが、優勝し

ちまうなんてよ・・・ま、勝つてようが負けてようが疲れてることに変わりはないんだがな」

「何だと！！！」

とスタンが叫ぶ。そんなやり取りを尻目にラグナは考え込む。

（やべえな・・・、さっきの決勝戦でブレイブルー開放しちまったし、少し不利かもな・・・）

「それと・・・誰か忘れてねえか？」

とジャンガの問いにラグナは疑問符を浮かべる。

「足りない・・・？そっぴやルーティはどうした！？」

とルーティがいないことに気がつく。

「まさか・・・！」

とウルキューレはルーティに何があつたのかを悟りジャンガをにらむ。

「そうよ・・・そのまさかよ！ちよいとボコつて地下牢にとじこめてあるんだが・・・、そろそろジョーカーの手下共が転移して来る頃だからな・・・どうなるかわかんねえぜ？」

そう言うのと再びキキキ・・・と笑う。

「早く助けに行ったほうが良いんじゃないかねえのか？一人ぐらいは見逃したって良いぜ？」

「ちっ・・・おいヒゲ。ルーティを助けに行ってくれ」

とラグナはマリオに頼む。

「OK、だけどよ・・・俺が帰ってきたとき負けてたつてオチは無しだぜ」

「負けるかよ・・・」

ラグナの言葉ににやりとマリオは笑つとそのままルーティを助けに行った。ジャンガはその光景を面白そうに笑う。

「ま、どちらにしろお前らも後を追うことになるぜ・・・あの世へなあ！」

そう言うときジャンガはラグナに迫る。

「馬鹿言つてろ、あの世に行くのは・・・」

せまりくる爪を全てかわす。その拍子に少し頬に掠って、赤い筋が出来るがラグナは大剣を振り上げる。

「テムエのほうだアアアアアアアアアアッ！」

咆哮と共に横薙ぎに大剣を振る。

ガギン！！！！

ジャンガはとつさに爪でガードするも威力は凄まじくグッ、とうめきながら吹っ飛ばされる。

「キキキ……この俺が2度までもしくじるとはな……中々やるじゃねえか……流石は統制機構が全国指名手配するほどだなあ……ラグナ・ザ・ブラッドエッジ」

当たり前だ、とラグナは言う。

「伊達に図書館を潰してるわけじゃねえんだよ」

「キヒヤヒヤヒヤヒヤ……だけだよ……そんなに余裕ぶっこいていいのか？」

ジャンガの言葉に怪訝な表情を見せるラグナ。

「テムエ……何言って……ッ！！」

突然、体を痺れが襲う。

「さつき、俺は『しくじった』と言ったよな……だが、しくじったの意味が違うんだよなあ」

「グッ……テムエ……！」

「ラグナ！」

「ラグナさん、どうしたんですか！？？」

『のび太君！？大丈夫か！？』

とうとうラグナは膝をついてしまい、ワルキューレ、スタン、ドラえもんはラグナの異変に気づく。その様子にジャンガはどうよ、と得意げに話す。

「ジャンガ様特製の猛毒だ。徐々に体力を減らし、最後には体を麻痺させ身動きを取れなくさせる最高の代物だぜえ！あの時『しくじった』と言ったのはテムエを一撃で殺せなかったことだア！」
そのとき地響きが起こった。

「おうおう、やっと来たか・・・どうやらお前らだけじゃなくこの町も終わらしいぜ」

ジャンガの言葉に一同は驚愕を隠せない。

「町の人は無関係ですよ！」

ワルキューレの言葉をジャンガはうるせえ！と一蹴する。

「今の俺は機嫌が悪いんだ！これくらいいしねえと俺の気がおさまらねえんだよ！死に底無いのお前らを殺したってつまんねえしよあ！」

「成る程・・・、ならば私がお相手しよう」

「ああん？」

いきなり聞こえた謎の声にジャンガは怪訝な表情をしながら振り向くとそこにはカイ・キスクがいた。

「キスクさん！」

とスタンが驚きの表情で言う。

「何だデメエは！？」

「国際警察機構所属、カイ・キスク。貴方の行いは許しがたき犯罪行為です。正義の名において貴方の身柄を拘束します」

ジャンガはさも面白くもなさそうにふん、と鼻で笑う。

「正義漢ぶっていい気になってると痛い目見るぞお！大体お前決勝でこいつ等に負けてんだろが！そんなへば野郎が俺と戦い合おうつてのか！？ああ！」

ジャンガの言葉にカイ・キスクは違うな・・・、と答える。

「誤解しないで欲しい・・・ラグナ君たちと戦う直前、ただならぬ気配と殺気を感じた。だからこのような事態を予測し力を加減し、わざと負けたのだ」

「それって言い訳じゃねえのか・・・」

とラグナが指摘するがスルーをするカイ・キスク。

「んだとお・・・」

とジャンガは爪を構え、カイ・キスクを殺す気満々である。

「それでは参りましょう・・・、覚悟はいいですか？」

カイ・キスクも剣を構えた。それに応じ彼の周りから電気のような

オーラがほとばしる。どうやら力を加減していたのは本当のようだ。
(な・・・何だこの気は・・・！？髪の毛がチリチリしてやがる・・・)

とジャンガは内心恐怖を抱いていた。だが・・・

「あの世で後悔しなあああああああつ！」

その恐怖心を捨てカイ・キスクに迫る。

「その罪・・・神に返しなさい」

突如カイ・キスクの体が消えた。

「なっ！？」

ジャンガは驚愕の表情になり、地面に叩きつけられる。

「跪きなさい」

「グガアっ！調子こいてんじゃねえ！」

といらただしげに爪を振るうがカイ・キスクには全く当たらない。

それどころか立て続けにカウンターを食らわされている。

「瞬発力^{スビード}」

ドゴォ！

まず拳が、ジャンガの腹にめり込む。

「グゴッ！」

「持久力^{スタミナ}」

ザシュッ！

続いて斬撃

「ギニヤア！」

「精神力^{マインド}」

ズガァ！

蹴りをジャンガの顔に叩き込んだ！

「ギャブウ！」

「そして力^{パワー}」

最後に背負い投げを決めた。

「ゲ・・・ヒュ！」

地面に叩きつけられ肺の空気を一気に吐き出されたのだろうジャン

ガは苦しげな声を出す。

「全ての面で君より遙かに凌駕している。何故なら……」
起き上がるうとしたジャンガに剣を突きつけ続ける。

「私のほうが優れているに決まっているからだ」

「ぐっ……ふざけんじゃねえ!!!」

と剣を払いのけ再び迫る、だが！

「無駄だ！ライト・ザ・ライトニング！」

「グギニャアアアアアアアアアアアッ！」

ジャンガはライト・ザ・ライトニングをまともに喰らいきりもみ回転しながら地面に落ちた。

「君の負け（チェックメイト）だ」

と剣を収めるカイ・キスク。ジャンガは起き上がろうとするがふらつきひざをついた。

「ぐ……ガッ……！勝ったつもりでいるようだが……こつちには何十体もの幻獣がいるんだぜえ……今頃はこの町の連中をぶっ殺してるかも知れねえぞ……」

「そんなことあるわけ無いでしょ！」

「ああん!？」

と客席から声が聞こえた。ジャンガが振り返るとそこにはルーティとマリオが来ていた。

「な……なんだと!？仮に助けられたとしても無事にここへ戻ってこられるはずがねえ！地下には何十体幻獣を待ち伏せておいたはずだ！」

「あんたバカア？ここが何処で何をしていたか知らなかったの？後ろ見なさいよ」

ジャンガは言われたとおりに後ろを見るとそこにはカサンドラやソフィーティアなど大会に参加していた者たちがいた。

「なんだとお……」

「ごめんね。期待してたでしょ？」

とカサンドラがジャンガに向かってウィンクする。

「お前達の幻獣共は俺達が片付けたぜ！」

そうだ、と別の参加者も言う

「俺達は武道大会の選手なんだ！そこらの雑魚を相手にするぐらい屁でもねえぜ！」

「・・・くそっ！」

とジャンガは逃げ出そうと後ずさりするが、
ドン！

と後ろの誰かにぶつかる。

「ふいー、やっと動けるようになったぜ」

その声を聞き、ジャンガは我が耳を疑い振り返る。そこには自分の毒で動けないはずのラグナがいた。

「ば・・・馬鹿な・・・ありえねえ」

と啞然とする。

「お前がキスクとやらと戦っている最中にドラえもんに頼んでな。

俺の血液を使って練成の術式で血清を作ったんだよ」

『物凄い強力な毒だったから血清作るのに苦労したけどね』

とドラえもんが言う。そこへマリオ、ルーティが会場のほうへ降りてきた。

「さーてフルボツコタイムの時間だぜ！」

とマリオは指の関節をパキパキ鳴らしながら言う。

「糞が・・・お前らみたいな雑魚が・・・」

とボロボロの体に鞭打ってジャンガが立ち上がる。

「調子こいてんじゃねえよおおおおおおお！」

咆哮した。だが、そんなものは虚勢でしかない。すぐさまカイ・キスクに拘束される。

「いい加減に邪念を捨てなさい！」

「んだとお！」

とカイ・キスクをにらむが・・・

「ギャアっ！」

あるところを触れられ飛びのく。カイ・キスクが見たものは

「む・・・やけどの跡？」

ジャンガの右肩の袖が破れ素肌があらわになった。その素肌は酷く焼け爛れていた。まるで誰かに火でも押し付けられたような、そんな傷だった。それを見たカイ・キスクはハッとする。

「その傷は何処で付けられたのです！？」

「この傷か？思い出しただけでもむかつくぜ・・・、昨日ここに来る前にちよつと気に触る奴がいたから絡んでやったのよ。そしたらそいつは物凄い炎を出しやがってこの様だ！」

と忌々しげにジャンガは傷を見ながら言う。

「その男は何処に！？」

「・・・その様子じゃ知り合いか何かかよ？」

とカイ・キスクの様子を見てジャンガは言う。

「だが、タダで教えるほどのジャンガ様は堕ちていないぜ！」

そう言うジャンガは最後の力を振り絞り客席へと飛び上がる。

「今日の所は見逃してやらあ！それとお前！」

とカイ・キスクを指差しながら続ける。

「今度あったときは『火の男』を土産に持って行ってやる。だが・・・

・生きちゃいけないけどな・・・」

そう言うジャンガは一目散に逃げる。

「待て！」

カイ・キスクはそう言う客席に飛び上がりジャンガを追いかけていった。

この後、ラグナたちは無事に秘薬を中華風の商人親父に渡し、天空寺院がある東の大陸へと出航することにした。

その頃・・・

統制機構幻想界支部、窯の中・・・

くるり・・・くるり・・・と妖しげに光る蒼白い光。その光の中に少女がいた。

「もうすぐ・・・もうすぐ逢えるね・・・のび太・・・」
そう言っていると少女はにやりと笑みを浮かべたのだった。

TO BE COUTENUDE・・・

EP1-9「HEVEN OR HELL 後編」(後書き)

ギルティギアからカイ・キスクがソウルキャリバーからソフィー・テ
ィア&カサンドラの姉妹が登場しました。少しジャンガ戦のカイ・
キスクが『仮面ライダーキバ』に出てくる名護さんみたいだったけ
ど・・・気にしない気にしない。

さて今回は天空寺院に到着します。
それでは。

EP1-10「力への執着ゝ予兆ゝ」(前書き)

結構、後半からグダグダのような気がします。
それでも言い方はどうぞ。

EP1-10「力への執着」予兆」

「ん、夜風が気持ち良いぜ」

と夜、満月が輝く船の看板でラグナは伸びをした。

ラグナ達が中華商人風の親父に船に乘せてもらい、東の大陸に向けて出航し、すでに日が暮れていた。親父曰く「朝になれば着くアル」との事である。他のメンバーは明日に備えて眠っている。ラグナは何故か眠れなかった。過去の夢を見たくない、と言う理由もあるのだが、それだけではない。何気に今夜は満月なのでそれを見たかったのだ。

「月の明るさって何処の世界でも変わんねーな、ガキの頃を思い出さず。確か俺の部屋の窓から見る月ってこんな感じの明るさだったなあ・・・」

『クスッ、そうだね』

とドラえもんが笑う。

「どうした？」

『いや、別に昔のことを思い出してさ』

「昔のこと？」

『うん、僕が君のところに来る前・・・つまりセワシ君が小さかった頃、満月を見てセワシ君、月が怖いって泣いてたんだよ。月が落ちてくるー、ってね』

ドラえもんの言葉にラグナは苦笑いをする。

「ははっ・・・月が落ちてくるねえ・・・そりゃ傑作だ」

そう言いながらラグナは苦虫を噛み潰した顔になる。恐らく過去にセワシに腕を斬りおとされた記憶が蘇ったのだろう。ラグナの心情を察知し、ドラえもんは心配そうに謝る。

『あ・・・ごめん、嫌なこと思い出させちゃって・・・』

「いいんだよ。俺も何昔のこと思い出してんだか」

ラグナはそう言って頬を叩く。叩かれ熱を持った頬が夜風に染みた。

「さて、と・・・明日も早いし、寝るか」

『そうだね』

そう言うところラグナは他のメンバーが寝ている寝室へと戻っていった。

朝、船は港に着きラグナ一行は親父に礼をいい船を後にした。

「天空寺院までもう少しです」

「だな、さっさと行こうぜ」

と港を後にしようとしたその時、

「Welcome!今日は特別に回復薬とかも扱っているぜ」

あの武器商人が現れたのだ。「またかよ・・・」とラグナは彼の神出鬼没さに驚きを通り越しあきれ果てていた。とりあえず回復薬なども扱っているというのでそれらを買った。(あとラグナの銃の弾も)

「ヒヒヒ・・・Thank you」

満足そうに商人は手を振っていた。

迫り来るモンスターたちを倒しながらラグナ一行は天空寺院へと足を進めていく。やがて一行は天空寺院にたどり着いた。

「ここが天空寺院か・・・」

とラグナは感慨深げに言う。そして入ろうとしたその時だった。門番らしき2人組みに止められる。

「待たれよ、旅の者。ここから先は一般人の立ち入りを禁ずる超聖域の天空寺院である。速やかに立ち去るがよい」

とそこへワルキューレが名乗り出る。

「女神イシター直属、ワルキューレ。大巫女様に急な用で参りました」

それを聞いた門番はしばらく黙った後、

「これは失礼いたしました。どうぞこちらへ。天空寺院へお連れします」

と門番は魔方阵を作りラグナ達に入るように促す。その時ラグナは改めて「名前ってマジで便利だなー」と思ったという。

そこに踏み入れると、いつの間にか転移していた。どうやらここが天空寺院らしい。

ラグナは扉を開けるとそこには威厳が漂う女性と、それに付き添う少女がいた。

その女性はワルキューレを見ると微笑みながら言う。

「ようこそ天空寺院へ。お久しぶりです、ワルキューレ」

「急にお越ししたことをお詫び申し上げます、大巫女様」

ワルキューレはその女性、大巫女見て微笑みながら礼をする。

いいですよ、と大巫女は微笑みながら言う。

「近いうちに貴方がここに来ることを知っていましたから。そして貴方達もです、スタン・エルロン、ルーティ・カトレット」

「お久しぶりです、大巫女様」

「お久しぶり、大巫女様、それとロロちゃん」

「お久しぶりです、スタンさん。ルーティさん」

名を呼ばれスタンはお辞儀をし、ルーティは少女、ロロの頭を撫でる。その光景を見てマリオは感心している。

「つかー、黄金の騎士の次は天空寺院の大巫女様とも知り合いかいよー。うらやましいぜ」

とマリオがスタン達の人脈の深さをうらやましがっている最中、ロロがラグナ達に駆け寄る

「おじさん達はクロノアさん達一緒にいませんでしたよね」

「おいおい・・・お嬢ちゃん・・・おじさんってこの赤い帽子のひげはともかく俺はおっさんじゃないの。お兄さんなの。OK?」

「ちょｗｗｗｗ俺がおっさんって・・・俺もまだ若いんだけど」

とラグナに反論しようとするマリオだが、

『誰がどう見たってマリオさんはおっさんじゃないですか』

「によるーん・・・」

とドラえもんに言われ、意気消沈してしまう。このときのマリオがどこぞのちゆるやさんみたいになっているが気にしてはいけない。

「確かにお兄さん達は2年前の戦いにはいなかったぜ、それがどう

かしたか？」

とラグナは言う。ちなみに「お兄さん」の所を妙に強調して言っているような気がするが気にしてはいけない。そんなラグナを大巫女は険しい表情で見てやがてラグナに口を開く。

「・・・あなたはもしかして異世界の住人では？」

「ん？ああ、俺の名はラグナ・ザ・ブラッドエッジ、あんたらが言う物質界から来た」

とラグナは大巫女の問いに答える。大巫女はそれを聞き、驚愕の色を滲ませ言う。

「まさか！？他の世界との壁がもつとも厚いとされている世界から・・・」

「22世紀の物質界じゃ、その世界を支配している世界虚空情報統制機構は次元の壁だろうがなんだろうが関係なく自由に移動できる装置が作られたんだよ。異世界を植民地化するためにな・・・」

それだけじゃありません、とワルキューレがラグナの後を続ける。

「彼らはもう一度世界を一つにするための鍵である蒼の宝剣のかけら『ムラクモユニット』を探させるために4人の聖女を捕らえようとしています。すでにキノコ王国のピーチ姫が統制機構に・・・」

「そうですか・・・」
と大巫女は聖女の一人が囚われの身になっていることにため息をつく。

マリオがワルキューレの後を続けた。

「それで、俺達はピーチ姫を救うため、それと聖女のDNAを元に作られている次元接触要素体を練成される前に破壊するために幻想界にある図書館に行きたいんだが、建物には強力なプロテクトが張ってある。そこであんたの力で図書館の内部に転送して欲しいんだが・・・」

大巫女はしばらく黙り込み、ややあつて口を開く。

「確かに、この天空寺院からなら何処へでもプロテクトなどすり抜けて内部に入ること等可能です、ですが・・・」

とそう言うで大巫女はしばらく黙ってしまふ。そんな大巫女を見てマリオはなーに、と言う。

「図書館の内部に入って中枢を叩けば勝ったも同然だぜ」
そうだな、とラグナもマリオの考えに賛同する。

「練成が終わる前に、素体を潰せば後は楽だ。俺は何度も図書館を潰しているからな。こういうことには慣れている……ん？」

と何かの気配を察知するラグナ。すると……

バラバラバラバラバラバラ……

「何の音？」

とルーティは謎の音に警戒する。

「ヘリの音……図書館の連中か!？」

とラグナも臨戦態勢に入る。

「そんな、もう来たのですか!？こんな時に……」

「いや、ちょうどいいタイミングなんじゃねえか？」

「えっ？」

マリオの言葉に疑問符になるワルキューレ。

「これで俺達がまだ着いていなかったり、逆に早く来すぎて図書館の内部に行っていたらどうなってたことやら」

「いえ、そんなことないですよ」

口口のセリフに「へ？」と啞然となるマリオ。そこへ……

「おーい!口口ー!大巫女様ー!大変だよー!」

と青い服と帽子を被った獣人の少年が出てくる。続いて赤と黒の服を着てゴーグルをつけた少年もやってきた。ちなみにこの少年も獣人である。青い服の少年は大巫女の元に全速力でやってくると、口を開いた。

「変な乗り物に乗った奴等が天空寺院に乗り込んできたよ!」

それでよ、と赤い服の少年も答える。

「奴等、すげえ武装の上に幻獣まで連れてきてんだよ!こりゃとつとと逃げたほうか……」

と赤い服の少年はルーティ、スタン、ワルキューレを見てしばらく

黙った後言う。

「えーと・・・どつかで見たような面も揃っているが・・・」

ちよつとガンツ！と青い服の少年は赤い服の少年（恐らくガンツは彼の名前だろう）に突っ込む。

「この人たち前に一緒に戦ったスタンさんとルーティさんだよ！それと真ん中にいる人は女神の騎士ワルキューレさんだよ！」

るっせーなクロノア！とガンツは青い服の少年もとい、クロノアに怒鳴る。

「ちよいと忘れちまったただけだ！」

ちよつと！とその発言にルーティは反論した。

「いつちばんはじめに会ったのに忘れないでよ！」

「お前らのような種族は全部同じに見えんだよ」

（俺達からすれば君達のような種族は忘れたくても忘れられないような気がする・・・）

とガンツの言い訳にスタンは心の中で突っ込んだ。

「んだよ・・・誰かと思えばブリーガルかどつかのガキかよ・・・」

とマリオは少し馬鹿にしたような口調で言う。

「んだと！？このオッサン！」

とその言葉にカチンと来たガンツはマリオに噛み付いた。クロノアはマリオをじつ、と見ていた。

「ん？赤い帽子に・・・Mのマーク・・・少し太めでヒゲはもさもさ・・・」

そしてはっ、としてマリオを見る。

「もしかしてこの人、キノコ王国の英雄マリオ！？」

「へ？」

と疑問符を上げるマリオ。一方マリオだということがわかったクロノアは嬉しそうに飛び上がる。

「凄い凄い、本物だ！本物のスーパーヒーローだよ！」

「すーぱーひーろー・・・」

マリオはしばし硬直した後、後ろをむき出した。

「あれ？どうしたんだマリオ？」

とスタンはマリオの様子を伺う。

「・・・おれ・・・おれ・・・俺やっとな自分の事知ってる奴に会えた・・・グス」

泣いていた。それを見たラグナとスタンは「泣くなよ・・・」と心の中で呟いたという。

「さてと・・・そんなことより奴等を止めねーとよ」

と大剣を抜き話を切り出すラグナ。と、

「ちよつと待て」

とガンツに止められる。

「ん？何だよ」

「今まで別世界で俺達を見た奴はすげえ顔して驚いていた。特に物質界の奴等はな・・・なのになんでお前は平然とこの空気に溶け込めるんだよ！」

全員ラグナに注目する。

「確かに・・・言われてみればそうですね・・・」

とワルキューレ。

「いくら長いこと幻想界にいても・・・」

とルーティ。

「普通は驚くだろ・・・」

とスタン。ラグナは全員の視線にしどろもどろになりながらも説明する。

「あー・・・えーと・・・お、俺は前々からこうゆう生き物とかはよく見てるから慣れてんだよ。たとえば豆ぐらいの小さな人間や、二足歩行の犬や猫・・・それに俺の親友の猫型ロボット・・・今は俺の右腕になってるけどな」

と手袋を外し義手となつた右腕を見せる。

「わー、すごい」

とクロノアは歓声を上げる。

「それにホラ、喋るんだぜ」

『こんにちは、僕ドラえもんです』

「うおっ！？喋った！？」

とガンツも驚いた。

すっかり仲良くなりクロノア、ガンツと話しているラグナを見て大巫女は考えていた。

（このラグナと言う青年・・・只者ではない・・・）

天空寺院を通してあらゆる世界に行くことの出来る彼女はラグナが未来の世界で各地の統制機構支部『図書館』を潰して回っていることを知っていた。もちろん、蒼の魔導書を所持している事も・・・（彼は気づいていないが・・・とてつもないパワーを感じる・・・蒼の力ではない、何かとてつもないパワーを・・・）

一方、ラグナ達はわいわいがやがや、談笑していた。とそこへ痺れを切らしたのか口口が怒鳴る。

「ちよつと！クロノアさん！ガンツさん！悪い人が攻めてきてるんでしょ！のん気に立ち話しないでよ！」

「いけない、すっかり忘れてた・・・」

とクロノアはばつが悪そうに言った。まったく、とガンツは毒づく。

「ほら、お前らも応戦しろ！相手は大人数だぞ！」

とラグナ達はそれぞれ武器を取り出し外の敵を迎撃しようと出ようとする。

「待つんだ君達！」

後ろから声がかかりラグナ達は振り向く、そこにはギルガメスとカイが居た。

「間に合ってよかった」

とギルガメスは言う。すいません、大巫女様、とカイは大巫女に謝罪する。

「正門は敵に占領されていたので裏口を使わせてもらいました」

よいのですよ、カイ。と大巫女は笑顔で言う。

「貴方達が来てくれて本当に良かったです」

「あんた達来るの早すぎ・・・」

と半眼で言うルーティ。そしてそのまま続ける。

「この前西の大陸を探索するって言ってたじゃない」

ああ、そのことか。とギルガメスは言いながらあるブーツを取り出した。見た目はタダのブーツにしか見えないが、くるぶしの両脇に小さいながらも某起動戦士のランドセルに取り付けられているバーニアが装着されていた。

「このジェットブーツがあれば何処でも早く行けるさ」

（（こ・・・この野郎・・・俺達がどれだけ苦労してここまで来たと思ってやがんだ・・・））

とラグナとマリオは殺意を込めたまなざしでギルガメスを見ていたことは言うまでもない、それはさておき・・・

「敵はもうエントランスで戦闘態勢に入っています。皆で協力して大巫女様を守り抜きましょう！」

こうしてラグナ達と統制機構の大巫女防衛戦線が始まるのだった。

外に出たラグナ達は統制機構の兵力の差に驚いていた。数は幻獣やエイグスを含め150ぐらいの数で正に圧倒的兵力であった。

「凄い数だな・・・」

スタンの言葉をガンツはなーに、と笑いながら言う。

「あの時の戦いに比べればどうってことないぜ」

ふと、ルーティが何者かに気づいた。

「一番向こうに誰がいるわ！」

「どうやらあれが頭そうですね」

それにつられラグナとマリオがルーティとワルクューレの指差したほうを見える。

「！！？」

ラグナはそれを見て怒りと驚きが入り混じった顔になる。

「あ、あの野郎は！」

とマリオはその男の顔を見て殴りかかろうとするがラグナに止められる。

「マリオ、下がってる・・・アイツは俺がやる」

「で・・・でもあいつは俺の弟を・・・」

「下がってる！」

マリオの声を遮り、ラグナは憎しみと怒りのこもった目でその男を見る。途端にラグナの脳裏にあの時の光景が蘇った。ラグナが少年（のび太）だった頃のあの真つ赤な光景、そしてあの凶笑を・・・。

「セワシイイイイイイイイイイイイイイイ！！！」

ラグナはその男をかつての自分の孫―セワシーの名を大声で叫び、敵の真つ只中に身を投じた。

その頃、統制機構陣、セワシとジョーカーは話をしていた。

「キサラギ少佐。全部隊、持ち場に着きましたよ。いつでも突撃可能です」

セワシはその陣の配置に満足そうにうなずく。

「・・・中々見事だ。確か部下を使った戦法はお前の得意分野だったな」

「いやはや、皮肉の混じった褒め言葉、ありがとうございます。我々特殊工作部隊が、イカルガの英雄であるセワシ・N・キサラギと共に戦えるなんて光栄です」

そう言うとジョーカーはノホホ・・・と笑う。

「僕は君らには興味は無いが・・・まあいい、付き合ってやるか」と表情を変えずセワシは言った。その時、

「セワシイイイイイイイイイイイイイイ！！！」

と遠くから怒号が聞こえる。

「おやおや・・・、何でしょうか？恐れ多くもイカルガの英雄を呼び捨てとは、何処の馬鹿なんでしょうかね？」

と望遠鏡をのぞくと、ジョーカーが見たものは敵陣で勇猛果敢に一騎当千の強さを見せるラグナの姿だった。

「む・・・、ラグナ・ザ・ブラッドエッジが天空寺院に着いていたとは、予想外でしたねえ・・・、ってキサラギ少佐？」

とジョーカーはセワシの顔を見て少しながら驚愕をする。いつもなら顔色一つ崩さないセワシがラグナの顔を見た瞬間、驚きと喜びが入り混じった表情となっていたからだ。

やがて、ラグナが敵の包囲陣を突破し、セワシへと迫る。やばい、と思ったジョーカーはラグナに立ちふさがった。

「ノホホホ！ここから先は通しませんよ……」どけえ！」ぬぎよっ！」

とセワシに殴られジョーカーは吹っ飛ばされる。セワシは心底嬉しそうな顔でラグナを見、叫んだ。

「ははは、お爺ちゃん！やっぱりお爺ちゃんじゃないか！」

それと同時にラグナの大剣が振り下ろされる。

ガギイイイイインン！！

ゴアッ！

とセワシは持っていた太刀『アークエネミー ユキアネサ』でラグナの一閃を防ぐ。途端に砂煙が巻き起こった。

罅迫り合いの形でにらみ合うラグナとセワシ。やがてセワシが口を開く。

「挨拶も無しに斬りかかるのかい？本当に昔と変わらないね……お爺ちゃん。でも昔と変わらないから安心したよ……」

「セワシ！何で、テメエがここに居やがる！？」

セワシの猫なで声に対してラグナは声を荒げながら叫び、セワシのユキアネサを弾いて距離をとった。

「何でって……ちよつとお爺ちゃんの横に転がっている馬鹿に付き合わされてここに来ただけど、まさかお爺ちゃんに会えるなんて思っただけだったよ。あはは……凄いね。お爺ちゃんは。22世紀の物質界では世界最高額の賞金首。全世界の統制機構を震え上がらせる『死神』……今じゃ誰もが知っているよ。子供でさえも……」

・『ラグナ・ザ・ブラッドエッジ』の名をね」
そう言いながらセワシは氷の刃を精製しラグナに向けて放つ。ラグナは右手をかざし障壁を発動させそれを防いだ。セワシはそれを見

て首をかしげる。

「あれ？おかしいね・・・、お爺ちゃん術式使えなかったはずじゃ・・・ひょっとしてそれも――」

そう言いながらセワシは地を蹴りラグナに斬りかかる、が受け止められた。

「ドラえもののボディに隠された蒼の魔導書のおかげなのかな？」

ラグナはうるせえ！といいながらセワシを左腕で殴りかかる。セワシは紙一重でかわし、再び距離をとった。

「てめえには聞きたいことが山ほどある・・・だが・・・」

ラグナは大剣をセワシに突きつけ、続ける。

「その前にぶった斬らせろ！！！！」

セワシはその言葉にククク・・・と不気味に笑う。

「いいねえ・・・いいよ。この感覚・・・たまらないよお爺ちゃん！！！！」

そう言いながらセワシはユキアネサを地面に突きつける。するとどうだろう、ラグナを中心とした半径20メートルの範囲にツララが飛び出した。ジョーカーや後から追いついてきたワルキューレたちは難なくかわしたものの兵士などは逃げ切れずツララに串刺しにされ絶命した。

「セワシ・・・てめえ・・・！」

「おいで・・・お爺ちゃん・・・また殺してあげるから」

その言葉と同時にラグナとセワシは同時に地を蹴った。

一方そのころ統制機構幻想界支部、ここでは次元接触用素体の練成が行われていた。もちろんピーチ姫もここでとらわれている。

「次元接触用素体No.13、ムラクモユニット受肉成功。これより再練成を行います」

オペレーターはそう言う隣のボタンを押した。そして、しばらく立ち・・・

「UNIT MURAKUMO No.13 REPRODUCT

ION PROGRAM SCHEDULE ENDED」

とナレーションが流れ、再練成が終了する。

「練成成功か、ふふふ・・・これで世界の融合の一步を踏み出せたわけだ」

と結果を満足そうに笑みを浮かべる男。どうやらここの科学者のようだ。

「よし、No.13を窯から出せ」

「了解、v-13の起動を開始いたします」

そう言うのと起動とかかれたボタンを押す。それと同時に窯からその次元接触用素体が現れた。それは人間の少女のような姿だった。白い・・・髪も肌も全て白い少女だった。ただ一つ右目に巻かれた眼帯を除いて。

「起動、起動、起動・・・全機能正常・・・ムラクモユニット、v-13起動します」

その少女――v-は人間味の無い言葉を言うのと目を開けた。瞳の色は血の様な赤である。

「よし、成功だ。次はピーチ姫のDNAを採取しNo.14の製作に取り掛か・・・」呼んでいる・・・「何処へ行くんだv!？」と科学者の男は突如vがブツブツ喋りながら支部へと出ようとするので止めようとする。

「何をしている!?!何処へ行くつもりなんだ!?!」

「感知、呼んでいる・・・不明・・・不明・・・誰?蒼の魔力を感じ・・・そこへ急行する」

そう言うのとvは男を押しつけて再び歩き出した。

「待て!戻らないか!命令だぞ!」

「命令、拒否。蒼の魔力源の急行を最優先とする」

「ま、待て!くそっ!全兵士に告ぐ!次元接触用素体ムラクモユニットv-13が逃げ出した。見つけ次第、捕獲しろ!」

自分では止められないと思った男は無線を使い全兵士に呼びかけた。だが、それが自分の運命を決定付けるものである行動だとは知りも

しなかった。

「対策を検索中・・・、私への妨害行為を魔力源への急行の障害と判断。障害対象を殲滅します」

vのその言葉と共に何処からとも無く巨大な剣が落ちてきた。その衝撃で砂煙が立ち込める。それが晴れる頃には、vの姿は変わっていた。ぴっちりとしたボディースーツ。所々に機械的なアーマーを取り付け、なんとも特徴的だったのは背中についてある機械的な翼、そして目の部分を覆うモノアイバイザーだった。

その姿に男は啞然としている。vはそれにも関わらず男に近寄り、右手をかざす。

「滅べ」

ズン！

「え？」

突如剣が飛び出し男の胸を貫いた。男は何が起こっているのかわからず、意識は闇の中に消えた。

そして・・・、数十分もせずに幻想界支部は壊滅したのである。たった一人の少女の手により。そして支部を滅ぼした当人vは気を失っているであろうピーチ姫を抱えると、すぐさま天空寺院へと向かった。

「のび太・・・今行くからね・・・」

と血で濡れた顔に微笑を浮かべ・・・。

TO BE COUNTENED・・・

EP1-10「カへの執着ゝ予兆ゝ」(後書き)

次回、ラグナVSセワシ決着、そしてvとラグナの邂逅です。
それでは(owo)ノシ

Ep1-11「力への執着、暴走」(前書き)

やっとこさEp1もクライマックス。ただどちよつとグダグダな気もするな。

さてそんなことはさておき前回のあらすじ。

天空寺院に着いたラグナ一行はそこで攻めてきた統制機構を迎え撃とうとする。そのさなかラグナは敵の中にかつての孫、セワシを見つける。過去に腕を斬られたラグナは激昂しセワシへと斬りかかっていった。

一方、統制機構の支部で次元接触用素体vが作り出されるだがvは蒼の力を求め暴走し、支部を壊滅させる。そしてそのままラグナの元へ向かうのであった。

Ep1-11「力への執着／暴走」

天空寺院――

ここではラグナとセワシの一進一退の攻防が続いていた。

「あはは！やるじゃないかお爺ちゃん！少し腕上げたんじゃないのかい？」

とセワシは笑いながらラグナに斬りかかる。

「うるせえっ！」

ラグナは叫び大剣で受け止めた。そしてそのまま右手から左手に剣を持ち替え、右拳を握り力をためる。

「くたばれセワシ！ヘルズファンゲ！」

ラグナが叫ぶと同時に拳に瘴気が宿り、それをセワシに繰り出す。ズドオオオオオオオオオオオン！！！

拳は狙い違わずセワシの腹に直撃し、セワシは吹っ飛ばされる。それと同時にラグナは飛び上がり、剣を振りかぶる。追い討ちをかけるつもりだ。

「セワシ！死ねえええええええっ！」

咆哮、ラグナはそれと同時に剣を振り下ろす。だが寸でのところでセワシはユキアネサでラグナの剣を受け止めた。

「ふふふ・・・お爺ちゃん、油断しちゃダメだよ」

凶笑、そして蹴りでラグナの防御を崩し、居合いの構えをとった。ビュン！ビュン！

一閃、ラグナはそれを紙一重でかわし、両者は同時に地面に着地し、にらみ合う。

一方、他のメンバーはジョーカーと残りの統制機構兵と戦っていた。「うおおおおおおおおおっ！」

ギルガメスは雄たけびを上げながら統制機構兵を斬り散らす。その姿は正に黄金の戦神の如し。ギルガメスの気迫にビビッて戦意喪失

する兵士も居た。

状況を打破するため兵士の一人がギルガメスを狙撃しようとしているが、

「ファイアーボール！」

ゴオオッ！

「ウギヤア！」

引き金を引こうとした瞬間、カイがファイアーボールを放ち兵士を火達磨にした。その弾みでギルガメスとは方向違いの方向へ銃弾は飛んでいく。

「ヤツフウウウウウウ！」

「うおりゃあああああああ！！！」

また違う場所ではマリオとスタンが背中合わせに戦い。

「フツ、セヤツ、ハアツ！」

とワルキューレが華麗なる剣戟で兵士を蹴散らしていた。

（ふむ、状況は芳しくないようですね・・・）

そんな状況を見てジョーカーは考えていた。

（ここで逃げても良いですが・・・もし少佐を置いて逃げたら『あの方』に殺されますし・・・ここは少佐がラグナに勝つか負けるかを見て・・・さっさと彼をつれて逃げたほうが良いでしょうね・・・）

と思考していたその時だった。

「ジョーカー！覚悟しろ！」

とクロノアとガンツが飛び出してきた。

「ちっ、こんな時にお子様が・・・」

とジョーカーは舌打ちをしクロノアの迎撃に対し身構える。

「喰らえ！ウィンドソード！」

クロノアは緑色のエネルギー刃を形成し、ジョーカーに斬りかかった。

「甘いですよ！」

とジョーカーはそれをかわしクロノアに拳を叩き込もうとする。

「させるか！ウィンドシールド！」

と風のバリアを形成しそれを防いだ。ジョーカーはそれを見てほう・
・・、と関心深げに言う。

「少しはお子様も成長したって訳ですか」

当たり前だ！とクロノアは言う。

「マリオさんみたいなスーパーヒーローになるために天空寺院で修行をしていたんだ！」

「修行って・・・ただW。i。ットのバランスゲームやってただけじゃねーのか？」

「しーっ！ガンツ、それ言っちゃダメだって！」

そんなクロノアとガンツのやり取りには目もくれず。ジョーカーは一人あさつてのほうを向き考えていた。

（・・・何か嫌な予感がしますねえ。とんでもないことが起きそうです、手遅れになる前に早く少佐とラグナの決着がつかないものでしょうか・・・）

その頃、ラグナとセウシの戦いは終わりを迎えようとしていた。両者とも満身創痍で後一撃で決着がつくほど疲れきっていた。両者はにらみ合いながら一步も動かない。やがてそのまま静寂が打ち破られる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！」

ラグナが先に動いた。雄たけびを上げ剣を振りかぶろうとしたが、

「はああっ！」

セウシのユキアネサの抜刀が早い。ユキアネサは狙い違わずラグナのわき腹に当たって・・・はいなかった。すんでのところでユキアネサを右手の五本指で受け止めていたのだ。そのままラグナは剣を逆手に持ち、セウシの腹に横薙ぎに振った。

ズバァ！

セウシの腹部から紅い華が咲き、そのままセウシは仰向けに倒れた。
「ガハッ！はあはあ・・・止めは刺さないのかい？」

とセワシは息も絶え絶えにラグナに問う。急所にはあたってはいないが、治療しないとかなりやばい状況だろう。

「お前には色々聞きたいことがある。だから止めはささねえ」

とラグナはセワシを見下ろしながら言った。セワシはククク・・・とか細い声で笑う。

「甘いね・・・甘いよ。お爺ちゃんは・・・だから守れないんだよ・・・何も・・・ね」

セワシの言葉にラグナは黙って足でセワシのど元を蹴り潰した。

「ガ・・・ヒュ・・・」

「黙ってる糞餓鬼。てめえなんざいつでも殺せるが、あいにく今回の目的はてめえじゃねえんだよ。だが・・・そんなに死にたいならここでぶっ殺してやろうか？」

と剣を握りなおし、セワシの首を斬りおとそうと振りかぶる。と、そこへ・・・

「はいストップでございませう」

とクロノアとの戦いを放棄しジョーカーが飛び出してきた。

「ん？何だ、お前は？」

「お初にお目にかかります。ラグナ・ザ・ブラッドエッジ。私、統制機構の工作部隊を勤めておりますジョーカーと申します。以後お見知りおきを」

「それで・・・何のようだ？そのジョーカーさんが？」

とラグナはジョーカーをにらみつける。ジョーカーはラグナににらまれても表情を崩さず答えた。

「実を言うとあなたが踏みつけているセワシ・N・キサラギ少尉をこちらに引き渡して欲しいのですが・・・もちろんタダでは言いません。二度と天空寺院には近づきませんし、ピーチ姫もお返しいたします。ピーチ姫のDNAサンプルも同様ですよ」

「・・・」

ラグナは無言でセワシから足を離す。それと同時にマリオ、ワルキユーレ、スタン、ルーティ、ギルガメス、カイが駆けつけてくる。

「こっちはあらか様片付いたぜ」

とマリオが言う。そして遅れてクロノア、ガンツもやってきた。

「皆あらかたかたづいたのか・・・残るはコイツだけだな」

とガンツはジョーカーをにらみながら言う。どうやら全員タダで見逃す気は無さそうである。

（ひ・・・ひえ～～～これはやばいですね～（汗）早くしないと何かやばい事が起きそうな気がします。その前に逃げ出したいのに・・・）

とジョーカーは内心焦っていた。しばらく考えた挙句・・・

「す・・・すみませんでしたあ～～～～～～～～！！もう二度とここには足を踏み入れません！許してくださいさ～～～～い！！」

某ジャンピング土下座に定評のある悪の科学者並みの土下座をした。これにはラグナ達も許さないわけにはいかず、結局見逃してやることにした。

大巫女の間

「はぁ、疲れた・・・」

ジョーカー達が天空寺院から撤退したことを確認したラグナはため息をつき仰向けに倒れた。

「だ、大丈夫ですか？！ラグナさん！？」

と心配そうにワルキューレがラグナを抱き起こす。

「あー、心配ねーよ。ちょっと疲れたただけだ。なあ口口ちゃん、どつか空き部屋ねーか？お兄さん休みたいんだが・・・」

「おい、ラグナ。まだ一仕事のこってんだろーが、はえーとこ図書館をぶっ潰してピーチ姫助けに行こうぜ」

とマリオはラグナに言う。ワルキューレはそんなマリオをしようがないですよ、と苦笑交じりに言った。

「あのセワシとかいう統制機構の兵士と死闘を繰り広げたんですから、それに私達も疲れてますし・・・」

『そうですよね・・・今日はもう日も暮れてますし、明日、図書館

を潰したって遅くはありませんよ」

とドラえもんもワルキューレの意見に賛同する。

「まあ、言われてみればそうだな。よっしゃ今夜は宴会D A」

と宴会開く気満々のマリオ。それを苦笑しながらギルガメスとカイは見ていたのは言うまでも無い。

ふと、スタンは全員が戦いに勝ち喜んでいるのに対し大巫女が表情を陰しくしているのに気づく。

「どうしたんですか、大巫女様」

「ええ・・・実は明日にでも図書館の内部に転送できるようにしようと検索してみたのですが・・・彼らの魔力反応が見当たらないんです。どうやら潰されたみたいですね」

「潰された・・・だと？一体誰が・・・」

ラグナは一体誰が図書館を潰したんだ？と問おうとしたが、何者かの気配を察知する。

（この気配は・・・『あれ』か！？）

何回か図書館の支部を潰したときに感じた境界の気配。そしてそこから封印されし宝剣のかげらの気配だった。ラグナは過去何度か図書館を襲撃した際にそれを取り込もうとしていた次元接触用素体を破壊している。恐らく図書館をつぶしたのは暴走したそれであろう。だとしたらめんどくさい事になる。いやめんどくさいなんてものではない・・・もつとこう・・・気分の悪いものである。それが一直線に天空寺院に向かってきているのだ。

「逃げる・・・」

ラグナは一言そこにいる全員に言った。

「ラグナ？一体どうして」さっさと逃げろって言うてんだ！『あれ』が来る！狙いは俺だ！」な・・・何だ天井が！」

マリオが何があつたのか問おうとするのを遮り叫ぶがもう遅かった。天井を突き破り『それ』が天空寺院に降り立つ。銀色の透き通った髪、右目を覆う眼帯、白いマントを羽織った少女であつた。そうラグナが言った『あれ』とは、の事であつた。

「な・・・何だあれは!？」

とギルガメスも困惑する。

「さ・・・さあ・・・」

とウルキューレも啞然としていた。

「蒼の魔力の発生源に到着・・・スリープモードを解除します」

υは人間味の無い言葉を喋った後ゆっくりと目を開き、ラグナを見た。

「あー!のび太」

ラグナを見て言ったυの表情は心底嬉しそうで声も明るい感じになっていた。

「こほつこほつ・・・あ、ゴメンね。でも久しぶりだね・・・えつと・・・三回目だっけ?のび太とあったの?」

「ちげーよ、3回目だ、馬鹿・・・」

『のび太君、合ってるよ』

「ん、合ってる?マジで?」

とυの間違いを指摘しようとし、ドラえもんに突っ込まれた。

「ところで・・・のび太が天空寺院にいるってことは・・・また二ユーのこと殺しに来たんだね」

とυは笑顔で言う。

「殺しにじゃねーよ、壊しにだ」

ラグナは反論する。このυと言う少女はラグナにとって不快なものであった。その理由としては彼女が自分の愛した人に似ていたからだ。彼女の発する声はまるで自分の愛した人に対する侮辱の他ならなかった。υはそんなラグナの考え等気にせず言う。

「どっちも同じことだよ。この前なんて凄く痛かったんだから、いきなり斬られて死ぬかと思っちゃった」

「黙れ・・・」

ラグナは静かに言うが彼女は気にせず続ける。

「でもさ・・・のび太・・・気持ちよかったでしょう?」

―やめろ・・・

とラグナは心の中で思う。そんなラグナの心など知らずか知ってかそのままゝは続ける。

「アレだけ無抵抗だったニューを斬ったり刺したりしてさ・・・」

「黙れ！」

ラグナの声音はだんだんと強くなる。

「だってあのときのび太・・・」

「黙れって言つてんだよ！」

「笑つてたよ」

―五月蠅い・・・

「でも今日は違うよ、ほらちゃんとした体があるしお話できるよ」

―その声で・・・喋るな・・・

「あー！でもものび太はこの前のほうがいいのかな？」

―うるさいうるさいうるさいウルさいウルさいウルサイウルサイウルサイウルサイ、ヤメロ、シズカチャンノ声デ！シズカチャンノ顔デ！シャベルナ！！ダメレエエエエエエエツ！！！！
とうとうラグナは頭に血が上り怒鳴った。

「テメエは！黙れって言つてんだよ！！！！その声で！その顔で！胸クソ悪いセリフを吐くんじゃねえ！！！」

そしてラグナはゝの胸倉をつかみ上げ続け、続ける。

「俺はテメエを壊しに来た！それだけだ！！！！話すことなんざ何もねえんだよ！！！」

ゝはしばらく黙っていたが、

「ふふ・・・ふふふふ・・・」

「何笑つてんだよ・・・」

「アハハハハハ！やっぱりのび太もニューと同じだね！うん！同じだよ！アハハハハハハ！！！」

狂ったようにゝは笑い出した。

「何言つてやがる！」

「のび太も壊したいんだよね！？ニューも自分も世界も・・・、グチャグチャにグチャグチャに壊したいんだよね！？」

違います！とワルキューレがvに反論する。

「ラグナさんは世界の融合を防ぐために「黙ってなよ・・・お姉さん。今ニューのはのび太とお話してるの。少し頭を冷やそっか？」！？」

だがvににらまれ不覚にも一步下がってしまう。

「そうだよね・・・のび太には力がある。『蒼』の魔導書・・・世界と戦える力・・・力があるんだもん・・・使いたいよね？のび太？」

それと同時に巨大な剣が地面に突き刺さった。ラグナは危険を察知しvから離れる。

「いいよ、殺りあおうのび太。いつまでもいつまでも・・・ふふつ。ニューはねのび太の望むことだったら何でもしてあげる」剣からまばゆい光がほとばしりvを包み込んだ。

「だってニューのはのび太のモノだもん、のび太を満たせるのはニューだけ、そう！ニューだけだよ！」

「テメエ・・・」

ラグナはそう言うのと剣を構える。やがて光が収まりvは図書館を潰したときのように再び姿が変わった。

「おいで、のび太。抱きしめてあげる」

「うおおおおおおおおおっ！！！！」

咆哮し、ラグナはvに飛び掛る。だが、

ギューン！ギューンギューン！

「ガハアツ！」

勝負は一瞬でついた。ラグナは空中で剣に貫かれ地に落ちてしまう。

「グハツ！て・・・てめえ・・・」

「無駄だよ・・・のび太。のび太はここでニューと一つになるの」

「ふざけんな・・・誰がテメエなんかと・・・」

ヒューン！ズドツ！

とラグナの腹にvの腕が食い込んだ。

「グハツ、ガツ・・・！な・・・！？」

何とか離そうともがくがラグナはvの腕が完全に一体化していることに驚く。

「テメエ・・・何しやが・・・ガ・・・アア」

だんだんとvはラグナの体に入って行き、ついに消えていった。だが、ラグナの様子がおかしい。頭を抑え苦しみだす。

「グアアアアアッ！アガアアアアアアアア！」

「ま・・・まずい！のび太君！自分を見失っちゃダメだ！」

ドラえもんは暴れるラグナを抑えようと必死だった。

「ど・・・どうしたんだ？ラグナ！？」

とマリオが駆け出そうとするが、

「来るんじゃ・・・ねえ！俺に・・・近づくな！死にたくなかったら・・・さっさと逃げる。俺がvに支配される前に・・・ドラえもんが奴を押さえてる間にさっさと逃げるおおおおお！」

「で・・・でも・・・ラグナさんを見捨てるわけには・・・」

ダメだ！とドラえもんは迷っているワルキューレを一喝する。

「僕が押さえている間にさっさと逃げるんだ！じゃないと・・・」

「五月蠅いよ・・・」

「ハッ！うわああああああつ！！！」

ドラえもんの断末魔と共に右腕がだんだんと変わり獣の顔のように変わった。それと同時に瘴気が噴出す。

「ふふふ・・・これでやっと一つになれたねのび太」

だんだんとのび太の片方の目も赤く染まり完全にvにのつとられてしまう。

「グオアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

咆哮、まさにそれは獣そのものの雄叫びであった。

「ふふふ・・・一緒に憎い憎いこの世界を壊そう。ね？のび太」

と嬉しそうに言う。一方のラグナは一心不乱に獣の叫びを続けている。それと共に地面が揺れ天空寺院が崩れようとしている。

「くっ、しょうがない！」

とギルガメスは剣を抜く。

「ギルガメス！？何を！」

とウルキューレはギルガメスの行動に驚く。

「決まっているだろう！あの少女と融合してしまった彼を野放しにすれば世界が崩壊してしまう！そうなる前にラグナ君を斬るしかない！」

「斬るって殺すってことなのか！？」

スタンには信じられないといった顔で言う。ふざけんな！とマリオが叫ぶ。

「他に方法はないのかよ！例えばカイの魔法とかでさ！」

残念だけど・・・出来ないわ、とマリオの提案をカイは残念そうな顔で否定する。

「呪いとかなら何とかなるけど、ああ言う状態を解くなんて不可能に近いわ」

「そんな・・・」

とマリオはショックを受ける。もうラグナを殺すしかないのか・・・誰もがあきらめかけたその時、

「ん？何だあれ！？」

とクロノアが指を刺す。全員が指を刺したほうを見ると上空から何かが降ってきた。それは・・・

「……猫！？」

黄色いフードを被り日本刀を背負った猫だった。その猫は器用に床に着地すると、ラグナを見て言う。

「やれやれ・・・こいつを追ってここまで来てみれば、この様か」

「しゃ・・・喋った！？」

2足歩行出来る上に喋る猫にマリオは驚いた。猫はウルキューレたちに気づくと振り向き答えた。

「ん？君たちは、こいつの友達かね？」

「え？あ、はい！」

呆然としていた一同だったが、ウルキューレがいち早く答えた。

猫は背中から剣を抜き言う。

Ep1-11「力への執着／暴走」(後書き)

突如現れた黄色フードの猫はBLAZBLUEの家庭版をやってる人は解ると思います。

次回はEP1完結です。あとラグナはちゃんと生きてますよ。それでは(owo)ノシ

EP1終章「強くなるために・・・」(前書き)

EP1の最終回になります。ですが・・・小説自体はまだ続けますのでご安心をそれでは始まります。

Ep1 終章「強くなるために・・・」

ラグナが目を開けると視界一杯に天井が映った。どうやらベッドで寝かされているようである。

「ん・・・？知らない天井・・・って何言ってんだ俺は・・・」

と自分で言ったことに突っ込みながらも、ラグナは体を起こし、あたりを見回す。どうやらここは天空寺院の医務室のようだ。

「俺は確か・・・」

『う・・・うん・・・あれ？ここは・・・？』

ドラえもんも目を覚ましたようだ。ふとラグナは自分が意識を失う前の出来事を思い出す。自分はつい先ほどまで天空寺院でアレと戦っていたはずだった。そして歯がたたず負け・・・そして・・・ズキリ・・・

と頭が痛みラグナは頭を抑えた。

（つーか・・・何で生きてんだ？俺）

と思考する。一瞬悪い夢かと思ったが彼の体に巻いてある包帯がそうではないことを証明する。そんなことを考えていると、ドアが開きワルキューレ、スタン、マリオ。それから遅れてギルガメス、カイ、ルーティ、クロノア、ガンツが入ってきた。

「ラグナさん！」

「ラグナあ！」

3人はラグナがおきていることに気づくとダッシュして駆け寄ってきた。

「ラグナさん、目が覚めたんですね！？よかったあ・・・」

とワルキューレは安堵感からか泣き出してしまった。

「おいおい・・・泣くなよ・・・」

と半ば困惑しながらワルキューレをなだめるラグナ。だけどよ、とマリオは言う。

「ワルキューレが泣くのも無理はないと思うぜ。何せ3日も目を覚

まさなかつたからな」

「え？三日あ！そんなに寝てたのか、俺！？」

そう言うのとラグナは近くに畳んである自分の服を手に取り器用に替えるとドアを開け行こうとする。

「ちょ！？何処行くんだよ！」

「決まってるだろうが！大巫女様のところに行つて、あいつをぶつ潰しに行くんだよ！」

とスタンの問いにラグナは大声で答えた。さつさと大巫女様にvの居場所を聞き、そこへ転移してもらい今度こそヤツをぶつ潰す！それこそがラグナの判断であり、すべきことだった。やめときなつて！とスタンはラグナを止める。

「また三日前のようにアイツにやられるのがオチだよ」

「あの時はセワシとの戦いで疲れていただけだ！もう2度もやられるかよ！」

そう言つて大巫女様のところへ出ようとするが・・・、

「やれやれ・・・少しは頭を冷やせ馬鹿弟子」

「は？・・・あでっ！」

といきなり聞きなれぬ声が聞こえたと思つたら後頭部に衝撃が走る。振り向く必要はなかった。どうやら後頭部の衝撃はそいつに蹴られたからだと悟つたからである。案の定、ラグナの頭を蹴つたそれは目の前に立っていた。

「やっぱりアンタが俺を助けてくれたのか・・・じゅうへえ 獣兵衛師匠」

とラグナは獣兵衛と呼ばれたその猫に向かって言う。獣兵衛は無言でラグナに近づき、彼の肩に飛び乗ると拳骨を喰らわせた。

「いてっ！」

「師匠に向かつてアンタとはなんだ、アンタとは。それが師匠に対して言うことか？」

「ああ・・・悪かつて『ゴンっ！』いつてえな！何すんだよ！」

と再び拳骨をされ、怒声をあげるラグナ。ワルキューレも獣兵衛に對して言う。

「ちょっと！何してるんですか！？ラグナさんは怪我人なんですよ！？そんなに何回も殴らないで下さい！」

「こんな馬鹿はこのまま脳みそをぶちまけても良いくらいだ……。いいかのび太。蒼の魔導書の力を自分の力と勘違いするんじゃない」「勘違い……。だ？」

ラグナは訳が分からず獣兵衛に聞く。

「お前の力は何のためにある、あの時お前は俺になんて言った。よく思い出して頭を冷やせ」

「……。俺はいたって頭は冷えてるつもりだ、それじゃあ俺は行くぜ」

そう言っただ巫女様のところへ行こうとするが、ギルガメスに止められる。

「ラグナ君、彼の言うとおり君は熱くなり過ぎている。もう少し頭を冷やしたほうが……」

ギルガメスの言葉を最後まで言わず、ラグナは彼の胸倉をつかんで大声で叫んだ。

「うるせえんだよ、テメエらも師匠もウサギも！どいつもこいつも説教ばかりしやがって！俺は……。俺のために力を使う。その何処が悪い！図書館を全部ぶっ潰すまで止まれねえんだよ！」

ひときしり喚いた後、ラグナはギルガメスから手を離し、膝を地面に着き、拳を地面に打ち付けた。

「ったくよお……。テメエらといい、師匠といい、ウサギといい……。何だっただ俺にかまうんだよ……」

「仲間だからにきまつてるじゃないですか！」

ラグナの言葉にワルキューレがたまらず声をあげ、ラグナに駆け寄る。

「ラグナさんは確かに自己中心的で、口は悪いし、何でこんな男と一緒に旅に出なきゃならないんだろうつて思ったこともありました……。だけど、どんなに口が悪くても……。大切な仲間だから構うんです！それが理由じゃ……。ダメですか？」

そう言つてラグナの体を抱き締めた。そうだが、ラグナ。とマリオもうなずく。

「なんでも一人で解決しようと思うなつて、辛かったら俺たちに言つても良いんだぜ？」

「そうだよ、だって俺達は仲間ともだちじゃないか」

「・・・本当にお前らうぜえんだよ・・・畜生・・・畜生・・・」

ラグナは静かに泣いていた。嬉しかった、差し伸べてくれる仲間がこんなにも大勢いたから・・・

（ああ・・・こんなに泣いたのはドラえもんが未来から戻ってきてから以来だな）

ラグナは泣きながらそんなことを考えていた。

40分後・・・

「お前の憎しみは理解しているつもりだ・・・だからこそ手を差し伸べた。きつとここににいる者たちも一緒だろう。あの女もな・・・」

ラグナが落ち着いたのを確認し獣兵衛はラグナに言った。ラグナは無言だった。そして獣兵衛は虚空を見上げ呟く。

「今はまだ・・・時ではないようだな・・・」

そこへ、大巫女様がやってきた。

「ラグナを22世紀へ送り返す準備が出来ました。いつでも転送可能ですよ」

「え・・・？それってどういうことですか？大巫女様」

と訳が分からず戸惑うワルキューレ。

「そのままの意味だ。ラグナは22世紀で戦う理由というものを探さねばならないのだ。心配するな・・・時が来れば、いずれ運命さだめがお前達を引き合わせてくれる」

ワルキューレの問いに大巫女の代わりに獣兵衛が答えた。

「わりいな、ワルキューレ。師匠はときたま訳のわかんねーこというんだよ。全く日本語喋れつての」

とラグナは苦笑しながら言う。

「悪いが、俺は人間じゃないんでな・・・、まあ詳しく言えばそこ

で頭を冷やせつてことだ。それじゃあ大巫女殿、転移を始めくれ」
「ちよつと待つてくれ、ワルキューレに渡したいものがあるんだ」
とラグナは獣兵衛を静止し、ワルキューレにあるものを渡した。

「これは・・・メガネですか？」

「ん・・・まあな。あんたにそれを持つていて欲しいんだ。形見つて訳じゃねーけどな」

形見と言う言葉を聞いてワルキューレの表情は曇る。

「おいおい・・・辛気くせー顔すんなつて、別に死に行くわけでもねーし。また会えー」のび太君！早くしないと獣兵衛さん、怒つてるよ」わーったよ、うるせえな！それじゃあな」

とドラえもんにせかされラグナは獣兵衛たちの下へ向かう。

天空寺院、転移の間。

ラグナは魔方陣の中心に立つており、大巫女が転移の呪文を唱えている最中だった。そこへ、

「待つてください！」

とワルキューレが入ってくる。

「おい、何やってんだよ。お前まで巻き添えを・・・」すぐ済みます。ちよつとラグナさんに言い残したことがあつて・・・」？」

とワルキューレの言葉にラグナは疑問符を浮かべる。ワルキューレはラグナに近づくと、

「！！？」

そつと唇を重ね合わせ、すぐ離れた。

「餞別です」

そう言うてにつこりと笑い、ラグナから離れ、大巫女に言う。

「それじゃあ、続けてください大巫女様」

大巫女はワルキューレの行動に啞然としていたが再び転移の呪文を唱える。魔方陣と共にラグナは光に包まれ、意識は遠のいていった。そして薄れ行く意識の中、ラグナが見たのは微笑みながら口を動かすワルキューレだった。ラグナは彼女が何を言っているのか理解で

きた。

「待つてる・・・か」

ラグナは少し微笑むと光に包まれ、幻想界から消えていった・・・。
22世紀で自分が戦う理由を探しに行くために・・・。

EP 1 完

TO BE COUNTENED TO THE EP 2・・・

EP1終章「強くなるために・・・」(後書き)

EP1これにて終了です。次回のEP2にご期待ください。
それにしても、何気にラグ×ワルになってるような・・・、まあ細かいことはさておき次回のEP2もよろしく願いします。それで
はー(owo)ノシ

EP2序章「ノエル・ヴァーミリオン」(前書き)

EP2ではヒロインポジションのキャラが主人公です。ラグナ君と愉快な仲間達の登場はEP3まで持ち越しということで、それではBLAZBLUEのび太戦記異聞録〜EP2始まるZ E

EP2序章「ノエル・ヴァーミリオン」

ノエル・ヴァーミリオンは夢を見ていた。様々なイメージが流れる夢だった。

眼鏡をかけた少年、青いタヌキのような生き物、とんがり口の少年、ゴリラが服を着たような少年・・・彼らと一緒に遊んだり、冒険したり・・・一通りのイメージがノエルの目の前を駆け抜ける。

それが一通り終わり、気がつくと思っ白で何も無い空間に一人たらずんでいた。ふと何かの気配を感じ、振り向くと、そこには自分と似た姿―違ふところと言えば彼女はピンクの服を着ていると言ふことである―の少女が立っていた・・・いや、浮かんでいたと言ふのが正しいだろう。

「あなた・・・誰？」

ノエルは少女に向かって問う。

「私はあなた。あの映像はあなたが私だったころの記憶・・・」

「?・・・言っている意味が全然わからないんだけど・・・」

とノエルは困ったような顔で少女を見ながら言う。確かにノエルには過去の記憶が全くない。しかし、少女の言う『自分がこの少女だったころの記憶』の意味が全く分からなかった。少女は、そんな事は気にせず答える。

「いずれ分かる時が来るわ、いずれ・・・ね」

「それってどういうk・・・」

時が来るとはどういうことなのか？とノエルが問おうとするが、視界はフェードアウトし、ノエルの夢はそこで途切れた。

22世紀、ノエルの部屋。

『くくくくくく』

「ん・・・うん。何だったんだろ？あの夢」

ノエルは目覚まし時計の歌で目が覚めた。時計の目覚まし音^{うた}が某世

界の破壊者の持ち歌っぽい感じが気にはいけない。ノエルは目をこすり、先ほどの夢は何だったのか考えながら起き、目覚まし時計のスイッチを押し、時間を見る。

「ってもうこんな時間！？やばい！遅刻するーーーーー！」
そう言くとノエルは急いで服を統制機構の制服に着替え、急いでダッシュした。そう、彼女、ノエルヴァーリオンは統制機構の兵士なのだ。

統制機構本部

実質的には、統制機構は2つの派閥に分かれている。武人として知られるロバート・ギリアム中将が率いる『強硬派』、持前の知恵と話術でいくつもの国を説得し、戦争を回避させたことで有名なテレサ・ライウエル中将率いる『穏健派』である。現在、幻想界などの数多の世界を占領しようと目論んでいる統制機構の連中はこの『強硬派』である。その為、2つの派閥の意見の衝突が起こってしまい、現在2つの派閥は対立しているとのことだ。ちなみに彼女は『穏健派』に所属している。

現在、ノエルはライウエル中将の部屋に呼び出されていた。もちろん任務の依頼である。その任務の依頼とは……

「過去（21世紀）に行って、潜入捜査……ですか？」

「ええ、ヴァーミリオン少尉。あなたにはこれから『森羅』へ入隊し、強硬派の動向を探って欲しいのです」

「し……森羅！？あの英雄『有栖零児』ありす れいじが所属しているあの森羅ですか！？」

「はい、そうですよ」

とノエルの問いにライウエルはうなずく。ノエルは心底びっくりして茫然としている。何故なら森羅といえば、『21世紀最大の大事件』とも呼ばれる『逢魔騒乱事件』の英雄、有栖零児がそこに所属しているからである。ちなみに有栖零児は彼女の憧れの存在なので、潜入捜査とは言え、森羅に入隊するということはノエルにとって願

つてもないことだった。

「もちろん、行きます！行かせて貰いますよ！」

と目をこれでもかと輝かせライウエルの手を握りノエルは言う。あまりの彼女の剣幕にライウエルは少したじろきながらも、ですが。とノエルに釘を刺す。

「貴方を信用してないって訳ではありませんが一応、念のためにもう一人の人と行動してもらいます」

「え？」

「いや、別に貴方を信用してないって訳ではありませんが・・・念のためです。ハザマさん！」

とライウエルはパンパンと、手を叩き名前を呼ぶ。すると、ドアから、黒い服を着て帽子を被った緑色の体をした細目の猫型ロボットが現れた。

「どうも諜報部のハザマです。階級は大尉、以後お見知りおきを・・・ってあれ？中将さん、この人何でないてるんですか？」

とハザマは頬を掻きながら、ショックでorz↑こんな感じになっているノエルを指差す。ライウエルは苦笑しながら、

「サア？」

と答えた。一方のノエルはと言うと・・・、

「あうう・・・私と有栖さんの二人つきり計画が~~~~~」
泣いていた。

それから十分後、ノエルとハザマは転送室に居た。

「それでは転送を始めます。ノエル少尉、ハザマ大尉。幸運を」

とライウエルはにつこりと笑い、オペレーターに指示を下す。

「それでは転移装置を作動してください」

オペレーターはそう言うと言装置を作動させる。それと同時に独特の作動音が鳴り響き転移が始まった。

（21世紀に森羅があゝ、残念ながら私一人で森羅に入隊は出来なかったけど・・・楽しみだなあ・・・よし頑張るぞ）

とノエルはまだ見ぬ21世紀に思いをはせていた。

この時、ノエルはまだ知らなかった・・・自分の体に秘められた『秘密』と『宿命』を・・・それらは一体何なのか？謎のまま物語は動き出す。

BLAZBLUEのび太戦記異聞録 EP2「蘇りし宿命」
TO BE CONTINUED・・・

EP2序章「ノエル・ヴァーミリオン」(後書き)

・・・何となく今更思うけど、ノエルってこんなキャラじゃなかったような気がする・・・。ちなみにノエルの目覚まし時計の歌はデイクイドファンならニヤリと来るだろうと思います。

次回は、熱血正義の忍者と、龍を従えし赤い仮面の戦士、サラリーマンヒーローとアイドルヒーローが登場します。EP1-1「超変身! (仮称)」をお楽しみに。

それでは (owo) ノシ

EP2・1「超変身 前編」(前書き)

はじめはまとめてこの話を書こうと思ったのですが、私の体力が持たないので前後編にしました。すこしグダグダのような気がします。それでは、どうぞ。

EP 2 - 1 「超変身 前編」

ノエル達が森羅へと向かっている最中・・・

21世紀の物質界 ナムコシアター

そこでは、ワンダーモモによるバトルミュージカルが前半のフィナーレを迎えていた。

「みなさん、バトルミュージカル楽しんでもらえましたか？」

とミュージカルの主役でもあるワンダーモモは客席に向かって問いかける。

「「「もっちょろーん！」」」

と客席からそんな声と共に拍手とが巻き起こっていた。

「ありがとうございます、それじゃあ後半のほうもがんばりますので応援よろしくおねがいします。それでは後ほどお会いしましょう」

そのモモの言葉と同時に幕が下りたのだった。

ナムコシアター会場前で2人の青年が居た。

「いや、楽しかったな。ワンダーモモのバトルミュージカル。こりゃ後半も楽しみだなあ」

と青いジャケットを羽織った青年は感想を述べる。

「そうでござるが・・・真司殿。拙者達の目的忘れてはござらぬか？」

とオタク風の青年は青年、真司を諭すように言う。

「ああ、そうだったね。今回は遊びに来たんじゃなかったんだ。っていうか一番楽しんだのってバングじゃかったっけ？『そこだ！モモたん！がんばれ！モモたん！』って叫びながらさ」

と真司はメガネをかけたオタク風の青年・・・バングを見ながらジト目で言う。

「そうでござった・・・まあ細かいことは無しでござるよ。そう言えば、真司殿が取材している2年前の事件とワンダーモモ・・・

いや神田桃殿かんだももがどういう関連があるのかについて知りたいのでござ
るが・・・詳しく聞かせてもらえぬか？拙者・・・新入社員なも
で・・・」

と顔を真っ赤にして反論した後、バングは真司にその2年前の事件
とワンダーモモの関係を問う。

「ああ、そうそうたしか・・・そのときには様々な謎の怪奇現象が
起こって突如浮遊大陸が現れたんだ。その時、神田桃かのじよの姿はマネー
ジャーの姿も確認されていなかった。それにアマゾーナって人も失
踪していたって訳さ。これは何かあるってのが大久保編集長の読み
なんだよな」

「それで2年前何があったのかを桃殿に聞きに行くわけござるな」
「まあそう言うことさ」

と真司とバングが会話をしていると、

「おい、楽屋行って桃ちゃんのサイン貰ってこようぜ！」

と後ろのほうから声が聞こえたので振り向くと彼女のファンらしき
人物3人が話をしていた。どうやら楽屋へ行き桃にサインを貰って
こようとの話である。

「んじゃあ俺は一緒に写真とってもらおう！」

とファンBが興奮したような状態で言う。

「なら俺は握手してもらおう！」

とファンCも興奮した状態で言う。

ファンAはよっしゃ！と言うと

「それじゃあ早く行こうぜ！モモたん・・・（#、ム、）ハアハア・
・・・」

とファンのB、Cをつれてエントランスの右手にある扉のほうへと
走っていった。何気に気持ち悪い息遣いが聞こえたが気にしてはい
けない。

「どうやらあっちが楽屋のほうでござるな」

とバングはファンが入っていった右手の扉のほうを見て言う。

「そうだな。ダメもとで取材してみよう。行くぞバング」

そう言うと2人はファン達の後を追い右手の扉に入ってしまった。扉を開けると、そこには先ほどのファンの3人が神田桃の楽屋に続いているであろうドアの前に立っていた。

「やっべー緊張してきたぜ」

とファンAが手をこすりながら言う。

「してもらえるかどうかってのが一番怖いよね」

とファンBが服の乱れを整えながら言う。

「大丈夫だよ、そのくらいのファンサービス」

とファンCは平然と答えた。すると、

「「じゃあお前から入れよ」」

とファンA、Bに突っ込まれる。

「ええっ！それはちよつと・・・」

とファンCはしどろもどろに答えた。ふと、

「やっべ、トイレ行きたくなってきた・・・」

とファンBは尿意を訴える。

「実は・・・俺もなんだよ」

とファンAも股間を押さえながら言う。どうやら全員、用を足したくてたまらないらしい。そんなわけでファン3人はトイレに行つてそれからモモのサインを貰うことにしたため、結果的に真司とバングが一番乗りをすることとなった。

「・・・なあバング・・・」

「なんでござるか？」

神田桃の楽屋の前に立ち真司はバングに言う。

「やっぱり楽屋の前に立つのって緊張するよな」

「そうでござるな・・・拙者なんか足がこんなに震えているでござるよ」

とバングは自分の足を指差して言う。確かにガクガクブルブルと小刻みに震えていた。結局最初に入るのは真司と言うことになり、ドアを開けようとすると・・・

キイイイイイイイン・・・

と耳障りな音が聞こえ、真司は音のなるほうへ目を向ける。

「この気配は・・・まさか！」

「・・・？何でござるか？この耳障りな音は？」

と訳が分からず狼狽するバング。とそこへ、

「「「ウワアアアアアアアアアアアアッ！！！！」」」

とトイレのほうから先ほどのファンの３人組の悲鳴が聞こえた。

「しまった！彼らが狙いか！」

そう言うとき真司はトイレのほうへ駆け出していった。

「ちよっ！真司殿！？取材は・・・」

とバングは止めようとするが既に真司はトイレのほうへ入っていた。

トイレ

真司がたどり着いた頃にはすでに例の３人組の姿はおらず、床には彼らのものであるう血痕が落ちていた。

「しまった！遅かったか・・・」

と真司はその血痕を見て唇をかみ締める。

「くっそお！絶対に許さないからな！」

そう言うとき真司はカードケースを取り出し鏡の前にかざす。すると

真司の腰にベルトのようなものが装着され、そして・・・

「変身！」

叫びながら右手を斜め上に構え、ケースをベルトに装着すると真司の体が仮面をつけた赤い戦士へと変わる。そう、これが真司の別の姿・・・仮面ライダー龍騎なのだ。

「よっしゃあ！」

そう言うとき龍騎は鏡へとダイブし、吸い込まれるように鏡の中へ入っていった。鏡の中には同じ空間が広がっていた。一つだけ違うのは文字が逆になっていることだけである。これが、鏡の中の世界・・・ミラーワールドである。

「まだ近くにいるはずだ・・・絶対に見つけてやるからな！」

そう言うのと龍騎は走り出した。トイレのドアから出て、エントランスへと向かうとそこには槍を持ったガゼル型のモンスター『ギガゼール』が先ほどの3人を捕食している最中だった。

「こんな場所にも現れやがって！」

龍騎の怒鳴り声に反応してギガゼールが振り向いた。口の周りには血がこびりついておりこのモンスターの恐ろしさを強調していた。だが何回もミラーワールドで戦っている龍騎にはそう言うことは関係なかった。

「取材できなかったら、お前のせいだからな！うおおっ！」

そう言うのと龍騎は拳を固めギガゼールへと向かっていく。・・・どう見ても八つ当たりです。ありがとうございまs(ry

決着はすぐについた。ラッシュでギガゼールを追い詰め右ストレートで吹っ飛ばす。そして一枚のカードを引き、左腕の『ドラグバイザー』に差し込んだ。

『ファイナルベント！』

電子音が響き何処からともなく龍騎の契約モンスター『ドラグレッダー』が現れ、龍騎の周りを飛ぶ。それと同時に龍騎も気合を溜め、ポーズを決める、そして・・・

「ハッ！」

跳躍。それと同時にドラグレッダーも飛翔する。龍騎は空中で体操選手も顔負けな回転を決めライダーキックの体勢に入るとドラグレッダーが火を吐いた。

「おりゃあああああああああああああ！！！」

その反動で龍騎はギガゼールにライダーキックを決めた。キックは狙い変わらずギガゼールに直撃する。

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

ギガゼールは断末魔の悲鳴をあげ、爆発した。

「いよっしゃあ！」

とガッツポーズを決め歓喜の雄たけびを上げる龍騎。だが、所々に先ほどのミラーモンスターが現れる前兆の音が何度も響く。

「な、何だ？今の感覚は・・・？」

と龍騎は狼狽する。

（嫌な予感がする・・・、とにかくミラーワールドからようつ）
そう思うと龍騎はミラーワールドから脱出した。

・・・その頃、神田桃の楽屋では、

神田桃とメガネをはめたサラリーマンの男がなにやら話をしていた。
「いや、本当にいつになくこのミュージカルは面白いですね。毎回ミュージカルがあるたびに招待状の券を贈っていただいて子供達も大喜びですよ」

とサラリーマンの男は桃に笑いながら言う。どうやら男はこのミュージカルを何度も見ているようだ。いいんですよ、と桃は笑顔で言う。

「中村さんには色々とお世話になりましたからこれくらいの事は当然です」

そう言えば・・・と中村は懐かしそうに言う。

「・・・あれからもう2年ですか。大変な戦いでしたが思い返してみると楽しいこともありましたね」

「みんな・・・元気ですかね。同窓会みたいに皆で集まったりとかできないでしょうか？」

と桃も懐かしそうに言う。実際、2度と会うことはないでしょうね。と中村は言う。

「実際、交わってはならない世界なのですから」

中村の言葉に桃は残念そうに言う。

「そうですね・・・」

長い沈黙・・・それを打ち破ったのは中村であった。

「でも、もしかしたら！なぐんて事もあるかもしれませんよね」

「そうですね」

と中村と桃は笑う。すると・・・アナウンスが流れた。

『まもなくバトルミュージカル第二部が始まりますのですみやかに

会場の席にお戻りください」

そう言うことで中村は話を中断し、楽屋を出て行った。

楽屋から出て行く最中、携帯になる。どうやら会社の部長からである。それと同時に尿意が催し、トイレに入った。その時・・・中村は気づいていなかった・・・天井から統制機構の兵士が降りてくることを。

「やれやれ・・・部長も厳しいことを言いますねえ」

話が終わり、中村はトイレから出てきた。どうやら話が終わったらしい。

「おかげで途中からの観覧しか出来なくなりましたよ・・・ま、サラリーマンですから仕方ありませんね」

と開き直ると、会場へ向かうためにエントランスへ向かった。途中で天井が堕ちていることに気づいたが・・・「工事中なのでしょうか？」とスルーした。

エントランスへと入り、会場に入ろうとドアを開けようとしたとき、「おや？」

ふと警備員が倒れているのが目に入る。

「大丈夫ですか!？」

と中村は走り警備員を抱き起こすが、警備員は頭部を打ち抜かれ即死であった。

「死んでいる・・・これは事件の匂いがします。向こうの通路に行ってみましょう」

そう言うとき中村は桃の楽屋がある扉とは反対の扉へ向かった。

その通路にはナイフでのどを掻く切られたり、ショットガンで頭を吹っ飛ばされて死んでいる警備員の死体がゴロゴロと転がっていた。とりあえず中村は近くにあったドアを開けようとするがあかなかった。仕方がないのでもう一つあったドアを開け、中に入る。そこは倉庫であり、2人の統制機構兵がいた。見つかる危険ないので中村は近くのコンテナに隠れ、話を聞いていた。

「あーあ、たった一人の小娘を誘拐するのに何でこんな手間をかけるなきゃならないんだ？」

（誘拐！？）

中村は統制機構兵の話聞き、驚愕の表情を浮かべた。さあな、ともう一人の統制機構兵が言う。

「何でもどっかの悪魔を完全復活させるための生贄らしいぜ。その悪魔とやらをどう扱うのかわからないが、ギリアム様の考えることだ、何の問題はないさ」

その言葉に中村はある組織を思い出す。

（なるほど・・・彼らが今、噂になっている世界虚空情報統制機構という奴等ですか・・・しかし、何故彼らが桃さんの持つ超変身物質のことを知っているのでしょうか）

「それで時間がきたら一番右にあるボタンを押して会場を暗闇にして捕獲するんだっけ？でもさ・・・俺も奇襲のほうに行きたかったなあ・・・」

「何で？」

統制機構兵Bの問いにAは

「そしたらドサクサに紛れてあんな事やこんな事を出来たかもしれないのによお、ウヘヘヘ・・・」

と鼻の下を伸ばしながら答える。Bはため息をつく

「だが、世界的人気アイドルを人質に取れば何かと便利かもしれないな」

そんなやり取りを聞き、中村はある決意をした。

（これは・・・大変なことになりましたね。また戦わねばならないときが来たようです）

そう考えると、中村は統制機構兵の目の前に立つ。

「「な・・・何だ貴様！？」」

と統制機構兵は驚き中村を見る。

「いやあ〜どうも、私、目浦火災海上保険株式会社の中村等なかむらひとしと申します」

「保険会社？」

「保険会社が何のようだ！？とつとと帰れ！」

そう言いながら兵士は銃を突きつける。

「そうは行きませんよ、あなた方、悪の組織は何のためにあるかご存知ですか？」

「誰が悪の組織だ！それに何の為にわかっていわれてもなあ・・・！」

そんなことは簡単ですよ、と中村、

「正義のヒーローに成敗されることです！」

そう言う中村はポーズを構える。

「はああああ・・・、変身！！！」

まばゆい輝きと共に中村の姿は変わっていた。赤いマフラーにカラフルなアーマーを着た戦士となっていた。

「な・・・何だコイツ！？」

その戦士を見て兵士Aは狼狽する。

「・・・こいつは確か・・・」

とBは腕時計から辞書のようなものを出しそれを見る。

「あつ！あつた！こいつはドキュメント028ベラボーマンだ！過去に悪の天才科学者爆田博士が引き起こした新田四丁目事件を解決した特殊生命体、その後全く姿を見せなかったが2年前の戦いで確認されている」

そのことを聞き戦士、ベラボーマンは兵士Bに問う。

「2年前の？あなた方はあの事件のことを知っているのですか？」

だがベラボーマンの問いには答えず、AとBは向き直る。

「確かベラボーマンって危険度はCだったよな。と言うことはただの雑魚か・・・ヤロオ！びびらせやがって！死ねえ！」

と銃を構えベラボーマンを射殺しようとするが、

「とう！」

バキィ！

「グハァ！」

「ベラボォー！」

ドゴオ！

「ギャバァ！」

ベラボーマンの伸び縮みする腕や足で殴られ、蹴られ地面を転がるのだった。

「私の勝ちのようですね。何故あなた方があの事件を知っているのかは奥にいるあなた方の上司に聞くとしましょう」

とベラボーマンは近くに倒れている統制機構の兵士に言う。

「くくく・・・残念だったなヒーロー」

と兵士は笑っていた。

「何がおかしいのですか？」

とベラボーマンは何故兵士が笑っているのかを問う。

「我々にもし万が一のことがあった場合は作戦Bへと移るのだ」

「作戦B？なんですかそれは・・・」

「神田桃・・・いや、ワンダーモモだったか・・・彼女も君と同じメナスの部類と入るのだ。もしも場合は脅威になりかねん・・・だから作戦Bは彼女の誘拐ではなく暗殺なのだ」

「なんですって！？」

兵士の告発にベラボーマンは驚愕の表情を浮かべる。フッフ・・・と兵士は不適に笑いながら続ける。

「もうライトを消す時刻は過ぎている。襲撃部隊もとくに認識して作戦Bへ移るだろう。異世界のことを知っているのは我々以外に貴様らメナスのみ・・・、ハハハ・・・ヒーローさんよお・・・このピンチを乗り越えられるか・・・な」

そう言うのと兵士は舌を噛み切り自害した。

「こうして入られない・・・早く行かねば！」

そう言うのとベラボーマンは急いで走り突き当りのドアを開けた。ドアは天井裏に通じており、そこでは作戦Bが執り行われようとしていた。しかも兵士の数が多すぎる。

「くっ・・・これではあの狙撃しようとしている兵士にたどり着くのは難しそうですね・・・こうなったら玉砕覚悟で突入しましょう

！」

そう言うとベラボーマンはドアを開け、突入する。案の定敵が銃を構えベラボーマンを迎え撃とうとする。だが、兵士達はその引き金を引くことはなかった。

ヒュンヒュンヒュンヒュン！

ドドドド！！！！

「……うぎゃああああああああっ……」

と何処からともなくクナイが降り注ぎそれは狙い変わらず、兵士達に刺さる。

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！悪を倒せと拙者を呼ぶッ！」

と何処からともなく声が聞こえる。すると兵士の一人が「あそこだ！」と指をさし叫んだ。そこには赤いマフラーを纏い緑の忍装束をまとって背中にてかい釘を背負った青年が立っている。

「拙者は正義の忍者！シシガミ・バング！只今、見参！！！そのお方、助太刀いたすぞ！」

そう言うとはベラボーマンに駆け寄った。

「あなたは？」

とベラボーマンはバングに問いかける。

「拙者の名は、シシガミ・バング！表の顔はOREの新人記者、そして裏の顔は悪を成敗する正義の忍者でござる。何故ココにきたのかはいきなり消えてしまった先輩の真司殿を探していたら彼奴等を見つけ後を追ったのでござるよ！」

「そ……そうですか……（何気に暑苦しい人ですね）」

「さて、後々の話はこやつ等を成敗してからにしましょうぞ！」

そんなわけでバングと手を組み統制機構の兵士と戦うこととなった。バングの参入により、統制機構陣は一気に総崩れし、ついに隊長の元にたどり着く。結局、隊長もたった一人ではたいしたことはなくベラボーマンとバングの連携により倒された。

「グハッ……馬鹿な！？」

と倒れた隊長は信じられないとばかりにバングとベラボーマンを見

る。

「ふっ、このバングの熱き魂がある限り！悪は栄えんでござるよ！」
そうですとも、とベラボーマンも同意する。

「悪は必ず滅びるのです！」

「くくく．．．貴様らがヒーロー面するのも今のうちだ。統制機構^{わんわん}
を甘く見たな」

「何？」

と隊長の言葉にバングは眉をひそめる。

「作戦が失敗しても次の最終手段が残されている」

「最終手段．．．まさか！！？」

とベラボーマンの表情が驚愕に変わる。

「ふふふ．．．そのまさかだ」

そう言うのと無線を取り出し、連絡する。

「こちら襲撃部隊、作戦は失敗だ。これより強硬手段に入る．．．
観客もろとも皆殺しにしろ！」

「な！！？そんなことはさせないでござるよ！」

とバングは隊長を取り押さえようと身構えるが．．．

「．．．どうした？応答せよ！」

と隊長は呼びかけている。するとノイズで聞き取りづらいが無線から
応答が来る。

『．．．こ、こちら突撃部隊．．．か、かが．．．の中か．．．謎．．．
共が．．．現れ．．．』

「何だつて聞こえないぞ！？部隊はどうした？！」

『．．．ぶた．．．は全滅．．．私も何が．．．だか解りません！
はわあっ！？ば．．．バケモノ．．．くるな．．．来るなアアアア
アアアアアア！！！！』

グチャブチブチブチ！と肉を噛み切る音が聞こえ、そして．．．

『ギヤアアアアアアアア！』

断末魔と同時に静けさが訪れた。

「一体何が起こっているんだ？」

と隊長は突然のことに呆然とする。そこへ・・・

「どうかしたのですか？」

とベラボーマンが声をかける。

「待機していた部隊が全滅したんだ。バケモノがどうか残して・・・」

「バケモノ？」

とベラボーマンとバングは顔を見合わせる。とそこへ・・・
キイイイイイイン・・・キイイイイイイイン・・・
と耳障りな音が鳴り響く。

「な・・・何だよこれ・・・何かいるのが解るう！！！」

と恐怖で顔を引きつらせながら隊長が叫んだ。

「一体・・・何が起きているというのですか・・・？」

とベラボーマンは何が何だかわからず啞然としていた。

果たして、謎のバケモノの正体は？そして桃の運命はいかに！？
まて次回！！！！

TO BE CONTINUED・・・

EP2-1「超変身 前編」(後書き)

今思い返してみると、結構知りきれトンボのような気が・・・。

次回は桃ちゃんが変身します。EP2-2「超変身 後編」お楽しみに！

え？そんなことよりノエル出せ？すいません、EP2-3ぐらいで出します。

それでは(owo)ノシ

EP2-2「超変身 後編」(前書き)

遅れてすみませんでした。今回は後編です。また、ノエルも少し出てきます。

ワンダーモモ「BLAZBLUE」のび太戦記異聞録―始まります」

EP2-2「超変身 後編」

キイイイイイイイイイイン・・・
キイイイイイイイイイイイン・・・

会場内に、響き渡る音。その音にあるものは怯え、あるものは不思議がりながら辺りを見回す。それは、桃や、ショーの俳優でもあるクラブキャンサーも同じであった。

「な・・・何この音?!」

と桃はあたりを見回しながら、クラブキャンサーに聞く。

「さ、さあ・・・こんなことは台本にも出てきてませんでしたから・

・・・」

クラブキャンサーもうろたえているようだ。そこへ突如、ギガゼール2匹が現れる。

観客は口々に「何だあれ!？」と言っている。

「ちよつと、勝手なまねしちゃ困るよ。ショーが台無しじゃないか!」

とクラブキャンサーはギガゼールに詰め寄る。だが、その行動は間違っていた。

ヒュン!ドシュウ!!!

ギガゼールは槍をクラブキャンサーの頭に突き刺した。叫び声も上げられずクラブキャンサーは絶命し、倒れる。それにギガゼールは覆いかぶさり、クラブキャンサーを食べ始めた。

「キヤアアアアアアアアア!」

「人殺しいいひいひいひいひい!」

それを見た観客は口々に叫び声を上げ、ギガゼールは血にまみれた顔で咆哮を上げる。

「まさか、この人たち本物の・・・」

目の前で殺人が行われ、桃は彼らが本物の怪物であると悟る。だが、そう悟った所で人間である桃にはどうすることも出来ず、ギガゼー

ルたちに詰め寄られてしまう。

そこへ、

「チエイストオオオオオオオオ!!!!」

バキィ!

上からバングが飛び降り、ギガゼール達を蹴り飛ばした。続けて、

「桃さん!」

とベラボーマンも降りてくる。

「ベラボーさん!それと・・・誰?」

「良くぞ聞いてくれた!拙者は正義の忍者シシガミ・バング!この方はバングさんです。先ほど上で、ちよいと知り合いました」によるーん・・・」

桃に名を聞かれ、バングは名乗ろうとするが、ベラボーマンに遮られ、うなだれる。なんとなくその姿が、ちゆるやさんっぽいのは気にしてはいけない。

「そんなことよりもこの怪物たちは本物です!早く観客の皆さんを避難させてください!」

「それと怪物はこの2体だけではないでござる!」

「え!?はい!わかりました」

ベラボーマンとバングの指摘により、桃はうなずくと客席のほうに呼びかける。

「観客の皆さん!これはアトラクションではありません!早く外に避難してください!」

その呼びかけが、引き金となり、観客は一斉に逃げ出す。それと同時に真司が客席に姿を現した。

「気配はこっちか!・・・ってアレは仮面ライダー!?!とバング!何やってんだアイツ!」

とステージのほうへ向かおうとするが、逃げてきた観客に押されてしまう。

「ちょ、ちょっと押さないで!どいてください!いて!いててっ!」
結局、ステージに行けないまま、真司は退場となった。(笑)そん

なやり取りを桃達は露知らず、誰もいなくなった客席にミラーモンスターがぞろぞろと現れる。

「ぞろぞろと出てきましたね。私はバング君と共に客席の敵を片付けます」

「なっ！？正気でござるか、ベラボー殿！」

「ちよ、ちよっと待ってください！」

ベラボーの言葉に、バングと桃が反論する。

「私、2年も変身して戦ってないんです。それにあの時はずっとベラボーさんと一緒に戦ってました」

桃のセリフに、「え？」とバングは意外そうな顔をしていたが、気にせず桃は続ける。

「無理ですよ・・・私一人でなんて・・・」

「何を言ってるのですか」

弱気な桃にベラボーが声をかける。

「今までずっと一人で戦ってきたではないですか」

「でも、それはお芝居での話だし・・・」

「それが・・・本来のワンダーモモじゃないですか。もう一度思い出してください。超変身物質は何のためにあるのかを」

ベラボーのセリフに桃はしばらく黙った後、覚悟を決める。

「わかりました。やってみます！」

ベラボーは桃の決意を聞き、微笑むと、バングと共にミラーモンスターの真っ只中にダイブした。

桃はその後ろ姿を見て、もう一度ベラボーの言葉を思い返した。

『もう一度思い出して下さい。超変身物質は何の為にあるのかを』

「私は・・・守るべき者の為に強くありたい・・・」

そう呟き、両腕をクロスさせ、叫ぶ。

「へんしゅん！」

刹那、まばゆい光がほとばしる。やがて、光が収まり、桃の姿はワンダーモモの姿へと変わる。

「さあ！行きますよ！」

『ヒギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』
赤い、龍のようなミラーモンスターが火を吹いて、ミラーモンスター達を一掃する。

「何でござるか！？あれは！」

「さ・・・さあ、新たなモンスターですかね」

とバングとベラボーがうるたえていると、

「そいつはドラグレッダー。俺の契約モンスターだ」

と声がし、振り向くと、そこには真司が立っていた。

「真司殿！？」

「知り合いですか？」

「まあ、そうでござる。真司殿は拙者の先輩なんでござる」

「そうですか・・・ところで真司さん。契約モンスターとは？」

とベラボーの問いに真司は何言つてんだ？と言いたげに答える。

「とぼけんなって。その格好ちよつと変つてるけど・・・あんたも

仮面ライダーなんだろう？」

「仮面ライダー？」

ベラボーは頭に疑問符を浮かべ、聞き返す。

「神田桃さんも仮面ライダーだったのはちよつと驚いたけど・・・」

「ちよ、ちよつと待つて下さい！私達はその仮面ライダーというも

のじゃありませんよ！」

ワンダーモモの言葉にえっ！と真司は驚く。

「だって変身したじゃん！」

「ちよつと勘違いしているみたいですね、真司さん。今の話からす

ると、あなたはその仮面ライダーと呼ばれる人物なのですか？」

「え？えーと・・・そういうことになるよね」

汗を垂らしながら真司は答えた。それじゃあ、とワンダーモモは真

司に聞く。

「あなたも私たちのように変身できるんですか？」

真司はうなずいた。ベラボーもふむ、とうなずく。

「よくわかりませんが、真司さん。あなたもあの怪物と戦う力を持

っているということですね？なら、私達と共に闘ってくれませんか？」

ベラボーの言葉に真司はうなずく。

「俺は、そいつら専門だから言われなくても戦うよ」

「それじゃあ早く見せて下さい」

ワンダーモモに言われて、一瞬真司は「？」となったが、

「ああ、変身ね。はいはい」

そう言って真司はカードケースを取り出し、ベルトを出現させ、

「変身！」

ケースをバツクルに装着し、龍騎へと変身した。

「ぬおっ！真司殿かつこいいでござる！」

「わあゝ。かつこいいですよ」

とバングとワンダーモモは大はしゃぎだ。

「そ・・・そうかな？」

龍騎は照れながら言う。ああ、そういえば。とベラボーマンが思い出したように言う。

「自己紹介がまだでした。私は中村等。もうひとつの名はベラボーマンです」

「バングが紹介したから、名前はわかると思うけど、俺は城戸真司。ライダーでの名前は仮面ライダー龍騎だ」

とベラボーと龍騎はお互いに握手をする。すると・・・
キィィィィン・・・

と耳障りな音が聞こえてきた。どうやら外からである。外に出てみると、それは地獄絵図だった。ところどころに飛び散る血・・・燃え盛る炎。埋め尽くす赤、赤、赤。

「大変！このまま市街地で暴れられたら市民の皆さんが・・・」

ワンダーモモのセリフに、ベラボーはうなずく。

「これは急いだ方がいいですね」

ふとバングは龍騎の様子がおかしいことに気づく。

「どうかしたんでござるか？真司殿？」

「おかしい・・・普通なら奴らは人を襲う時、必ずミラーワールドに引きずり込むはずなのに」

「みラーわーるど？」

ワンダーモモは知らない単語に疑問符を頭に浮かべる。

「鏡の中の世界のことさ。ミラーモンスターはそこに住む住人つてとこかな。だけど、やつらは現実世界では長時間滞在できないんだ。逆に俺達もミラーワールドに入ると数秒で死んでしまう。だけど、仮面ライダーのみミラーワールドに長時間滞在できるんだ」

「なるほど・・・」

と納得するバングとワンダーモモ。そこへベラボーが質問をする。

「それでは、君のような仮面ライダーはそのミラーモンスターを倒すための力という訳ですか？」

「まあ、そんなところかな・・・」

そう言つて、龍騎は考え込んだ表情になり、ベラボーに向き直る。

「とにかく今の状況はおかしいってことですよ」

「それにしてもこれだけの数を相手する・・・となると」

とあたりをうろついているミラーモンスターを見てワンダーモモが言う。

「きつと、敵の頭がいるはず！それを打ち倒しさえすれば、この事態は解決だと思うでござる！」

とバングが切り出し、それにベラボーもうなずく。こうして、ミラーモンスターから人々を助けながら司令塔を探すことにした。

それから、司令塔の搜索開始から1、2時間かして助けた人間に巨大なミラーモンスターを見かけたとの事でそれが司令塔だと悟る。そしてその場所を突き止めた。

「どうやらこのモンスターが親玉のようですね」

そのモンスターは蜘蛛型のミラーモンスター『デイスパイダー』であつた。

「手ごわそうですね・・・うー・・・緊張してきました」

その巨大なボディにワンダーモモはたじろく。

「っ！皆来るぞ！」

『ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

デイスパイダーが咆哮を上げる。すると配下のギガゼールがぞろぞろと現れた。

『ソードベント』

龍騎はドラグソードを手に取るとデイスパイダーに斬りかかる。一方のバングたちは配下のギガゼールと蹴散らす。

やがて、ギガゼール達を全て倒し、ある程度デイスパイダーにダメージを与えると、変化が起きた。

『グオオオオオオオオッ！』

デイスパイダーの雄叫びと共に、頭の部分がバクリと割れ、そこから人型の上半身が現れた。

「なんと面妖な・・・人型のモンスターが生えてきたでござる」とバングが気味悪そうに言う。

「半人半獣型に進化したのか・・・少しやり辛そうだな」

「でもきつと新しく生えてきたほうを潰せばこのモンスターを倒せるかもしれません。おなじみのパターンですよ」

ワンダーモモの言葉にベラボーは成る程・・・と言う。

「ではあの人型の部分を狙いましょう」

だが、人型の部分が生えた代わりにスピードがさらに増す。驚異的なスピードに翻弄される4人。だが、この状況をバングが変えた。

「チエストオ！」

背中背負っている五十五寸釘をデイスパイダーの人型ボディに突き刺した。

『ヒギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

緑色の血がバングを塗らす。

「うおおおおおおおおおおおおおっ！」

そのまま、近くにあった建物まで持って行き、突き刺さった釘を打ち付けた。

「今でござる！」

「バング、サンキュー！行くぜ皆！」

バングに礼をいい、ファイナルベントのカードをドラグバイザーに装填させる。

『ファイナルベント！』

「解りました！ハアアアアアアッ！」

「ワンダアアアアアアアアアア．．．」

ベラボーとワンダーモモもうなずき、必殺技の準備を始めた。

「ドリヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

「ベラボースペシャル！」

「タイフウウウウウウウウウウー！！！」

龍騎のドラゴンライダーキック、ベラボーのベラボースペシャル、ワンダーモモのワンダータイフーンがデイスパイダーに炸裂する。

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！』
デイスパイダーは断末魔の悲鳴をあげ、爆発した。

戦いの後、中村は天井で統制機構の兵士と戦ったこと．．．そして、彼らは2年前の戦いについて知っており、その2年前の戦いに出ていた自分達を狙っていることを話した。

そして、中村はバング、桃、真司と共にかつて2年前に一緒に戦った人物『有栖零児』の協力を得るべく、動き出すこととなった。

一方．．．

「ついたみたいですわね．．．」

とある街中にノエル達は転移する。

「さてと．．．21世紀に着いたことだし．．．早速、森羅へ行きましょうか．．．あれ？ハザマさん？」

と森羅へ行こうとハザマを誘おうとするが、ハザマの様子がおかしい。ハザマはうつむいていた顔をガッツ！と上げる。その顔は青ざめており、冷や汗がダラダラとあふれている。

「えー、ノエル少尉．．．。落ち着いて聞いてくださいわね．．．。ここ、どうやら日本じゃないみたいです。アメリカですわね」

「何？」

ハザマの言葉にノエルの表情が凍りつく。

「……アハハハハ」

「転移ミスですね・・・」

しばらく、無言……そして、

[illegible]

ノエルの絶叫が響いた。はたしてノエルは森羅へ行けるのか？それは次回の講釈にて……

TO BE COUNTED . . .

EP2-2「超変身 後編」(後書き)

いかがだったでしょうか？後半部分グダグダですみません・・・。
次回はEP2-3「ガンサバイバー」・・・これも多分前・後編構成になると思いますが温かい目をお願いします。
それでは(owo)ノシ

EP2・3「ガンサバイバー 前編」(前書き)

今回も前編、後編に分けてお送りしたいと思います。

相変わらずのグダグダっぷりですが、温かい目で見守ってください。
ノエル「BLAZBLUE」のび太戦記異聞録―始まります―

EP2-3「ガンサバイバー 前編」

ノエル達が間違つてアメリカに転移した同時刻。

U・S・STRATCOM本部局、

その司令室の扉の手前で、一人の男が居た。目の前には2人の警備兵があり、名前と所属部隊を聞いてくる。男は口を開き、名前と所属部隊名を言った。

「U・S・STRATCOM所属、対アンブレラ追撃調査チーム工
作員、ブルース・マツギヤヴァンだ。司令官が急遽出頭せよとの命
令でここまで来た」

男、ブルースは一通り言った後、警備兵はうなずき、

「よし、通つて良いぞ」

と言う。それを見たブルースは先ほどまでの厳格な表情を崩し、

「なあ、こういうの止めにしないか？俺ももうベテランの域に達して
るんだし・・・っていうかお前等だつて顔見りやわかるだろ？」
と苦笑しながら、言う。

「ま、そうだが規則は規則なんだな」

と警備兵の一人が苦虫を噛み潰したように顔をしかめる。

「俺達はこれで家族等を養つてるからな。人助けと思つて我慢して
くれ」

それを聞き、ブルースはちえつ。と舌打ちをし、部屋に入った。そこにはとても若い男性が居た。どうやら、胸にある身分証明書を見る限りこの男が司令官なのだろう。

「おお、よく来たなブルース」

「せっかくの休日なのに何の用だい？」

「まあ、そう言うな。実は先ほど軍本部の緊急の伝達が来てな。アンブレラ崩壊後、その資料と例のウィルスを運んだ輸送機が謎の武装集団に襲われたらしい」

「何だと!？」

それを聞いたブルースの表情が陰しくなり続ける。

「その武装集団つてのはもしかして、世界虚空情報統制機構とか言う奴等か!？」

ブルースの言葉に司令官はうなづく。

「乗組員は全員死亡。運ばれていた資料、そしてB・O・Wも奪われたとの報告だ。もし、奪われたウイルス兵器が使われたら膨大な規模での生物災害と国家の信頼が完全に失われる」

バイオハザード

「それで、今回の俺の任務はアンブレラの資料とウイルスの回収・・・んでもって奪われたB・O・Wの奪還あるいは処理ってことではないか？」

司令官はさすがだな・・・と微笑みながら手を叩いた。

「やはり、お前を呼んでよかったよ。だが、今回の任務はお前一人ではどうにもならんだろう。そんな訳で強力な助っ人を用意したぞ」

「助っ人だあ？まさかとは思うが・・・」

と司令官の言葉にいやな予感を感じつつも苦笑いをするブルース。

「おい、入って来てくれ」

と司令官の一声で、右手扉が開き、白い中華服を着た女性、青い服とベレー帽を被った女性。赤い軍服を着た少年が現れる。ブルースは白い服の女性の方を見、ため息をついた。そんなブルースとは裏腹に司令官はその女性の紹介をする。

「えー、まず、左の女性はお前とは長い付き合いかもしれんな。中国安全部所属の工作員、フォンリンだ」

「やっぱりな・・・」

「何がやっぱりよ。私だって好きでやってる訳じゃないわ」

とブルースの呟きにフォンリンはまんざらでもなさそうに言う。次に司令官は中央の青い服を着た女性を紹介する。

「それから真ん中の女性は元S・T・A・R・Sのメンバー、ジル・バレンタインだ」

「よろしくね、ブルース・マッギヤヴァン」

とジルはブルースと握手をする。ところで、とジルは握手しながら

切り出す。

「スペンサーレイン号の事件では大活躍だったそうね」

ジルの言葉にブルースは驚愕する。ちなみにスペンサーレイン号の事件とは何なのかは作者はまったく知らない。多分、ブルースが活躍している『ガンサバイバー』での事件のことを言ってるのだろう・・。

「何であの事件のことを知ってるんだ？たしか上層部が抹消したはずじゃ・・・」

それは私が説明しよう・・・と司令官が言う。

「実は彼女は反アンブレラ組織の一人だね。アンブレラに関する情報は全て筒抜けのようだ」

「成る程ね・・・だから今回の任務に雇われたって事が」とブルースは納得した。

「それで最後に、新国家プラントの軍隊ザフトから特別に配備されるシン・アスカ隊員だ」

司令官は赤い軍服の少年、シンを紹介した。

「シン・アスカです。よろしく願います」

とシンは頭を下げる。ああ、そうそう。と司令官は思い出したように付け加える。

「彼はザフトの中でもエリート部隊、通称”赤服”だね。今回の任務に参加すると同時にザフトの新兵器『モビルスーツ』の実践テストを行うために配属されたんだ。所詮、パワードスーツのような物なのだが、近い将来、一人人が搭乗できるような巨大2足歩行ロボットになる予定だそう。ちなみに彼の腕についてる腕時計のような装置を用いて瞬時に着衣できるそうだよ」

「おいおい・・・、もうそんなSFじみたもんが出来るとのか？プラントってのは相当ロボット工学が発達してるみたいだな」

とブルースはプラントの技術に若干皮肉を込めながらも舌を巻いていた。

そんなこんなでブルースの助っ人達の自己紹介が終わり、任務の詳細

細に入った。

どうやら、日本の『三島財閥』が統制機構に軍事兵器の売却をしているようであり、したがってブルース達は現地にいる協力者とともに三島財閥に潜入し、財閥党首である三島平八を捕らえ、統制機構のアジトの居場所を吐かせるとのことだ。

「それじゃ、国家反逆罪じゃないですか？法で裁けば何とかなるんじゃないですか？」

とシンは任務の内容を聞き、司令官に聞く。

「うむ、的確な判断だな。だが、相手は天下の三島財閥。残念ながらまともな方法では太刀打ちできないんだ」

「それともう一つだ。司令」

今度はブルースが口を開く。

「現地の協力者つてのはもしかして『森羅』の連中か？」

「そうだ、しかも君達二人が二年前の事件で協力してもらったエージェントだ」

ブルースの問いに司令は答える。それを聞き、

「彼なら信用できるわね」

とフォンリンがうなずく。

「彼つて・・・日本の政府直属の特務機関『森羅』の事？あそこつて超常現象などのオカルト専門じゃなかったかしら？」

「でもま、他の組織やつらよりは使える組織だぜ。それに765歳の妖術使いが居るしな」

ジルの問いにフォンリンの代わりにブルースが答えた。

「そんなヤツいるわけないだろ、御伽噺じゃあるまいし」

とシンが鼻で笑う。そうよ。とジルも答えた。

「冗談にしてはちょっとオーバーなんじゃない？」
アメリカンジョーク

「ま、会うのを楽しみにしてな」

ブルースはジルとシンからそんな事を言われても気にしない感じで言う。

そう言うことでブルースら4人は民間船に乗り日本へ向かうことに

なつた。

一方、ノエル達はと言うと・・・、

「この船で日本へ行けるようですね」

とハザマが船の客席でくつろぎながらノエルに言う。スーツを着ているハザマに対して、ノエルは統制機構の制服ではなく、ピンクのフリルのついたスカートに、デニムのジャケット、そして何故か『しんよこ』と書かれたＴシャツを着ていた。

「ええ、そうですね・・・なんでハザマさん、日本へ行くのに船なんですか？普通、飛行機に乗りませんか？」

「実は僕、高所恐怖症なもので・・・飛行機なんて高い所にあがる物って苦手なんですよね」

ノエルの問いに少し震えながらハザマは答えた。そう、現在ノエル達も船に乗っていたのだ。しかも、偶然にもブルース達が乗る日本行きの船にである。

「あ、そう言えば、この船のバーで美味しいケーキバイキングがあるみたいなんですけど、ハザマさんも行きませんか？」

とノエルはハザマを誘おうとするが、

「すいません少尉。僕、ケーキとか甘い物少し苦手な物で・・・それと色々と疲れましたので寝ますので、着いたら起こしてくださいね」

そう言つてハザマは寝てしまふ。ノエルは残念そうな顔をし、ケーキを食べにバーへと向かった。

一方、船の看板・・・

同じ船に乗っているブルースたちは・・・

「まったく・・・折角の休暇だったのに冗談じゃないぜ。それによりによつて日本とは・・・。俺、厄年かな・・・」

「そんなに日本に行くのが嫌なの？」

ブルースの愚痴を聞き、ジルがたずねる。まあね、とフォンリンが

答えた。

「厄介ごとにしか巻き込まれなかったからね」

「そうだよな、とブルースもうなずいた。

「また、メンドーなことになんないけど」

ふと、ブルースはあることを思い出し、ジルにたずねる。

「そうだジル。あんた確かS・T・A・R・Sの隊員だったって
言ってたよな」

「この服装を見てもわからないかしら？」

「まる解りだな・・・」

とブルースは苦笑しながら答え、続ける。

「・・・言うことはあんた『ラクーンシティ』の『あの』事件の
生還者か？」

「世間では『事故』ってことになってるけどさすがU・S・S・T・R
ATCOMの隊員ね・・・。そう、私も貴方と同じウィルス災害で
の生き残りよ」

成る程ね・・・とジルの言葉にフォンリンは納得しながら言う。

「と言うことは私達はその手に関してのベテランって事で雇われた
わけね」

「へへ、上からはそう見られてるかもな」

そう言って笑い、ブルースは腕時計を見ながら言う。

「日本に着くの時間に時間がある。こんな所で立ち話もんだからバー
にでも行かないか？シン、お前もどうだ？ジューズも置いてあるみ
たいだし、それにケーキバイキングもあるらしいぜ」

と3人を誘おうとするが、

「子ども扱いするなよ。俺はいい、一人で行動する」

とシンに断られる。ついでに、

「私達も遠慮するわ。女は女同士で話したいことがあるの」

「残念だったわね、冬瓜^{ドンクワ}」

ジルやフォンリンにも断られる。

「おいおい・・・ちよつと待ってくれよ。俺は別n・・・行っちま

ったよ……。まったく、フォンリンのヤツ、変な中国語教えるんじゃないぞ」

行ってしまったジルとフォンリンに愚痴をこぼし、まだ残っていたシンのもとへ行く。

「……何だよ」

「歳の離れた連中とは付き合いづらいか？」
「別に」

とシンはそっけなく答える。

「しかし、まだ成人にもなっていない少年を兵隊にするなんて凄
い国だなプラントは」

「俺が子供だから軍人だなんて信じられないのか？」

ブルースの言葉にシンはむっとして答える。

「いや、そう言うわけじゃないんだが……」

「ザフトへの入隊は志願制だ。別に無理矢理させている訳じゃない」
「それじゃあ、何か目的があって入ったって事か……いや無理
にでも話さなくて良いぞ。んじゃ俺はバーに言ってくるからな」

それを聞き、シンの表情が曇る。それを察知してかブルースはそれ
以上聴くのをやめ、バーへと向かった。

「……何じゃこりゃ」

バーに入ったブルースはある物を見て発した一言がそれだった。テ
ーブルにあるのは山積みになれた皿、それが凄い勢いで積み重なっ
ている。どうやらケーキを現在進行形で食べているようだ。バーの
他の客はあっけにと取られたような感じで見入っている。

（これだけ食べてるって事は相手は相当なデブか？）

そう思い、ブルースはそのテーブルに座っている人間を見た。

「んなつ！？こんな女の子が、これだけの数を！？」

その少女を見てさらに驚く。何故なら、

「んー、モグモグ、このケーキおいしー！」

食べていた少女は全然太っておらず、むしろ華奢だったからである。

これなら他の客が嘩然とするのは当たり前である。やがて、少女は全てをケーキを全て食いつくし、ご満悦のようである。

「すっげーな・・・あんた。もしかしたらフードファイトに出れるぜ」

ブルースが声をかけ、少女は振り向いた。

「あれ？あなたは」

と少女はブルースの方に向き直り、問う。

「ああ、俺はブルース・マツギヤヴァンだ。あんたは？」

「ノエル・ヴァーミリオンです。先ほどはお見苦しい所を見せちゃいました」

とお互い自己紹介した。

数10分後

「へえー、アンタ『森羅』へ志願しに日本まで」

「ええ、そうなんです。私、『森羅』に居る有栖零児さんに憧れて志願したんです」

「ふーん」

ブルースとノエルは身の上話をしてすっかり打ち解けていた。その時、

ゴゴォン！

船体を衝撃が襲う。

「ひゃあ！」

「おおっ！何だ！？氷山にでもぶつかったか！？んな訳ねえよ・・・。ノエルお前はここで待ってる！」

そう言つて、ブルースはバーを出す。そこへ、

「ミスターブルース！」

と船の乗組員がブルースへ駆け寄る。

「おい！さっきのゆれは何なんだ！？」

「かかかくぁwせdrgyふじこīp@」

ブルースは乗組員に訳を聞こうとするが、乗組員自身も慌てているのか意味不明な言葉しか出てこなかった。

「おい、落ち着け！」

「すすす、すいません！」

ブルースが一喝し乗組員は正気を取り戻す。

「船の看板に突然化物が現れ、形振り構わず乗客を襲い始めました」

「な、何だって！？まさか、統制機構がもうB・O・Wを・・・クソッ！」

ブルースは驚愕、毒づく、銃を片手に走り出した。それをバーの扉から顔を出して聞いていた者が一人、ノエルだ。

「化物・・・B・O・W・・・まさかT・ウイルス？強硬派がそんなものにまで手を出していたなんて・・・早く止めないと・・・」
ノエルはそう言う、とブルースの後を追った。

果たして、ブルース達はこの危機を乗り越えられるのか？そしてノエル達は日本へたどり着けるのか！？待て次回！

TO BE CONTINUED・・・

EP2-3「ガンサバイバー 前編」(後書き)

さて、いかがだったでしょうか？

今回はバイオハザードからジル、ブルース、フォンリン。ガンダム SEED デイスティニーからシンが登場しました。

さて、次回は敵とのバトルが中心に話が進むと思います。ノエルの勇姿を楽しみに待っていてくださいね。それでは(owo)ノシ

EP2-4「ガンサバイバー 後編」(前書き)

最近、日商簿記やワープロ検定の勉強で忙しいです。・・・だけど、小説は書き続けるぜ。

相変わらずのグダグダ文ですが、温かい目をお願いします。

ノエル「BLAZBLUE」のび太戦記異聞録―始まります」

EP2-4「ガンサバイバー 後編」

その頃、シンはひとり、船の甲板で黄昏ていた。

「マユ・・・」

そう呟き、持っていた携帯を開く。待ちうけには髪を長く伸ばした愛らしい少女が写っていた。恐らく彼女がマユなのだろう。

「統制機構は俺が潰す・・・必ず」

そう言っただけで携帯を握る手に力が入った。シンの脳裏に浮かぶのは、血にぬれた彼女『だったもの』、そして己の無力さに打ちひしがれながら天に絶叫する自分の姿であった。

実はシンはこの時代の人間ではない。ノエルと同じ、22世紀から来た人間である。ただ一つ違うのは、彼が統制機構の人間ではないと言うこと。22世紀のある戦争、『第二次魔導大戦』。

統制機構に不満を抱き、反旗を翻した『イカルガ連邦』が起した戦争、別名『イカルガ内戦』と呼ばれる。初めて人間同士による術式を用いた戦争であった。

結果は、イカルガ連邦の壊滅による統制機構の勝利。その結果「刃向かう者は完膚なきまでに殲滅する」という統制機構の理念を、より世界に知らしめる事となった。シンはこの戦争で、マユを失ったのである。自分を保護してくれたイカルガ軍人のおかげで、過去の物質界へ行き、ザフトに入隊した。すべてはこの時の為に、この『インパルス』の力で統制機構を、いや自分の目の前で、マユの命を奪った男を殺すために・・・。

ゴウン！

「な！？何だ？」

突如、船が揺れ、シンは現実には引き戻された。何かにぶつかったのか？と思考するがぶつかりそうな場所は見つからないため、その考えを捨てる。じゃあ一体・・・、その考えは船から這い出してきた物を見て、明らかに変わった。

一方、その頃ブルースは・・・

「ここは、バーの厨房につながってたか・・・」

生存者を救出するために、通気孔を通った。そこは厨房につながっていた。荒らされた様子はないので、ここには化物は来てはいないことがわかる。

「どんな化物が出てくるか・・・、パーティの始まりだぜ！」

ブルースはホルスターから愛銃を取り出し、そう呟くと、厨房へと出た。

厨房

「あつ!?!」

バーへと出たブルースが見たものは、全身を切り刻まれ、倒れていた男だった。

「おい、大丈夫か!?!しつかりしろ!」

すぐさま駆け寄り、男を抱き起こすが、脈がもうない。ただの屍のようだ。

「こりやひでえ・・・、色々な場所を斬られてどれが致命傷だかわかんねえな。しかしこの傷は、誰かに刃物で斬りつけられた傷だな・・・」

男の死体の様子を見て、ブルースはそう呟く。B・O・Wなら『ハンター』か『リツカー』の仕業だろうか・・・、いや、あの2体が爪で切り裂いてもこんな鋭い傷は出来ない。そう考えていると、突如、3体の青い鎧の怪物が現れた。

「鎧!?!まさか、こいつ等2年前の事件で戦った化物野郎の手下か!?!」

ブルースはその鎧を見て、驚愕の表情となる。何故なら、2年前の戦いで化物野郎ことドルアーガの手下だったブルーナイトだったからだ。

「ちよつと期待はずれだったが・・・バケモンはバケモンだ!お互

い容赦なしってことで・・・行くぜえ！」

ブルースはそう言うのと、銃を構える。それと同時に、ブルーナイトも襲い掛かってきた。

『『『ゴアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！』』』

「くたばれ！」

ガアン！ガアン！ガアン！

『グエツ！』

『ギャツ！』

襲い掛かるブルーナイトにブルースは冷静に銃を3発、発砲する。2発はブルーナイトの2体の急所に命中するが、1発は防がれてしまふ。

『グオオオオオオオオオオオッ！』

最後のブルーナイトは雄叫びを上げ、ブルースの首を刎ねんと剣を振るう。

「おわつと！あぶねえ」

それをブルースは紙一重で回避し、バックステップで距離をとると、

ガシッ！

「なっ！？背後にもう一体！？」

何者かに羽交い絞めにされ、後ろを見ると、もう一体のブルーナイトがいた。何とか離れようと頭突き等をするが、ブルーナイトは硬く、中々離れない。正にブルース絶体絶命！そんなときだった。

「ベルヴェルグ！セツトアップ！」

『Complete！』

少女の叫びと共に、何かの電子音が響いた。それと同時に・・・、ガアン！

『ギャア！』

銃声が響き、後ろのブルーナイトが倒れる。

「な、何だ・・・」

ブルースは訳が分からず、倒れたブルーナイトを見、音がしたほ

うを見る。そこには、2つの異様に長い拳銃を持ったノエルが立っていた。それに服装も変わっている。青いミニスカートの軍服にベレー帽といたたいでたちである。

「お前、ノエルか？何だその格好？」

ブルースはそのノエルの姿に驚きを隠せなかった。

「話は後で、とにかくこいつを倒しますよ」

「ん？ああ、そうだな」

ノエルの言葉にブルースは納得する。今は戦闘中、ノエルの今の姿は後でゆっくり聞こう。そう考え、ブルースはブルーナイトを撃ち抜いた。

「んで・・・お前のその格好は何だ？」

戦いが終わり、シンを搜索している最中にブルースはノエルに現在の格好を聞く。

「ああ、これですか？これは私達が戦闘用に使う、バリアジャケットと言っんです」

「バリアジャケット？」

聴きなれない単語にブルースは眉をしかめる。

「バリアジャケットは防御の術式が施されてまして、結構丈夫なんです」

『まあ、今で言う強化服とか言う物だ』

「ん？誰だ？」

いきなり聞きなれない声がして、ブルースはあたりを見回す。

『ここだ』

声が聞こえたほうを見ると、なんと銃が喋っている。

「な！？銃が喋った！？」

これにはブルースも驚きを隠せない。

『我の名はアークエネミー・ベルヴェルグ。そこらへんのただの鉄砲と一緒にされては困る』

「アークエネミー、何だそれ？」

ブルースはアークエネミーとは何かと聴こうとするが、甲板に出たため、それを中断し、生存者を探すべく、行動を開始した。

甲板ではブルーナイトを初め、様々なモンスターがうようよしていたが、ブルースとノエルの連携により、事なきを得た。

「うおおおおおおおおおおおっ!!」

と突然、雄叫びが聞こえる。恐らく、シンがモンスターと戦っているのだろう。声のしたほうに向かうと、案の定、シンがインパルスに変身し、モンスター達と戦っていた。

「あれは・・・シンか!？」

「苦戦してるみたいですね・・・、助けましょう!」

そう言くと、2人はシンを助けるべく、向かった。

「はああっ!」

ズバア!

『ピギヤア!』

シンが変身するインパルスは雄叫びを上げながら、ビームサーベルで怪物たちを切り伏せ、ビームライフルで打ち抜いていく・・・。だが、一向に数が減る様子はない。

「くそ、何だよこの怪物ども・・・一体何処からわいて来るんだ?」

このところ、結構な数を切り伏せたが、敵は湯水のようにわいてくる。インパルスに変身できる時間も限られている。いつまでこの状態が持つか・・・、そう考えていたその時だった。

「シン!」

声が聞こえ、振り向くと、そこにはブルースがいた。何故か少女と同行している。

「ブルース!それに・・・誰?」

「無事だったんだな?このお嬢ちゃんもノエルってヤツだ。この騒ぎが起きる前にバーで知り合った」

「ノエルです。よろしくお願いします・・・って、そんな事言ってる場合じゃないですよ!」

「あ・・・、確かにな」

ノエルが自己紹介をし、今はこんなことしてる場合じゃないことを言う。確かに目の前には怪物たちが今か今かと空気を読んで待っていた。

「・・・こほん。んじゃシン、ここは下がってる。ここは化け物退治専門の俺に任せてノエルと一緒にさっさと逃げな」

ブルースは銃を構え、シンとノエルに逃げるように促す。だが、「やだね・・・こんな奴等相手に下がれるかよ。それにあんたの指図も聞く気はないね」

私も同じです！とノエルも答えた。

「ハザマさんがここにいてもかもしれないのに、残るわけには行きません」

「へっ、ノエルといい、シンといい・・・生意気な奴等だぜ。へまだけはすんなよ！」

「はい！」

「ああ！」

そう言うのと、シンはビームサーベルで蹴散らし、ブルースとノエルはシンの援護をした。3人の連携に怪物たちは瞬く間に蹴散らされ、全滅した。

「へえ、シン。お前中々やるじゃないか」

戦いが終わり、ブルースはシンの戦闘スキルの高さを絶賛する。

「ふん、こんな序の口さ・・・、ところで何なんだこいつ等は？」

シンの言葉にそうですね・・・とノエルも賛同する。

「見たところTウィルス関連の物じゃなかったし・・・」

「なあ、シン。こいつ等が現れたときの様子を詳しく説明してくれないか？」

とブルースはシンに説明を求める。

シン曰く、怪物たちは突然、甲板に現れたらしい。その時、地震のようなそでないような感じの揺れを感じたようだ。

「やつぱり『ゆらぎ』が起きていたか・・・。こりゃあ、あっちの

「世界で何かしらの事件が起こったみたいだな」

「ゆらぎ……？あっちの世界？何のことを言ってるんだ？」

シンは訳が分からなさそうな顔をしていたが、ノエルには心当たりがあつた。

（・・） やっぱり強硬派の仕業なんだ・・。早く何とかしないと・・

「教えてくれよ。知ってるのか？この怪物たちのこと？」

シンはブルースから怪物たちのことについて聞こうとするが、「話せば長くなるから、騒動が終わってから」と言うことで聞かせてもらえなかった。ブルースとノエルはフォンリンとジルを見つるべく、搜索を続けた。

船内の1Fにはフォンリン達はおらず、2Fへエレベーターを使い向かった。

2Fにも怪物たちが蠢いていたが、3人の連携には手も足も出ず、倒されていく。やがて、倉庫でフォンリン達を見つける。そこでは生存者もあり、フォンリン達は2体の死神のようなモンスターに苦戦している。もちろんハザマもいる。

「フォンリン！ ジル！」

「ハザマさん！」

そうやって、ブルースはフォンリンとジルの前に立ちふさがり、ノエルとシンはハザマの前に立ちふさがり、死神と対峙する。

「ブルース！？シン！？それと……だれ？」

「ノエルさん！……助かったあゝ」

「あ、私はノエル・ヴァーミリオンって言います」

フォンリンに名を聞かれ、ノエルは律儀に挨拶をする。

「そんなことはさておき、遅いわよ！ブルース！レディーファーストにも程があるわ！まさか、このノエルって子と、イチヤイチャしてて遅くなったとか言うんじゃないでしょうね！？」

「え、ええええええええええ！？違いますよ！」

「おいおい、それが助けに來た男に言うセリフかよ？ っていうか俺

とノエルはそんな関係じゃないぞ。たまたまバーで知り合っただけだ」

ジルのセリフに、ノエルは顔を真っ赤にしながら、ブルースはさっぱりとした感じで否定する。

「あのー、今はそんな事やってる場合じゃないですよ?」

「そうよ!こんな状況でも冬瓜やってないで早くしなさい!」

ハザマとフォンリンがつっこむ。死神のモンスターはやっぱり、空気を読んで待っていた。

「まったく、こんな骸骨野郎まで転移していたとはな・・・行くぜ!ノエル、シン、ジル!フォンリンは援護を頼む!」

ブルースの掛け声と共に、戦闘が始まった。味方の数が多く、何よりも、個々の能力の高さゆえか、勝負はあっという間についた。

戦いが終わり、生存者の一人が、同種族のいない変わった化物を見たという情報が入ってきた。とにかく、派手な格好をした化物とのことである。

(・・・派手な格好をした化物・・・まさかな・・・)

ブルースはその話を聞き、2年前の戦いで立ちふさがったとある人物を思い出す・・・が、すぐにそいつを頭から締め出し、その化物がいる甲板へと向かった。

甲板

ギューイイイイイイイイイイイン!!!!

「きゃあ!何ですか、この音?」

「ギターか?」

到着したブルースたちを、突如ギターの音が歓迎するかのように響く。

「イエアアアアアアア!SATUGAIセヨ!SATUGAIセヨオオオオオオオッ!」

ギターの音と共に、耳障りなかすれた叫び声が聞こえる。その声にフォンリンとブルースは聴き覚えがあるようだ。

「ブルース、これって・・・」

「ああ、この耳障りな音楽・・・かすれた叫び声・・・、何で俺はこんな『生きた屍』共に縁があるのかね」

ブルースは自嘲気味に弦き、その歌の主に向け寄った。

「やつぱり、お前か・・・ザベル・ザロック！」

そのザベルと呼ばれたそれは正に生きた屍と言っても過言ではなかった。一瞬骸骨かと思わせる顔、そしてガリガリにやせこけた体極めつけは紫色の人間離れした肌であった。ザベルはブルースたちの存在を知ってか知らずか、歌を続けている。

「オレには父さん母さんイネエー！それはオレが殺したカラー！イエアアアアアアアアアアアア！！！」

「うっ・・・うるさい曲」

『ああ、悪趣味な歌だ』

ザベルの歌にノエルは顔をしかめ、ベルヴェルグは淡々と感想を漏らす。

「ああ！？五月蠅えたあなんだ！こいつは今魔界で流行ってるデスメタルバンドの曲だぜ！・・・ん？」

ノエルの指摘にザベルは腹を立て、怒鳴り、ブルースたちに気づく。

「テメエ等はあの時レイレイちゃんと一緒にいたチャイニーズ！それとアメリカンのおっさんじゃねーか！？なんか部下どもの帰りが遅いと思ったらテメエらの仕業かア！？」

ザベルのセリフにブルースはフン、と鼻で笑う。

「それはこっちのセリフだ、ゾンビ野郎！また性懲りもなく暴れやがって！この襲撃はお前が仕組んだのか！？」

ザベルはノンノンノン。と言いながら指を振る。

「オレはただ命令に従っただけだズエー！魔王ドルアーガの命令になア！」

「「「！？」」」」

『魔王ドルアーガ』の単語にブルース、フォンリン、ノエルが衝

撃を受ける。ただ一人、シンは頭に疑問符を浮かべている。

（ドルアーガまでも引き入れるなんて・・・、何を考えているの、強硬派は！？）

ノエルはおそらくはドルアーガを蘇らせたであろう統制機構、強硬派に恐れと怒りを表している。

「ドルアーガ！？でもヤツは、あの時倒したはずじゃ・・・」

フォンリンの言葉にブルースも苦笑しながらうなづく。

「2年前の戦いでも何度か復活してたよな。そう驚きはしないさ。だけど・・・」

すぐに真顔となり、続ける。

「何で民間船を襲うんだ？」

「ドルアーガが復活したのはちよいとした複雑な訳があるのよ。その為か、ヤツは完全に力を取り戻していない。ヤツが力を取り戻すにはどうするか解ってるよなア。ヒヒッ！」

ザベルの言葉にフォンリンがハツとした表情となる。

「まさかこの船の乗客を！？」

「イエEEEEEEEEッス！この船の乗客全員の魂を持つて帰るんだよオ！だが、生贄は若くてピチピチのねーちゃんがいらしいからな。除外される人間はモンスターのえさってわけよ」

ザベルの言葉に、んなことさせるか！とブルースが怒鳴る。

「お前はここで埋葬されるのが一番だ！」

「もう埋葬されてるぜ・・・ん？」

ザベルはブルースのセリフを聞き流し、ノエルに目が留まる。

「ほお、新入りみてーだが、いいお嬢ちゃんだなあ！胸は小さいが若いしピチピチ！生贄には最適だな！」

「な！？誰が胸が小さいですか！これから大きくなるんです！」

ザベルの言葉に顔を真っ赤にしながらノエルが怒鳴る。

「カモン、デスサイズ！」

そんなことは気にせず、ザベルは部下の死神モンスターを呼び寄せた。

『ギシャアアアアアアアアアア！！！』

『キーンッヒッヒッヒッヒッヒッヒ！！！！』

「ひ、ひええ！」

「来るぞ、皆！」

「解つてますよ……。このゾンビ野郎に私の胸がまな板といったことを後悔させないと……。フッフ……。」

（（こ……。怖ッ！））

突然のモンスターの来訪にすっかり腰が抜けているハザマは差し置いて、ブルースたちは戦闘態勢に入った。ノエルはザベルに胸が小さいと言われたことによつぽど腹を立てているのだろう、どす黒いオーラを滲ませている。

「それじゃあ、テメエ等に聞かせてやるぜエ！魂に刻むフレーズをヨォー！」

そう叫ぶと、ギターをかき鳴らした。そのギターの音色が衝撃波となり、ブルース達に伸びる。それをブルース達はとっさに避けたが、ノエルがぐらりと着地でバランスを崩す。

「ヒヤッハー！まず女を一人！」

「っ！？しまった！ノエル！」

ブルースがノエルを助け出そうとするが、間に合わない。

「デス！フレエエエエエエエイズ！」

ザベルがそう叫び、ギターをかき鳴らした。その衝撃波がノエルに向かって伸び、直撃……。

ドオン！

「はい？」

しなかった。ノエルは動じもせず、衝撃波にベルヴェルグを向けると、引き金を引いた。魔力弾が衝撃波をかき消す。

「く、糞オ！デスサイズども、お前等もあのチッパイ女を殺つちまえ！」

『ギシャアアアアアアアアアア！！！！！』

ザベルの命令と共に、死神モンスターが挟み撃ちでノエルに襲い

掛かるが、

「ふっ！」

ゴシヤア！

「グゲツ！」

ノエルの振り向きざまに放った前蹴りが後ろの死神の顔面にクリーンヒット。そのまま頭蓋骨を粉碎し撃破する。その死骸を持って、残りの死神の鎌を跳んで避け、

「おりやああああああああああっ！！！」

ズガアン！

「グギヤ！」

死骸を死神に叩きつけた。

「ベルヴェルグ・・・フェンリルモード」

「了承」

静かに呟くと、ベルヴェルグはそのフォームを変え、巨大なガトリングとなる。そして、

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

無慈悲に、ガトリング弾を死神に叩き付けた。叫び声も上げられず、死神は絶命。ザベルは啞然としていたが、すぐにギターを持つと、攻撃態勢・・・

「ベルヴェルグ・・・トールモード」

「了承」

「ファイア」

に入る前にノエルが早かった。ベルヴェルグをガトリングから、バズーカのようなものに変え、ザベルに向かって発射する。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

轟く爆音。ブルースたちはノエルの圧倒的な戦闘力にただ呆然となるだけであった。やがて、爆煙が晴れ、ボロボロのザベルが転がっていた。そんなザベルにノエルは表情を変えず、近寄る。

「私の胸のことを馬鹿にしたやつは誰だろうと許しませんよ・・・。さっきなんていいました？私の胸がまな板って言いましたか？」

殺気を漂わせながらザベルを見下ろすノエル。

「いや、確かに胸が小さいって言うてたけど……まな板とか言うてん、確かに聞いたぞ！オラァ！」ブゲ！」

ザベルは何とか起き上がり、いい間違いを訂正しようとするが、逆に激昂したノエルに頭を踏まれ、地面にキスをしてしまう。そんな光景を見て、ブルース達は、

(((怖 え え え え え え え え え え え え え え え
!!!()))

と思ったという。そこへ、ハザマがノエルを羽交い絞めにして止める。

「少尉！やめてあげてくださいよ。もうこのゾンビのHPは0です」！

「っ！ハザマさん、離してください！このゾンビ野郎は存在を完全に抹消しなきゃ気がすまないんです！あつ、逃げられた！待ちなさい、このゾンビ野郎！」

そんなこんなしていると、ザベルの姿がない、どうやら逃げたようである。

「ザベルのやつ・・・、足が早いのは相変わらずだな」
ブルースは、やれやれといった感じで呟いた。

ザベルが逃げたことにより、船内にいたモンスターは1匹残らず消滅し、船は何事もなく日本へ着いたのだった。

日本で、ブルース達を待ち受けるものとは一体何か？それは次回の解釈にて・・・。

TO BE COUNTED . . .

EP2-4「ガンサバイバー 後編」(後書き)

いかがでしたか？

ノエルがベルヴェルグを操って敵と戦うシーン上手くできてたか心配です……。そしてキャラが思いつきり崩壊してる……。(-

-;))

さてっ！そんなことはさておき(↑開き直り)次回は有栖零児とシヤオムウがついに登場です！お楽しみに！……。え？そんな事より、ラグナを出せ？すいません、多分ラグナはEP3に登場します。

それでは(owo)ノシ

EP2・5「愚かなる鉄拳王 前編」(前書き)

久しぶりの更新となります。今回は戦闘シーンがありませんが、あの凸凹コンビが登場します。

相変わらずのグダグダっぷりですが温かい目をお願いします。

零児 & amp; シャオムウ「BLAZBLUE」のび太戦記異聞録
|...始まるぞ(ぞい)」

EP2・5「愚かなる鉄拳王 前編」

「教えてくれよ、あの化物について何か知ってるんだろ？」

シンは港に下りるなり、ブルースにそう問うた。ああ、と頷くブルース。

「教えてやるが、到着時間を結構過ぎちまったからな。とりあえず車があるからそれに乗って話すぞ」

そう言うと、ブルースは港を出、止めてあった車（恐らく森羅が用意してくれたものだろう）に乗り、三島ビルへと向かった。

「そんじゃ、何から話そうかな・・・」

運転席で、ブルースは鼻歌交じりに言う。さっさと話せよ。とシンがじれったそうに声を荒げる。

「2年前の事件とゆらぎって現象と異世界について話すって言うてただろ!？」

「ああ、そうだったな」

そんなシンの様子に、ブルースは肩をすくめながら答える。そして、ゆっくりと話し始めた。

「2年前の事件・・・、あれはこの世界と異世界を融合させようと目論んだ悪党共をぶちのめすって出来事だったかな」

「ハア？」

懐かしむように話すブルース。そんな彼にシンは訳が分からないといった表情で聞き返した。

「この日本では古くから森羅と敵対していた組織、逢魔^{（いま）}って言うのがいたの」

ブルースの代わりに今度はフォンリンが話し始め、そのまま続ける。

「そいつらがゆらぎという現象を用いて、この世界と異世界を繋ぐ道を作り出して世界を混沌に導こうとしたの」

「それを俺達が阻止したって訳」

フォンリンの後を引き継ぐように、どや顔でブルースが言う。そんなブルースをフォンリンは押しのけ、続ける。

「異世界とは文字通り、私達とはことなる世界の事。ザベルが言っていた『魔界』っていうのもその一つ。悪魔やゾンビがうろつく、オカルトチックな世界よ」

「そんな馬鹿な話・・・」

フォンリンとブルースの説明を聞き、シンは鼻で笑おうとしたが、まだ分かってないみたいです。とノエルが言う。

「さっき見たでしょう？あの化物達を見てまだ信じられないんですか？」

そういわれて、シンはうつと黙ってしまふ。話を元に戻すけど・・・。とフォンリンが言い、この場合はひとまず収まった。

「今から行く、三島財閥の党首、三島平八もその事件に関わった一人。さらに統制機構と関わっている事からするとかなりの危険人物よ」

「何か分かったような分からないような・・・」

そう呟くシン、ノエルは統制機構と聞き、複雑な表情を浮かべる。そんな2人を励ますように、ブルースが口を開く。

「こればかりは口では説明できないな。そんなに知りたきゃこれから会う、森羅のエージェントに聞くこつた」

森羅のエージェントと聞き、ノエルの複雑だった表情がパツと明るくなる。

「森羅のエージェントって・・・、もしかして有栖零児ありす れいじさんですか！？」

「あ・・・ああ、そうだが。良く知ってるなあ。あ、そうかお前森羅に志願するんだっけ？」

そんなノエルの剣幕にたじろきながらもブルースは答え、ふとノエルが森羅に志願する事を思い出し、それを問いかける。

「はいっ！はあゝ、遂に生で零児さんが見られるんだあゝ・・・楽しみだなあ・・・。ヒヤッホオオオオウ！！！」

「うわ！？はしゃぐなよ、バカっ！」

「何ですって！？バカって言う方がバカですっ！」

「おわ！？んなところで喧嘩すんな！」

そんなこんなでギャーギャー騒ぐうちに、車は三島財閥ビルに到着したのであった。

――三島財閥ビル前

「んゝ、遅いのおゝ遅いのおゝ」

金髪をポニーテールにした女子高生ぐらいの少女が、待ちくたびれたように、黒と白の入り混じった短髪の青年の周りを回っている。「少しは落ち着け、シャオムウ。まだ到着してから10分しか経っていないだろう」

そんな少女（おそらくシャオムウは少女の名だろう）に、青年は腕を組みながら口を開く。そんなシャオムウは、ため息をつくとき、青年に向き直り、言った。

「何を言つとるか、零児ゝ。10分前行動と言つのを学校で習わなかったかゝ？」

「夜中までインターネットで『二〇二〇動画』を見たりネットオークションをやつて寝坊したお前が言う事か？」

そんなシャオムウに青年、零児は半眼でつつこんだ。そう、この人物こそがノエルの憧れる森羅エージェント、有栖零児なのだ。シヤオムウはうつと詰まりながらも、反論する。

「しょうがないじやろう！ヤフォクの終了時間が夜中じゃったんじやから！しかも、しぶといヤツがいて長期戦になったんじやから！」
「お前・・・、またしょうもない代物を落札しようとしてたんじやないだろうな・・・」

ジト目でシャオムウを睨む零児。しょうもなくなはいわい！とシヤオムウは反論。

「ちよつとした、初回限定の『涼宮ハ。ヒの消失』のDVDを買い

うとただけじゃ!」

「それをしようもないって言うんだッ! 全く……こんなヤツが仙狐とは思えんな……」

シャオムウにツツコミをいれ、零児は深くため息をつく。ちなみにシャオムウは人間ではない。狐が何百年の時を得て仙力を身に着けた『仙狐』と言うもので外見は少女でも、結構長生きしているのである。外見に似合わぬ年寄り臭い口調もその所為なのだ……多分(おいコラ待て作者 by シャオムウ)

「ん……?」

ふと、車が止まりドアが開いた。そこに降りてきたのは……、
「よう。待たせちまったな」

ブルース達である。ちなみに後ろでは……、
「キヤー! シン君、ハザマさん見て! 生零児さんですよ! 生零児さん! かつこいいいいいいいいいいいっ!」

「騒ぎすぎですよノエルさん!」

「五月蠅いな……ギヤーギヤー騒ぐなバカ!」

「んな!? バカって何ですか!? バカバカ言わないで下さい!」

零児を見て、熱を上げギヤーギヤー騒ぐノエル。そしてそれに力チンときたシンがバカ発言をし、ノエルと口喧嘩をしていたが、あえてスルーしよう。

「こりゃ! 遅いぞおぬしたち!」

「いや、すまない。ちよつとしたトラブルがあつて遅くなつちまった」

着くなり、プリプリと怒るシャオムウにブルースは申し訳なさそうに謝罪する。

「何かあつたのか?」

「ああ、じつはな……かくかくしかじか……」

ブルースは零児に船でザベル率いる異世界のモンスターに襲われた事を話した。

「何!? 魔界の連中が!?」

事情を聴いた零児は信じられないと言った表情で言う。

「ホント訳わかんねーぜ……。奴等がこっちに來れるのは不可能なんじゃねーのか？」

「ああ、ここ最近ゆらぎの存在は確認されていない」

ため息混じりにブルースは問い、零児は頷き、だがもしかしたら・・。と続けた。

「まだ日本には何か大きな歪みが起きているのかも知れんな」

零児の言葉に今度はブルースが頷いた。

「確かに俺達が始めてモンスターに出会ったのも日本の領海に入ってからだ」

またやつかいな事になってないといいんだけどな。と肩をすくめる。そんなブルースとは裏腹に、零児はため息をつきながら口を開く。

「生憎だが、こちらでも結構厄介な事が起きてしまつてな」

「へ？」

零児の言葉に、ブルースは目をしばたかせながら聞き返す。

「2日前に統制機構が本部に乗り込んできた・・。」

「!？」

「そんな事があつたのか!？」

零児の言葉に驚愕の表情となるブルースとノエル。ブルースの問いに、シャオムウが頷きながら答えた。

「あの事件をきっかけに、作られた対超能力者高出力振動波装置を根こそぎ持つて行きおつたんじゃない」

「大層な名前だな。なんだい？その超何とか兵器つてのは？」

「超能力者との戦いを想定して作られた森羅初の逢魔以外の兵器だ。魔法だのPSIだのそういう精神攻撃を持つ奴等がこの世界を攻撃してきてもいいように政府が考案したヤツなんだ。・・。だが、何故統制機構がそれを欲しがったのかは分から「ちよつと待つて！それって結構まずいんじゃないの!？」」

零児の説明を遮つてフォンリンが口を開いた。

「はあ？食い物の話をしてるんじゃないんだぞ、フォンリン」

「いや、食い物じゃないと思うんですけど・・・」

横から割り込んできたブルースをノエルがつっこむ。

「まったく、ノエルの言う通りよ冬瓜。話を元に戻すけど、三島財閥は統制機構と手を組んでいるのよ。そして、三島平八はゆらぎや異世界の事も知っている」

「と言うことはその平八って人が統制機構とかいう組織と共に異世界を侵略しようとしているって事かしら？」

フォンリンの後をついで、ジルが答えた。

「・・・そんな大げさな」

そんな2人にブルースは頬を掻きながら言うも、それも一理あるのう。とシャオムウが言う。

「じゃが、あのトンガリ親父がいくら異世界の事を知っていても転移の方法までは知らんと思うのじゃが・・・」

「そんなの本人に聞けばいいだろ！」

「ん？どうやら新顔が4人ほどいるようじゃが」

そんなシャオムウを遮りシンが叫んだ。ふとシャオムウは今更ながらシン達の存在に気づく。

「そっぴゃ紹介がまだだったな」

ブルースは忘れていたようで苦笑しながら言い、まずジルを紹介する。

「こちらの女性ウーマンは反アンブレラ組織のエージェント、ジル・バレンタインだ」

「よろしくね、森羅のエージェントさん」

ジルはそう言って零児に握手をする。次にブルースはシンを紹介した。

「こっちのボーズはプラント国のザフトの軍人シン・アスカだ」

「始めまして」

ジルとは対照的に無愛想に挨拶をするシン。そんなシンを見て、
「なんじゃあ！？こんな子供が助っ人じゃとー！？」

「な、何だと！」

子供と言われ、カチンとするシン。そんなことを知ってか知らずかシャオムウは不服そうに続けた。

「確かに若人が加入するとは上の連中から聞いていたがここまでガキだとは思ってなかったぞ。あいたつ！何するんじや零児！」

「この駄狐の言う事は気にしないでくれ」

ブツブツ言うシャオムウに拳骨を落とし、シンに謝罪する零児。そんな光景を苦笑しながらノエルとハザマを紹介する事となった。

「ノエルとハザマ・・・確か上が言っていた新しく森羅に入隊する2人と聞いていたが君達だったか」

「あ、知ってたんですか？よ、よろしくお願いします」

零児がノエル達の事を聞いていたと知り、未来の物質界にいるライウエル中将に礼を言いながらお辞儀をする。

「それじゃあ今度はこっちの自己紹介だな・・・。俺は有栖零児、こっちはシャオムウだ。特にコイツにはかなり手を焼くかもしれんがよろしく頼む」

「よろしくな、特にノエルとやら・・・お主とは何気に気が合いそうじゃ・・・胸が小さいもの同士」

「んな！？これから大きくなるですよ！」

自己紹介をし、突然シャオムウがノエルの小さな胸を揉みながら言う。この後、零児に拳骨を落とされたのは言うまでも無い。

「さて、自己紹介も済んだ事だし、そろそろ本題に入りましょ」

「だな、なるべく戦闘は避けたいからばれないように進入したいが・・・」

ジルの言葉に、ブルースが頷きながら答える。そんな時、零児が安心しろ。と口を開いた。

「そこら辺は俺達の方で考えてある」

そう言って、正面玄関の隣にある階段を指差して続ける。

「まずはあそこにある非常階段を使って進入する。社長室のある40階につながるエレベーターは31階からしかない。30階で見つ

からないように進んで、31階にたどり着けば難なく社長室に着く
って訳だ」

「あら、意外と簡単なのね」

とフォンリンが余裕そうに言い、

「とにかく、平八の所へ着けばいいんだろ？見つかったって全部な
ぎ払えばいいさ」

シンは指の関節を鳴らしながら上を見上げる。そんなシンをシャ
オムウがため息をつきながら諭した。

「お主な、あんまりこの連中を舐めたらいかんぞ。平八自身、
鉄拳王と呼ばれる偉大な格闘家じゃ、そう簡単には捕らえられんぞ」
「そんな事より早く行きましようよ。こんな所にとどまった方がか
えって目立ちやすいわ」

とジルがため息をつきながらも言う。それもそうだ。と零児は頷
いた。

「それでは三島財閥ビルに潜入するぞ」

こうして、零児達は、三島財閥ビルに侵入することとなったので
あった。

零児達が非常階段へと向かった後、車の陰から何かが零児達をの
ぞいていた。ドアを開け、零児達が中に入った事を見届け、その何
かはゆつくりと車から出る。それは人間の姿をしていたが、体格は
常人離れしていた。2メートルを越すほどの体躯、両腕には丸太の
ような太い義腕。何よりも、常人とは異質だったのは肌の色である。
血のように赤い肌であった。まるで、御伽噺に出てくる鬼のように
。。。

『ティガー、聞こえるか？三島財閥ビルに侵入できたのか？』

その男、ティガーの右義腕に内蔵してある無線から女性の声が聞
こえる。

「いや、ココノエ。三島財閥ビルに到着はしたのだが先客がいた。
森羅の有栖零児とシャオムウ。そしてアメリカのエージェントもい

た」

『森羅のエージェントと妖狐か・・・、確かにそいつと戦えば骨が折れるな』

ティガーの言葉に、女性（恐らく、ココノエとは彼女の名前だろう）は苛立たしげにそう言つと、しょうがない。と呟いた。

『作戦変更だ。エージェント共が平八を捕縛し、ビルから出てきた所を奪え』

「了解した・・・、では持ち場に戻る」

ティガーはそう言つと、無線を切り、平八を捕縛した零児達が来るのを待ち構えるのであつた。ティガーとココノエ・・・彼らは一休何なのか？そして、零児達は無事平八を捕らえる事が出来るのか？それは次回の講釈にて・・・。

TO BE COUNTENED・・・

EP2-5「愚かなる鉄拳王 前編」（後書き）

いかがだったでしょうか？

そろそろ、BLAZBLUEも投稿せねばと思っていたのですが、就職活動などリアルのほうが忙しく、気づけば何ヶ月も投稿できず・・・、投稿しても戦闘シーン皆無& amp; グダグダで・・・本当にすいませんでした！（土下座）

今回は、戦闘シーンをたっぷり盛り込みたいと思いますので、楽しみに待っていてください。

それでは（owo）ノシ

EP2-6「愚かなる鉄拳王 中編」(前書き)

今回はあの鉄拳王(と言う名のハゲ)が登場します。そしてあの男も・・・。

相変わらずのグダグダっぷリですが温かい目をお願いします。
平八&仁「BLAZBLUE」のび太戦記異聞録が始まるぞ」

EP2-6「愚かなる鉄拳王 中編」

「はあああああああ、疲れた。」

三島財閥ビルの非常階段を登る最中、やつれた様子でシャオムウは倒れこんだ。不満顔のまま続ける。

「こんなのじゃワシの体がもたんわい・・・途中の階に忍び込んでエレベーターに乗った方が楽じゃ。作戦変更」

「するか。それに万が一見つかったら面倒な事になる」

そんなシャオムウに零児がツツコミをいれ、そうよ。とジルも賛同する。

「いい年頃の女の子がそんな年寄り臭い事言ってるの？・・・」

それを聞いていたブルースとフォンリンは目をしばたかせた後、少し噴出した。ジルはそれに対し首をかしげる。

「何？私の顔に何かついてる？」

「あ、ああ・・・シャオムウは外見はこんな若い格好してるが・・・実は765歳なんだ」

「ハア！？」

「ええ！？765歳っておばあちゃんじゃないですか！？」

ジルの問いにブルースは笑いを堪えながら答える。それを聞いた
 シンとノエルは目を限界まで見開きながら驚いた。シャオムウは涙
 目になりながら「ブルースウウウウウウウウウッ！！！」

と叫んだがスルー。ああ、でもだな。と付け加えた。

「シャオムウはこんな歳ではあるが、仙狐では1000歳からが成体として扱われるんだ。だから仙狐の間では若者で人間に例えると17 18歳って感じなんだよ」

「せんこ？何それ」

ブルースの説明にジルは首をかしげる。

「中国に住む狐の妖怪の事よ。シャオムウは人間ではなくて妖怪なの。それに妖術使いでもあつて森羅では欠かせない存在なのよ」

「へえ・・・」

「そうなんですか・・・」

ブルースの後を引き継いでフォンリンが説明をする。ノエルとジルはそれを聞き納得をした。と・に・か・く・！・！とシャオムウはズイっとドアップでノエル達に近づきながら怒鳴った。

「ワシはお主ら人間から見たらとんでもない歳じゃが、仙狐こじちから見たらまだピチピチなんじゃ！分かったか！！！」

「は・・・はい・・・」

物凄い形相にたじたじになりながらもノエルは答える。ふと、シンを見ると・・・。

「・・・」

「何じゃ！その『お前は十分ババアだっつーの』見たいな目はア！！！！」

馬鹿にしたような目で笑っていた。血管が切れてしまふのではないかと思うほど青筋を浮かベシンに掴みかかろうとするシャオムウ。そこへ、

ゴン！！！！

「あゝもう黙れッ！！！！！」

「あだア！！！！？」

堪忍袋の緒の切れた零児の拳骨が落とされシャオムウはうずくまってしまう。零児は、そんなシャオムウを身ながら続けた。

「お前が何歳だろうがどうでも良いだろうが！！さっさと登るぞ！！！！」

零児の一喝によりこの話は中断され再び登る事となった。ちなみにシャオムウは登るたびに弱音を吐きまくったためその度に零児の拳骨を受けたのは言うまでも無い。

そんなこんなで、30階にたどり着きドアを開ける。歩いてエレ

ベーターへ差し掛かる道のところに見張りがいた。

「見張りがいるな・・・」

「どうします？強行突破にしますか？」

壁に隠れながら言う零児にノエルが問う。そこへワシに任せておれ。とシャオムウが名乗りをあげた。

「こう言う場合は『大人の読み物』を仕掛けておけば良いんじゃない？」

「あるかそんなもの」あ、それならありますよ。使います？」あるのかよ！？ってこれホ。本じゃねーかアアアアアアアアアアアアアアッ！！誰が読むんだよソレツ！！！」

「は、ハザマさん！それ私の本じゃないですか！！！」

「それお前の本だったんかいイイイイイイイイイイイッ！！！」
シャオムウのボケに突っ込む零児だが、ハザマがいつの間にか取り出した『大人の読み物』を見て驚愕する。ちなみに本には男のケツを枕にする男の絵と『くそ。そテク。ツク』と書かれたタイトルの本であった。それが何故かノエルの持ち物だった為、零児は驚愕のシャウトを入れる。そんなギャアギャアと騒ぎを起こして見張りに見つからないわけはなかった。

「おい！！そこにいるのは誰だ！？」

「やばっ！見つかったぞい！」

「そりゃ、大声出したら見つかるわな」

見張りに見つかりうるたえるシャオムウにブルースは冷静につつこんだ。

「増援を呼ばれたら面倒ね・・・早めに倒しておきましょう」

ジルの言葉も最もである。そう言う訳で応援を呼ばれる前に倒しておく事にした。

「それならば・・・行きますよ！ベルヴェルグ、セットアップ！！！」

掛け声と共にベルヴェルグをセットアップし、見張りに襲い掛かる。

「く、糞っ！！！」

「遅いですよ！」

「グハッ!？」

見張りは銃を発砲し応戦するがそれを全てかわしきり、蹴りを叩き込み見張りの一人の意識を飛ばす。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!」

「な、何だ!? 銃が効いてnギヤアッ!!!!?」

「く、糞・・・味方がやられてる・・・応援を・・・ぐはっ!？」

「峰打ちだ」

一方ではインパルスを装着したシンが、ビームサーベルで銃を斬りおとし、柄の部分で見張りの一人を殴り気絶させ、零児はリーダーの見張りを刀の峰打ちで倒し、戦いは終わった。そのまま急いでエレベーターに向かったのだった。

「ふー、何はともあれエレベーターにたどり着けました」

「きつかったぞい」

「誰の所為だと思ってる・・・」

「あうう・・・私の阿部さんが・・・」

エレベーターにたどり着き一息ついたハザマとシャオムウを横目で睨みながら零児は言う。そんな零児をブルースはまあまあ、とんだめる。ちなみにあの本は先ほどの戦闘の際に落としてしまい、それに関してノエルが泣いているが気にしてはならない。

「まあ、いいじゃないか。このエレベーターに乗れば社長室まで一直線だしな。結果オーライって事で・・・」

そう言いながらエレベーターのボタンを押そうとしたその時だった。

ビーー! ビーー!

『侵入者発見! 侵入者発見! 警備部隊は直ちに敵を殲滅せよ!』

アラームと共にアナウンスが鳴り出す。

「そんな! 見つかった!？」

「潜入は完璧だったはずじゃぞ!？」

「お前等の所為じゃアアアアアアアアアアアアッ！！」

ゴン！！！！×2

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

見つかった事を知りうるたえる元凶に零児シャオムウとハザマの怒りのシャウトと拳骨が繰り出され、2人の悲鳴が三島ビルにこだまするのであった・。

「糞・・・やはりエレベーターがロックされている・・・」

ボタンを押しても反応しないエレベーターを見ながら零児は毒づく。ちなみにシャオムウとハザマはデカイたんこぶをつけたまま気を失っていた。

「どうした？何があつたんだ？」

訳の分からないブルースは零児に問う。零児はブルースのほうを振り向くと、説明した。

「このエレベーターは警戒レベルがあがると侵入者を防ぐ為にストップする仕組みになっている・・・。これを再び作動させるには39階にある解除装置を操作しなければならないんだ」

「なら、39階に行かないと・・・」

ノエルはそう零児に言うが、そう簡単にはいかないんだ。と言った。

「このビルから31階から39階は先ほど言った解除装置を操作させないように対侵入者用の防衛エリアとなっている。更に防衛エリアは2つのブロックに分かれていて、2つの解除装置を同時に作動させなければならない」

「と言うことは2手に分かれて行動する必要があるってことなんだな」

シンの言葉にああ、と零児は頷く。こうして、ブルース、フォンリン、ジル、ハザマのαチーム。ノエル、零児、シャオムウ、シン

のβチームで行動する事となったのである。

道中様々な仕掛けや、アンドロイドなど敵が現れたがシンのインパルスやノエルの活躍もあり、無事に両ブロックの解除装置の元へたどり着く事が出来たのであった。

『こちらブルース、今解除装置の元にたどり着いた』

「俺達も今さつき解除装置の元についた所だ。いくぞ、準備はいいか？」

ブルースから無線で解除装置に着いたと報告を受け、頷きながら言う零児。

『ああ、いつでも万事OKだ』

OKと聞き頷く零児は装置のレバーに手をかけ、続ける。

「今から3秒数えるから0になったら装置のレバーを引いて作動させるんだ。3・・・2・・・1・・・0ッ！！！」

そう言つてレバーを引く零児、無線からもレバーを引く音が聞こえる。装置の駆動音が聞こえ、あれほど鳴っていたアラームも次第に収まっていく。零児はふう・・・と息を吐いた。

「成功だ。危険レベル解除、・・・社長室へのエレベーターが再起動したぞ」

「と言うことは三島の元にいけるって訳ですね。よかったあ・・・」
零児の言葉に安堵の息を吐くノエル。全くじゃ。とシャオムウは言う。

「とんだ道草じゃったわい」

「お前の所為だけだな」

「・・・によるーん」

シャオムウの言葉にシンと零児に突っ込みを入れられどこぞのちゆるやさんの如く落胆するシャオムウ。そんなシャオムウにノエルはまあまあとなだめながら言う。

「まあ良いじゃないですか。結果的に三島の元に行けるんですから、結果オーライって所ですよ」

「・・・そうだな。それじゃあブルース達と合流するか」

そう言うことで零児達はエレベーター前でブルース達と合流することにしたのだった。

エレベーター前でブルース達と合流し、社長室へと乗り込む零児達。エレベーターから降りて社長室のドアに差し掛かった。零児達は戦闘体制に入りつつドアノブを手にかけ、一気にあける。そこには、鍛え上げられた上半身、そして特徴のある髪型の老人が立っていた。

「三島・・・平八！」

零児が老人、平八の名を言う。

「・・・森羅にU・S・STRATCOM、元STARSにザフトか・・・」

平八はゆつくりと振り向きながら続ける。

「そろいも揃ってズカズカとあがりこんでくるとは礼儀知らずにも程があるぞ」

「そんなのは承知の上じゃ!!!」

平八の言葉にシャオムウが叫ぶ。続けてブルースが前に出て言う。「アンタが世界虚空情報統制機構と言う軍事組織に支援をしているという情報が入った。よって国家反逆罪及び、統制機構の重要参考人として身柄を拘束する」

「国家反逆罪？」

ブルースの言葉に平八は片方の眉を吊り上げさもおかしそうに笑う。

「アメリカの犬が日本の法を語るとは笑わせるな」

「まあそうかもしれないが、ブルースの言ってる事は正論だな。統制機構は世界公認のテロ軍事組織だ。否が応でもお前を連れて行くぞ」

零児は銃を突きつけながら平八に言う。だが、平八は動じることなく続けた。

「テロか・・・、貴様等にとってはそうかもしれぬがワシにとって

統制機構は金なる木なのでな」

「ふざけるなッ！！！」

突如叫び声があがる、全員その方を見るとシンがいた。そう、シンが叫んだのだ。

「戦争を起こし多くの罪もない人々を虐殺した統制機構アイツらを金なる木だと！？奴等は平和に暮らしていた人々の土地に土足で踏み入り平気で虐殺を繰り返し思い出や夢を壊すイカれた殺人集団だ！今までどれだけの人が！ものが奴等に奪われたか分かってるのかよ！！」

「ッ！？」

シンの言葉にノエルはまるで自分の事のようにショックを受ける。それもそうだ。彼女も派閥が違えど統制機構の人間であるのだから・・・。シンは平八に近づきながら叫んだ。

「そんな奴等に加担するアンタも・・・、アンタのようなヤツがいるから・・・世界はッ！！！」

そう言つて拳を繰り出そうとするも・・・、

「フン！！！！」

「グハッ！！！？」

「シン！」

平八からカウンターを受け吹っ飛ばされてしまふ。それを受け止める零児。そんなシンに平八はあざけるように鼻を鳴らす。

「口の減らぬ餓鬼が・・・年上に対する礼儀と言つのを親に教わらなかったのか？こんなたわけに育ち親もさぞ悲しかろうな」

「な・・・何だと！？」

腹を押さえながら立ち上がるシン。そんなシンに対し平八の暴言はとどまる事を知らなかった。

「いや・・・親の方が相当な阿呆だったか？ハッハッハッハッハ！

！！」

「お前エエエエエエエエエエッ！！！！！」

怒りに身を任せインパルスを起動、平八に斬りかかろうとするも、

あつさりとかわされる。拳を再び叩き込もうとするも・・・、
ガン！！！！

「ぬっ！？」

ノエルにベルヴェルグを向けられている事に気づき咄嗟に避ける。
「三島平八・・・貴方は危険です。だからこの場で拘束させていた
だきます！！！」

そう言つてノエルは再び銃口を平八に向ける。そんなシンとノエルに零児はやれやれ・・・と言いたげに首を振ると、

「俺的には穏便に済ませたかったが・・・しょうがない。抵抗する
のなら力ずくでもお前を拘束する」

「ほう・・・この餓鬼共2匹はともかくお前等はワシの実力を知
っている。それでもなおその言葉を発するのならば挑戦と捉えてい
いかの？」

そう言つて構えながら続ける。その身にはオーラが立ち上つてい
た。

「実は大事な客が来ているのだが中々ここにたどり着かぬから暇を
持て余していたのじゃ。少し、貴様等でウォーミングアップとでも
いこうかの・・・行くぞッ！！！」

平八はそう叫ぶや否や、ノエル達に襲い掛かる。

「ぬっりゃああああああああっ！！！！」

「ぐうううっ！！？」

振り下ろした拳をシールドで防ぐシン。だが、その衝撃は凄まじ
く、足元の床がめり込んでしまう。

「すきありだ！！！！行くぞジル！」

ブルースの掛け声と共に、背後からブルースとジルが銃で平八を
狙おうとするが、

「遅いな」

「な！？グガハアッ！！！！？」

「あぐっ！？」

弾丸を素手で受け止められ呆気にとられている隙に両手の掌底を

喰らい吹っ飛ばされる。

「うおおおおおおおおおおっ！！！」

今度は零児が叫びながら刀で平八に斬りかかる。だが、

「ふん・・・ぬおりやっ！！！」

「な！？しま・・・ぐっ！！！？」

それをかわされた後、蹴りを腹に喰らう。呻きながらよろめく零児。止めとばかり零児に肉薄しようとするも・・・、

「やらせません！！！」

ノエルが零児の援護に入る。銃を乱射するが全てかわされる。

「あ・・・当たらない・・・」

「ぬおおおおおおおおおおおおっ！！！」

あたらない事につるたえるノエルに向かって怒涛の連撃が繰り出される。それを回避するも途切れる事を知らない。だんだんとノエルの体に赤い筋が走っていく。そして、

「ぬうあっ！！！」

「あ・・・きゃああああああああああっ！！！？」

「うわあああああああああっ！！！」

隙を突かれ拳が直撃、零児を巻き込んで吹っ飛んでしまうのだった。

「ぬはははははははははは！他愛も無いのお！！！」

「わかつてはいたが・・・やはり強い・・・」

圧倒的な実力に零児は呻きながら言う。たったの数分で全員ボロボロの状態となってしまうた。正に絶体絶命のピンチである。

「所詮はまだ餓鬼・・・ワシに挑戦するには100年早かったかのう。さあ止めじゃ！！！まずはこの女子から鬺り殺してくれるわ！」

そう言っつてノエルに向かって拳を振り上げようとする平八。迫り来る死にノエルはきつく目をつぶる・・・だが！

「死ぬのは貴様だ！三島平八ッ！！！」

そう言っつて何者かがとび蹴りを喰らわせる。ぬうつ！とそれを飛びのきながらかわす平八。ゆっくりとノエルが目を開けるとそこに

は男が立っていた。青と白で統一されたジャージを着た男であった。顔はどこか平八に似ている。平八は男を見ながらゆっくりと口を開く。

「きおったか、風間仁！」かざまじん

「三島平八……！貴様の背負った罪は重いぞ！」

平八の言葉に男、仁はゆっくりと構えながら続ける。

「今まで散々悪事を行った挙句、まだ懲りずに手を染めていたか！？」

仁の言葉に平八はフンと鼻を鳴らしながら言う。

「何処で聞いたか知らんが、貴様にとってそれはどうでもいいことではないのか？」

「……ああ、そうだ。悪事から手を引いていたとしても俺はお前を倒し、三島家を滅ぼす……！」

「丁度いい、こいつ等では話にならんと思っていた所だ……相手をしてやる、来いッ……！」

そう言っただけで平八はボロボロの零児達を見ながらそう言って仁に挑発する。

「言われずとも……そうするつもりだ！行くぞッ……！」

そう叫ぶと同時に仁は平八に向かって行った。

大ピンチのノエル達の前に現れた男、風間仁。彼と平八の宿命の対決が始まるうとしていたのであった。この戦いの行方は……そしてノエル達の運命はいかに！？

To Be Continued……

EP2-6「愚かなる鉄拳王 中編」(後書き)

いかがだったでしょうか？

今回、平八との戦い。そして平八無双が炸裂しました。のび戦本編でも確実にパーティメンバーの一人が死にますので、それを参考にしたらいつの間にか全滅(?)に・・・どうしてこうなった(ハイドの所為)

そんなノエル達に助っ人が、その名も風間仁が登場。次回は仁と平八の祖父VS孫の対決となります。楽しみに待っていてくださいね。それでは(owo)ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5350i/>

BLAZBLUE - のび太戦記異聞録 -

2011年8月6日09時14分発行